

新しい家庭科

わく

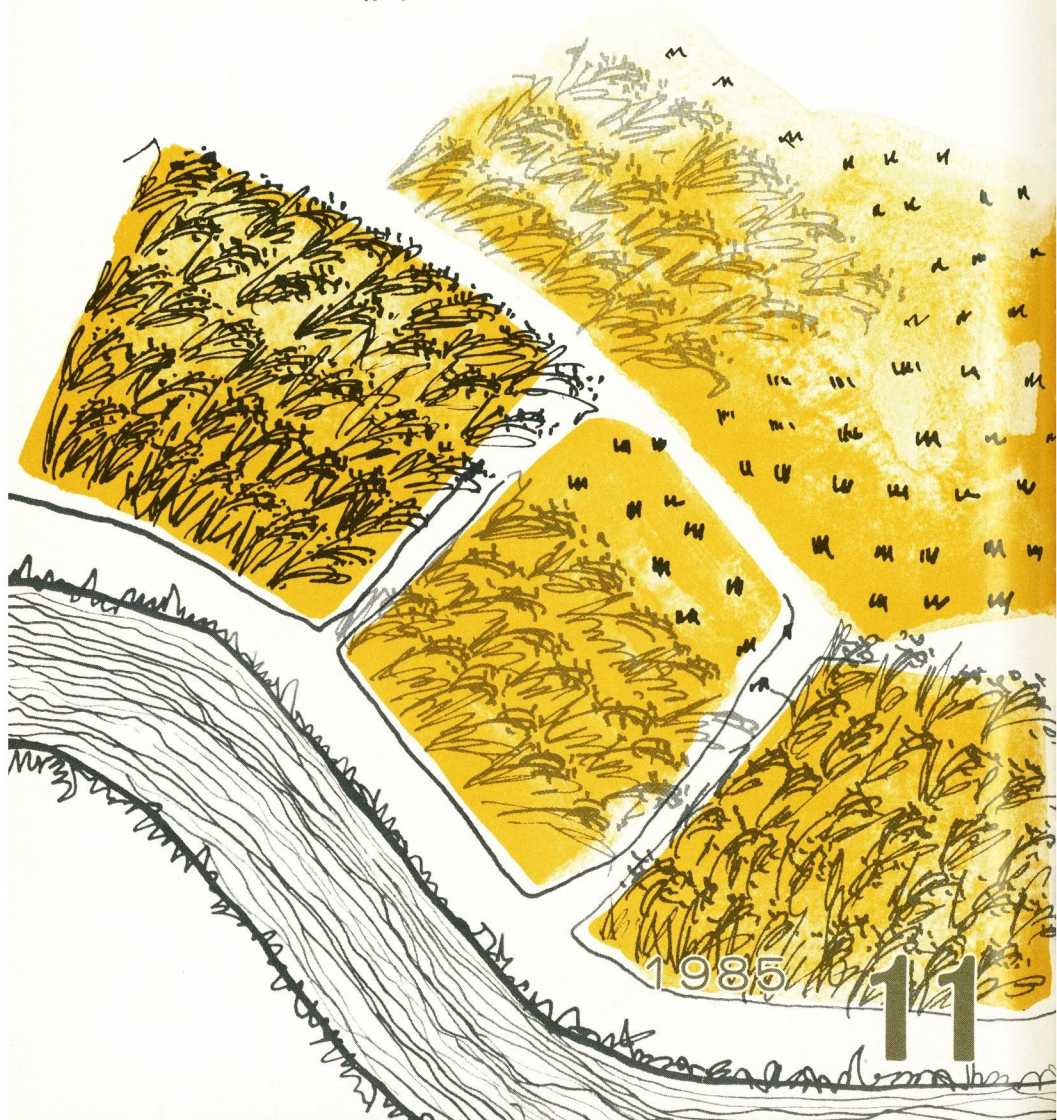
ウ イ

みのりの秋に

逐次刊行物

昭 60.10.20 和

国立婦人教育会館
情報図書室



1985

11



菊の花香る、文化の日。

文化行政の貧困なわが国にも文化の日があります。

おとしよりの文化人をお祝いする日です。若い人たちの内外の文化留学生も大切にしたいと思っています。特に芸術分野では外国に比べて経済大国が恥ずかしいくらい最底です。

季節もよいせいか結婚式も花盛りです。

離婚率もアメリカ並みになったせいか、結婚も簡単にするようになりました。

だが式は豪華絢爛となり、こちらが気恥ずかしくなるようなホテルの演技過剰さにうんざりします。

もう旧くなつたが吉田拓郎のロマンチックな「結婚しようよ」のフオークソングに乗って教会の結婚式も多くなりました。中にはわざわざ外国にまで行き、教会で式をあげるオメタイ方々もあります。

新婚のばら色の夢は未ながく続けて欲しいと思います。

(田沢 茂)

みのりの秋と私

森崎 和江

私が子どものころは「みのりの秋」という言葉そのままに、田は黄金にみのり、山には栗や松茸や柿の実がふんだんに採れて、秋は祭りとともに私たちをたのしませてくれました。が、今日このごろ、子どもたちはこんな言葉を聞くとまどうことでしょう。幼児のころの秋の記憶がなければ私とて理解しがたいと思います。それほど、季節にかかわりなく植物もみのりをもたらずようになりました。また、私たちも働かなくなつて来ています。みのりの秋は、労働の夏を経てこそ、実感として生活者のもとにやつてくる秋だったのですから。

とはいえ、そのことを知つたのは、近年のことです。それまでは自然のめぐみとして山野のみのりを受けとる幸せしか念頭になかつたといつていいでしょう。私は土を耕して作物を実らせたことはなく、その作物を素材にして味噌醬油を作つたこともありません。つまり、ほんとうのところ、この言葉にこもっている飢えと背中合わせになつている労働のよろこびがわかつてはいませんでした。

日本の專業農家は激減しました。が、飢えのおそれも遠くなりました。このところ私は夏の間しつかり汗をかきながら執筆する年がつづいています。自分自身の力でもたらすことができる秋のみのりは、私にはこのことしかありません。が、一人一人の内部で耕やす見えない大地。それは広大な、そして共有の大自然につながるものだろうと思つていきます。

(作家)

 みのりの秋に

〈巻頭言〉みのりの秋と私……………森崎 和江 1

❀ 特 集 ❀

かにた婦人の村から	深津 春子	4
みのりの秋のつれづれ記	柳田 耕一	9
農の文化	佐藤 正	14
農からの発想	星 寛治	19

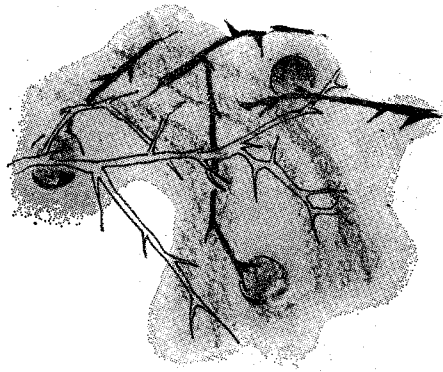
❀ 発 言 ❀

学習の主人公たち はたらいっているよ

岐阜県揖斐郡春日村古屋分校の子どもたち……………	52
屋久島に移り住んで……………手塚 賢至	59
宙ぶらりん悶々族のささやかな行動……………高橋 泰子	59
私の畑作レポート……………小平 陽一	61
私たちの望む共修家庭科の内容を私たちでつくろう！…石川 由紀	62
子育ての中で……………北谷 瑞恵	64
いま、家政学に何が求められているか(2)……………武藤 朋子	66

* * *

Weのレポート 舩倉島の海女……………馬場 洋子 80



○情報 教課審スタート、家庭科必修を答申させよう 85
 ○アンケート結果 82
 ○波 運動の小さな赤い実 半田たつ子 86
 ○ひと 鈴木みどりさん 45

表紙デザイン 加藤由美子
 目次イラスト 馬場洋子
 本文イラスト 編集部

❀ 新しい家庭科を創るために ❀

- | | | |
|--------|---------------------------|----|
| 小学校では | ひとり立ちができ、思いやりの心を持つ子どもを願って | |
| | …西垣邦子、野澤とみゑ、清水恵子 | 25 |
| 中学校では | 生徒から教えられたこと…橋本登志子 | 30 |
| 高等学校では | 忘れられない実践Ⅱ……………森 幸枝 | 35 |
| 大学では | 家庭科、男女共学の時代を迎えて | |
| | ……………佐藤 慶子 | 41 |

❀ 連 載 ❀

- | | | |
|----------------------|----------------------------------|----|
| 遊びの風物詩 | ……………田沢 茂 | |
| 教室の窓 | 感動……………植垣 一彦 | 46 |
| カウンセリングの応用
—現場から— | 「共に生きる」その1……………児玉すみ子 | 48 |
| 霞通信 | 夕風に吹かれて……………武田 秀夫 | 50 |
| 男の台所 | イワシの唐揚げモヤシ添え…高瀬 育 | 70 |
| 政治の目 | 国勢調査に異議あり……………宮本なおみ | 72 |
| 土 | 収穫の秋、来たる……………五十嵐愛子 | 73 |
| Weのブックランド | おとなの旅・好奇心の旅……………長谷川公一 | 74 |
| フェミニスト・テレビ考 | テレビからの情報……………鈴木みどり | 75 |
| おとなって… | 葬式ってだれのもの？
……………文・松本のり子、絵・松本哉 | 76 |
| 思えば思われる物語 | 生活即学習……………丸山 光子 | 77 |

○“We” EDITOR'S NOTE 96 ○アンテナ 94 ○十字路 92
 ○この号をよむために 79

かにた婦人の村から

深 津 春 子



いまから二〇年前、私たちは東京の郊外、大泉学園町にある、いずみ寮から、二〇名近くの娘たちを、ごっそり引きつれ、さらに全国の婦人保護施設から、「最低」とランクづけられた人たちを、三々五々受け入れ、定員百名、日本でただ一つの長期収容施設かにた婦人の村を南房・館山の海の見える丘の上に創設した。

なぜ都落ちしたのか。

いずみ寮七年間の苦い経験の末、いくらお説教しても、一緒に寝起きし、生活訓練をしても、一步そとに出れば赤提灯がぶらさがり、消費者が待っている町なかでは、とうてい、この深い汚れを洗うことは出来ないことがわかったから。

(ここではダメだ。もっと広い、汚染されていない土地へ行こう。そこを、乳と蜜のしたたるところにして、生まれたば

かりの嬰兒みどりごのように洗いなおそう。

長い時間をかければ、きっとできる。

生まれながらの売春婦ってありえないんだから……)

周囲の人たちは危ぶんだ。

(そんなもの、作って大丈夫ですか?)

(ヘドロのようなものばかり集めて、一体、何ができるんですか?)

一九六五年四月一日、大きな期待と不安のなか、かにた婦人の村は開村、二六日開所式。

朝からKは、肥ったからだのノドを全開して、ドスのきいた低い声を張りあげ怒鳴っている。しまいには、義足を振り

あげ、友達に殴りかかった。

鍵も、門も、塀もないこの村の何処に、彼女をおくことができるか。急きよ、精神科にあずかつてもらい、一一時からの式を始めた始末。

三笠宮様を迎え、各界代表が、遠近からゾクゾク集まり、晴れがましい開所式を行ったが、本当に危い芸当であった。

「おめでとう、おめでとう。よくやりましたね」

多くの人たちから祝福を受けながらも、実際のところ、一体これから先、何時、どんなハプニングが起こるかわからない大きな不安の前に立っていた。

(こんな淋しい山の中なんか、おもしろくない)

(だまされて、つれてこられた)

(テレビがない)

(タバコ、だめ?)

(週刊誌、だめ?)

(町の灯が、恋しいよ)

(そとへ出て、飲屋で働きたい)

毎日のように、ワンワンと両の耳に、村人の不満・不平が聞こえてくる。

飛び出して行方不明、道に迷って帰れない。搜索に行く。私たちは二四時間、気のやすまる時がなかった。

一年間に全国から選抜されて集まった人たちは八七名。平均IQ五三。精神薄弱者・精神病者・精神病寛解者・精神病質者・身体障害者・身体虚弱者。しかも、売春防止法という法律の網にかななければ措置されないと……。

おおむね、ひとりで、二重、三重のハンディキャップを背負っていた。

第一の試練は開所式後一週間たってやってきた。

五月三日、午後より房総沖を低気圧が通り、物凄い雨量となる。一番遠い居住棟Fへの道が崖くずれで通れなくなった。管理棟前の坂道も、滝のように流れる雨水で溝があふれ、その下にあるABCの三寮があぶない。

施設長以下全職員は、ずぶぬれになり、排水溝を掘り、水の道を作って難をのがれた。

その後、崖くずれは今日に至るまで、大小何回となく起き悩まされつづけるのであるが、山をけずって、やっと建物をのせた、今でいえば不法建築というわけである。

民間の社会福祉事業のかなしさで、土地は自前、建築費は四分の一まで自前、あとの四分の三は国庫補助。といってもそれは最低の規準で、あまりにも魅力とぼしく、みすばらしい。結局、自前を倍・三倍と増やさざるをえない。

とても完璧な宅地造成まで手が回らない。しかも建築費の

六〇%の借入金をかかえていた。

そこで、出来る限り、自分たちで擁壁を積みあげ、道をひらき、階段を作ろうと決心する。そうすれば、材料費だけで済む。

これが、その後、いかに村人の共同意識を高め、働くことの喜びを体得させたか、計り知れない。

未完成、いつまでもつづく開拓は、逆手にとれば村人の隠された能力（知能指数では計れない）を目覚めさせた。

負けおしみを言うわけではないが、もし仮に、何億というバカデカイ予算をとり、すべてが完備した国立コロニーであったなら、この村人は、元の怠惰な生活から脱出できなかったであろう。

も一つ、最大の見込み違いは「水」であった。

婦人の村が館山と決まったときから市の助役が念を押した。

「水がないですよ、あそこは……」

しかし水道をひく金がない。

果たせるかな、一二〇米のサク泉は間に合わず、夏前から水不足がはつきりしてきた。

水は炊事を最優先とし、村人の生活用水はバケツ一杯、洗濯はカニタ川まで下りたり、幸にも旧海軍の掘った洞窟の中に溜っていた水を使った。

入浴は各寮毎、日を決め、寮母引率で町の銭湯まで歩いていく。

せつかく汗を流してきれいになったからだ、帰途、埃にまみれた。

あるとき、一緒に入っていた女が、熱湯をわざと流してよこした。さらに一人の寮生にそれをひっかけたという。

けんかつ早いSは、その女の人とやり合い、浴場で一騒動起こした。

漁港附近には何軒も飲屋がある。海千山千のSは、その飲屋のおかみに食いつき、病人は銭湯に連れて来ていないと言いつ張る（事実その通りであった）。

ポランティアとして生花を教えにきていた市の女子職員が見かねて、市の水道課にこの実状を話してくれた。

市当局が追加予算をとると決議したのは翌年の六月二四日。

（さあ、いよいよ、わが村にも水道が入る）

一同小おどりしてよろこんだ。

早速その日の午後、村中の人が立ち上がり、坂の入口に受水槽を作ろうと、手に手にスコップ、バケツ、ツルハシを持って集まった。

容積は二米×三米×二米、しかし実際にはその倍は掘らな

ければならない。

皆若かった。施設長の先導でツルハシを振り上げる。

山は脆い女岩おんないわなのに麓は固い固い岩盤であつた。

この穴掘り作業は、不可能を可能にした。寮内で座つて手仕事しかやれないといつていた人たちが、皆、狩り出され、バケツリレーに加わる。

来る日も来る日もツルハシを振り、スコップで固い岩にいどんだ。掘つた土や岩をバケツリレーで低い土地にうめる。

(水が来るんだ、水が来るんだ)

お互いに心のなかで励まし合いながら炎天下で働いた。

着ているシャツは、すぐ汗で膚にくっつく。手拭やタオルを首から下げ、汗を拭きふきよくがんばつた。

受水槽作りの汗は、彼女たちの心身の汚濁を絞り出すように吹き出た。

このように、崖くずれの後片づけ、水槽掘り、危険個所の擁壁作りのバケツリレーが、どんな人をも巻き込んで、やれば出来るという自信と誇りをもたらしした。

世にいう「作業療法」、その効用の枠をふきとばし、生き生きとほとばしる生命いのちそのものに見えた。

作業といえ、この二〇年の間に次第に充実して、一班から一二班まで、その時々が必要に応じて生まれていった。

毛糸ほどこき、編物、中古衣料の仕分けと簡単な再生、調

理、手伝い、皿洗い、掃除、陶芸、製菓、製パン、洗濯、アイロンかけ、ペンキ塗り、介護助手、農園係等。

農園は更に農業、畜産、養鶏、果樹、土木と、仕事は多岐にわたる。

一九名の職員と、働ける七〇名余りの寮生がフル回転しても追いつかないほど仕事がある。開村当時を思い起こすと、夢のようだ。

当初は米屋がブレンドした半搗米の不味さに憤り、今では百パーセント自家生産米にこぎつけ、安心して玄米を食べている。種子をまき大豆を収穫して味噌もねかせる。みな、近隣の休耕田の活用である。

二年目に植えた甘夏は食べきれない。昨年から後援会員に反対給付として発送をはじめ、ワックスがかかつていないのでママレードが作れると喜ばれている。

家族の一員として愛されている乳牛からは、毎朝の食卓にかかさず乳とバターをもらい、夏には冷たいヨーグルト、時にはカテージチーズ・ナチュラルチーズも並ぶ。一人として専門家はいない。試行錯誤の結晶である。

試行錯誤といえ、ハム・ソーセージ・ベーコンには目下のところアタック最中、会心の作とまではいいていない。情熱はあるのだが、片手間にやるためである。

しかし豚肉は昼食のメインディッシュとなり、少々固いの
が難だが、市販のとくらべて味は最高。

クリスマス前には、オスの仔牛に、その身を捧げてもらい
年に一度の御馳走を作る。

赤玉の有精卵は貴重品で門外不出。週一度、朝食に固茹玉
子の白味をミジン切り黄味を裏ごししてマヨネーズで和えた
ものを出す。夏の夜店には本物のアイスクリーム屋が出店。

時おり見学にくる人たちは言う。

(優雅で、うらやましい……)

しかし、誰が、真冬の未だ暗いうちから五時起きして、フ
ラッシュを片手に山にのぼり、太陽熱のお湯を更に熱くして
職員の搾乳の下準備をするか、糞尿にまみれ、角スコを使っ
て牛舎や豚舎の掃除をするか。また、米の収穫までのあの苦
闘……。それらをつぶさに経験してこそ、人間の生の営みが
なんであるかを知るのである。

一方、秋から冬にかけ、山に踏み入り、林の日だまりから
落葉をかき集め堆肥作り。やがて木々の芽ぶきを仰ぐ春から
新緑にうつるころ、ミツバや芹を摘み、山の路を抱きかかえ
て帰り、キャラプキにしたらう。山百合や、甘夏の花の香
にむせ、さつま芋の苗を植え、しなければならぬ仕事が次
次と待ちかまえて、自然のリズムに乗り、それと一体となつて

生活するとき、ふしぎなことに、何か傷口がかわき、カサブ
タがぼろぼろとはげておち、新しい皮膚が生まれてくる。

自然は彼女たちを瞞さない、売りとばさない、そればかり
か、さまざまの恵みを、時をたがえず豊かに与えてくれる。
彼女たちが飽きるまで。だから、さもしくない、信頼にみち
て明るい、虚飾がない、身構えていない、心が文字通り自然
なのである。

人、呼んで、カニタを「弱者の楽園」という。では誰が強
者か？ 強者はいない。ただ隣り合わせた人が、足りないところ
に手を貸すだけだ。文字通り一緒に住んで働き、食べ、
喜びも悲しみも、苦しきも、ともにする共同体なのだ。

そのうちに蜜蜂を飼うことにしようか。

(ふかつ・はるこ かにた婦人の村)

みのりの秋のつれづれ記



柳 田 耕 一

今年もまたカライモがうまい。水俣を含め熊本一帯ではサツマイモとは呼ばずカライモと呼ぶ。幼児語だと略してカンモとなる。朝の御飯の時、小さく割って米と炊き込むと子供たちは喜んで食べる。味噌汁にはこの頃、サトイモが毎日のように入っている。このサトイモも子供たちの大好物で、いつもはいやいやすすっているのに、サトイモが入っているとおかわりをするほどである。

カライモにしろ、サトイモにしろ（やつぱり里芋と書こうサトイモでは書いていて、どうも味気がない）水俣生活学校の畑でとれたものである。公害の原点、水俣の地で新しい学び合いの場を作ろうということで始った水俣生活学校もはや四回目の秋を迎えた。唐芋を四回、収穫した訳である。

今年、唐芋は三ヶ所に植えた。一トン近いイモの使い道は自給用はもちろんだが、学校債券を買ってくれた人にも半分以上は送らねばなるまいと思っている。去年みたいに他の作物が出来るのを待っていると、油断して霜にやられてしまうので、単品でも仕方ない、近目中に発送しようと考えている。中にはあいさつ文だけでなく、いきなり団子の作り方など水俣ならではの料理法をビラにして同封するつもりである。そんなこんなで忙しい上、そろそろ一年の中で一番の行事である収穫祭も近まっているし、とにかく実りの秋は忙しかあ！。

水俣生活学校の日常は農作業と自分で選んだ課題学習と定

例の学習会が三本柱だが、時間のとられ方では農作業が最も多い。農作業でも全員でとり組むのと、自分で選んだ作物を自分の責任で一から十まで面倒みるのと二通りある。協同でするのは米・唐芋・馬鈴薯など面積の広いもので、ホーレン草とかニンニクは各自が好きにやっている。中には同じ作物を三人が別々に育てていたりすることもある。打合せが良くいっていないのではなく、それぞれに挑戦しているのだ。挑戦しても成功するとは限らず、この四年間誰がやっても失敗を重ねているのはスイカである。スイカの無農薬栽培など至難中の至難であるにもかかわらず、農薬を使おうとは誰もしない。概して根菜類はあまり難なく出来るようだが、葉物はなかなかであり、虫だらけの白菜やキャベツの畑が毎年登場することになる。水であらったつもりでも、水炊きや味噌汁の中に小さな虫が浮いていることなどざらだ。

水俣にある学校ではあるが、地元からの参加と言えば若い水俣病の患者だけで（正確には水俣出身の青年が一人いた）殆どは都会の青年たちが、入学金二五万円を携えてやって来る。これまでの四年間に合わせて四六人の参加があった。年齢では一六歳から四一歳までだが、この他に親に連れられて来た子供も四人いた。ここに来るまでの職歴や学歴もまちまちだ。高校や大学を卒業と同時に来た人が九人。中退したり休学して来た人が五人。職歴で多いのは教師の五人、他はそ

れこそ種種雑多な寄り集りである。

四六人のうち農家の出身もいるにはいたが、農家の体験らしき体験をしている者はいなかった。そうであれば、いくら意欲があつたとしても、そうそううまくいく筈はない。最初の種まき・発芽と初期成長までは種のもっている生命力でかつてに育つのだからうまくいく。いくに決まっているのだ。しかし初体験の連中にしてみれば「やつたあ!」という按配なのである。それだけで興奮する。考えれば、あの硬いものが重い土をおしあげ、神経のようなやわらかい白い芽を天に向けてつきあげてくるのだから不思議そのものである。稲の幼芽が朝靄に出揃った様など、それこそ目を洗ってくれる。その不思議の実現もすぐに難関が待ち構えており、あつと言う間に自然界の掟にとりまかれるのである。それどころか山羊やニワトリ、人の足など、身内からさえも災をこうむり、ある時にはピーマンが草とまちがえられて抜かれたことさえあつた。

公害の原点、水俣で体験する農業であれば何としても農薬なしでやりたい。ニワトリも夕方くらいは外に出してやりたい。山羊も小屋に入れた放しでは可愛そうだ。化学肥料にも抵抗あるしなあ。……というわけで、ここでは完全に無農薬栽培である。肥料も堆肥や鶏糞が殆どで、いわゆる有機農業を営んでいる。しかし、思ひはあつても、形はあつても実

質となると初心者には初心者であり、一年でそうそう手が上がるものではない。かりに一つの作物がうまくいったとしても他のはダメで、ダメになった方を何とかたて直そうとすれば、うまくいった方もダメになってしまふのが常である。自主管理のやり方と言えば聞こえはいいが、スイカはいつまでも食えないのである。

私を含め専従の職員が三人いて、他に助手が一人いる。このうち二人は生活学校のOB生である。私が校番ということでは代表者の顔はしているが、水俣病患者運動にも十四年余りかかわっているため会合や裁判や打合せといった用が多く、一年のうち半分くらいしか学校にはいない。それでも生まれが農家で、しかも他の家に比べ手伝いには厳しい父親だったため、基本は心得ているつもりである。一応この参加者の初歩的な相談くらいにはのつている。

とは言え、私が目のあたりにして来た農業と言うのは化学肥料や農業が全盛の時代であり、有畜複合経営が農業近代化政策によって年ごとに専業経営に様変わりする頃であった。農業高校にも進んだが、近代的農業に対する問題意識など、微塵もなかった。逆説めくが、農業高校に三年もかけて通ったのが逆効果だったのかも知れない。

高校の教師が教え込む農業とは、百姓ではなく産業としての農業にあった。その大黒柱は農業経営学にあり、労働力と

資本の効率化が至上命題であり、その計測概念として資本回転率や資本利益率があった。これを高率化、高速化させるためには農業機械の大型化と稼働時間の長期化、つまりは規模拡大が重んじられた。一方でビニールハウスによるスイカ栽培に象徴されるように、あくなき品種改良、栽培技術の工夫、労働の集約化が求められた。それでも当時は教師たちの口から出てくるこのような言葉が魅力的であった。

それから十六年、現実はどうかと問えば、過労から肝硬変で死んだ者一人、トラクター事故で死んだ者一人、都市化の波で転業したもの十人、卒業の時点で他の職業に就いたもの及び進学した者九人である。当時私の農業高校は全国一の就農率を誇っていたが、今ではその半分にみえない四割しか就農していないときく。この夏、同級生の中でも屈指の優秀な経営を築き上げて来た親友の身の上に大事件がおきた。父親の保証倒れである。その総額四億円。いくら彼が優秀であったとしても酪農業でどうにか出来る額ではない。この話は夏の同窓会の折、皆の間に広がった。そして今も農業を営むクラスメートの中にいやな話として残った。誰もが同じような状況に立たされているからである。経営の大型化は同時に借金的大型化を意味していたし、親せき、友人同士で連帯保証人になっているのだった。

一見、強固に見える一人一人の経営も彼らの身の上に何か

起れば瞬時に瓦解せざるを得ない不安定な日常である。トラクター事故で嫁さんの目前で圧死した級友の死はそれを物語っていた。葬式の日、彼の村をたずねると、どの農家にもアメリカ製の農業機械が倉庫にひしめき、アメリカのエサや種が積まれていた。そしてアメリカの生命保険会社の看板まで立っていた。

こんな事件もあって私の学校に集って来る参加者やOBに大規模農業をすすめようとは決して思わない。ここでの営みがいかに初歩的であっても、初歩的であるからこそ得ることの出来るものの中に種を発見するべきだと思っている。

種だと書いて大事なことに思い当る。

生活学校の畑はとに角賑やかである。一つの畑に多いところだと二〇も作物が植えられている。二列三列と思いいきに植え付けていくからである。水田でも同じだ。今年初めてのことにして一番の湿田に蓮根とクワイを植えた。その間に糯米も一寸だけ植えた（というより遊んだというべきか）。それから蓮根やクワイの事が気になり近くの水田を通る際注意して見ているが、どこにも一枚としてこんなものを植えているところは無い。地区の農業委員氏に聞けば、戦後しばらくは水俣でも見かけたが、この二〇年全く見ていないということであった。クワイについては名前さえ知らない人ばかりで

ある（元来、熊本ではクワイは植えていない）。そんな訳で、近くの人たちが学校の水田に植わった蓮根を見ては足をとめている。知り合いの寺にハスの花を盂蘭盆にもつていたら五〇年ぶりだと言って住職も喜んでくれ、早速プラスチック製のそれとさしかえてくれた。

こんな按配で、効率的経営を目指さない非近代農業の生活学校には色々珍らしいものが育っている。それは植物だけではない。近代農業が忘れて来たもの、捨ててきたものがここには何故か次々と集まってくる。

今年作ったものでは他には糯糖黍ももちきびがある。初めて作って、食べて感嘆の声を上げた。ねばり気があって味は逸品であった。この種をどこから手に入れたかと言えば五木村の五家荘であった。数年後にはダムの湖底に沈むという農家の解体をした際、小屋の中に保存してあった代物だ。近くの老人たちでさえ珍らしがったり、なつかしがったりした。身の丈は普通のものに比べ低く、実も小さく甘くはない。しかし味のよさは格別である。市販のハニーバンタムとか、イエローデントコーンに比べると甘みや粒揃いや収量では負けるが、唐黍本来のうまさでは逸品である。

さて本題だが、この唐黍の話をしていた時、六〇過ぎの知合いのおばさんが言った。「こん頃の唐黍はどしこ乾燥させて保存しておいても芽の出らんが、何してだろうか？」と。お

ばさんはこの数年、町の種物屋から袋に入った唐黍の種を買って来ていたのだった。つまり今問題になっている、ハイブリッドの種だったのである。これだといくら乾燥をきかせてもしほむばかりで芽が出る訳はない。かりに芽が出たとしても実はつけないのである。一代限りの種である。そのかわり高品質で多収ときている。近代育種学がのぼりつめたところで逆説というか、寓話的現実が出現したのである。

人類の歴史、いやそれどころか生物の歴史の中で実と種の分裂がはじめて起こりつつあるのだ。実ではあっても種にならない実？を私たちは手にしているのである。おばさんたちはそんな事を知る由もなく、生れてこのかたやって来た通りの方法で春になれば種をまき、夏になれば実を食べ、その中からいいものを残し秋になれば種として保存してきたのである。その故も知らずハニーバンタムの種が小さな小屋の隅にかけられていたりすると物悲しくなる。それは生活学校でもしばしおこる。ハイブリッドのプロッコリーから種をとろうと、いつまでも花を残してあったりする。それどころではない、今や牛や豚やニワトリでさえも受精能力のないハイブリッド種全盛の時代なのである。それを食べ続けることでこの身を支える私たちの人生とは一体何なのであろうか。人生のハイブリッド化、ハイブリッド人生ということも考えられるのではないだろうか。空恐ろしいことだ。

それはさておき、今は生活学校の裏の軒下に吊されたまま夕陽にあたる糯唐黍を見ていると、何となく心豊かになってくる。在来種や原種のもつ生命力のたしかさがもたらしてくれる安心である。生活学校に集ってきたのは唐黍だけではない。これもゴマの中では抜群の味の金胡麻、今は幻の米と言われる旭、身の丈が五メートルにもなる馬鹿小豆、根ではなく茎を食べるト芋や正体不明の奥さん豆とかである。

祭りの練習に吹く娘の笛に耳を奪われながら、白や黄や紫の糯唐黍の種を手にながらしきりに思うことがある。それは金はある余るほどあっても種のない社会を選ぶのか、金は足りないが、あり余るほどの種をもつ社会を選ぶのか。

一年で最大の行事、収穫祭は今年も11月23、24日の両日を用意している。村の中からも一年一年参加してくれる人がふえたとし、子供たちが何よりも楽しみにしているのが嬉しい。今年も手作りのドブクロを皆にふるまうつもりである。読者の皆さんもどうぞ。

(やなぎだ・こういち 水俣生活学校校番)

農の文化

— 藁について —

佐藤 正



農民が藁を捨てるようになってから四分の一世紀近くもたつてしまった。あんなに用途の広がった藁が、またたくうちに、農家にとって大きな邪魔物に変化してしまったのである。「稲づくり」という言葉が秋になるといつしか「米の収穫」という言葉に変わり、藁となる稲の茎は土と米をつなぐ単純な栄養パイプとして取り扱われ、藁という名前さえ冠せられないまま、土への早期すき込み、もしくは火を放たれて煙となり姿を消してしまうのである。「惜しいなア！」という気持ちに胸の痛む思いをするのだが、藁なんかにまっつてはおれない勤め人農家の実情と、出来るだけ農家風ではなく都会風・月給取り風に装いたいという意識が重なり合う中で、藁は葬り去られているのである。

一本の藁は、外側から「しべ」「茎」「みこ」の三種類に分類することができる。縄ない、藁沓づくり、俵編み、筵織りなど、いわゆる藁細工用のものは、しべを取り除いた茎みごの部分を使用した。この部分は藁の組成の中心部分で、とくに良い米を稔らしたものは、カチカチとかな鳴りをし、なにつくつても丈夫で、しかも美しい光沢があったものだ。しべは茎を包む柔かい鞘のようなもので、それを刻んで牛馬の粗飼料としたのである。みごは米粒をつけた芯で、いわゆるみご縄の材料であり、紡績糸に劣らぬ強さで農耕具の要所要所を締める必需品として活用されてきたのである。

そこで私は、かつて農民たち（私の祖先たち）が、藁をどのように活用して生きて来たかをかいつまんで述べてみたい。

まづ住居の關係では、屋根の骨組みをしつかりと太縄で結び、その上に藁や茅をたつぷりとくくりつけて屋根を葺いたのである。丹念に鉄を入れ、見事な稜線の上にどしりとした鞍木を置き、斜めに切り下がる屋根の姿は、土の上に自立する農民の象徴でもあったのである。一本一本の藁や茅はその小さな穴を通して自然の空調装置となり、夏は涼しく冬は暖かくという住む者に便を与えつづけてきたのである。また、雪国にとつてもつとも大切な雪囲いの材料も藁であつたのだ。廂^{しやう}を張り出し、軒下まで周囲を包み上げ、雨戸ガラス戸を雪の圧力から防ぎ、掛けゴモを二条三条と戸口に垂らし、尺余の雪を朝毎に踏みつけて道をつけるのも藁でつくつた踏み俵であつたのである。内には、藁で織つた蓆を敷き、囲炉裏に太いカギ縄をつるし、寢床にはたつぷりと床藁を入れ、しべ布団をつくり、ごうごうと吹きつける吹雪の音に身を縮めながらも、祖母の語る昔語りの中でいつしか小さい夢の世界へ入つていったものであつた。

食の關係でも藁の活用は多かつた。朝、かまどで飯を焚く燃料のおおかたは、みごを抜いたあとの藁であつた。その煙が藁屋根深く充滿し、やがて天窓から紫色の煙が外側に向かつて流れるとき、今日もまだ生きているぞという証にもなつていたのである。焚いたあとには灰が残る。その灰をていねいにとつて袋に入れ、ワラビなどのあく、抜きや、干し数の子

などを大きく滑らかにするための浸しに使われた。また、水屋の流し台の隅に置き、藁もだら（たわし）につけて鍋や食器の汚れ落としの役にも立つたのである。洗濯にもこの灰汁（あく）が日常的に使われた。箆^{まき}に藁灰を山盛りに入れ、上から熱湯をかけると黒い汁が洗い桶にしたたり、泥のついた仕事着や子供たちの着物などを浸し洗つたのである。煮豆を藁つとに入れ、深々とした藁の床に入れて納豆をつくつた。麦芽をつくる時も麴をつくる時も、小箱の底に藁で編んだ小さなコモを敷いてムロに入れた。梁やため池で獲つた川魚や鮎などは、囲炉裏火で焼いたあと、藁でつくつたベンケイに刺して吊るし、大切な保存蚕白源としての役割を果たしたのである。夕方、囲炉裏の中の「わたし」（焼器）には小藁が敷かれ、その上で魚が焼かれた。ニギリ飯を焼く時も小藁の上で焼かれた。遠足の日、ホカホカと母の掌のように背中にひろがるニギリ飯のぬくもりに、言いしれぬ心の広がりを感じながら、小藁の焼け跡のついたきつね色の飯を大きく頬ばつたものであつた。

こうした面もさることながら、藁の大切さは、農業の貴重な生産手段として活用されてきたということである。牛馬を農耕の要としてきた農業は、藁で家畜を養い、家畜の敷き藁を堆肥として大地に還元して土壌を肥やし、更に作物を豊かに稔らし続けてきたことを忘れてはならないと思う。藁で牛

馬を養うということは、牛馬の所持する力を最大限に引き出すことなのである。その牛馬の力とは、犁^{うが}をひいて土を掘り起こし、馬銚^{うし}をひいて土を砕き、櫓^{うし}や車をひいて荷を運ぶ力とともに、育てることによってその生体の価値を高め、子を生むことによってさらにその価値を増増し、声を発し身振りを示して人間と共存し、更にその凛性を發揮して農民を勇気づけてきた力なのである。機械はたしかに高能率ではある。

しかし、いくらガソリンや石油をつぎたしても製造規格以上のものにはならない。いや逆にその耐用年数に従い、短年月のうちに、その価値が急加速的に減少するのである。ましてや藁や草をいくらかおいしく調理調合したとしても、牛馬のように目を細めて体内のエネルギーのために摂るなどということは、けっしてない物体なのである。藁で育てた牛や馬が、交換の時期によっていくばくかの利益を生む時、アラビアの砂漠の底の油で動かした、仕末に困る鉄のかたまりが、いかに農民を苦しめているか深刻な状態に立ちいたっているのである。農の根幹の狂いはここに起因すると言っても過言ではないであろう。

農民の藁を使った創意と工夫は、牛馬を対象に最も高度に發揮されてきたのである。ひき鞍、荷鞍、馬耕鞍の作成がそれであった。鞍の良否が農耕の良否につながり、生活の全体を左右したからである。それは藁やみごの最もよいものを柔

かく打ち、二枚編みと編み重ね、馬の胸や背中^{うで}の形に従いながら、ある部分は太く、ある部分は厚く、細く、薄く、かたく、柔かく、老練な農の手さばきと、祈りによってつくられたものであった。貧しい経済力がこうした分業を生むことが出来なかったという評もあるが、その家のその牛馬の背中に吸いつくように作るためには、レディーメイドでは決して役に立たなかったのである。

農民の体もまた藁によって守られていた。ケラ（蓑）、猫ガラ、荷縄、車や櫓をひく時の肩あて、ハバキ、素ワラジ、足なか、シンペタラ、サンペタラ、シベワラジ、クツワラジなどなど数えきれないものがあつた。

荷を背負って立ち上がり、荷をひいて前進し、土をなで、膝を折り、腰をかがめ、伏し、起ち、踏み出す農作業の中で、五体のふし鳴りを支え、したたるような汗を吸いとるためにも藁があつたのである。

藁はまた農民の大切な教材であつた。父や母をはじめ家中の人々が、織る、編む、紉^{ぬい}うそのそばで、見よう見真似でおぼえた最初のものは縄^ないであつたのである。小さな霜やけの手が、たどたと掌でなうことを覚えたときの、その顔の晴れがましき。家中の人々から賞められたあのうれしさ。祖母が煮えたぎる囲炉裏の鍋の中から突き刺してくれたジャガ芋の味とあの暖かさは、子どもの中にしっかりとした自信を

うえつけたものであった。

覚えるためにはよく観なければならなかった。観ることをくり返す中ではじめて自分の技術になっていくのである。柔かく打たれた藁は、少年たちの指と掌を勇気づけ、風土のきびしさが、さらに高い技術と、強じんな生命力を養うことに結びついてきたのである。

昭和初期、世界恐慌の荒波とそのしわ寄せをまともにかぶせられた農民たちは、その苦難を藁細工と娘の身売りによってきり抜けてきたのである。鉋さいを運ぶカマス織り、上米を二重巻きするゲバ莖織り、ともに一枚二〇銭。村一番の器用者でも朝から夜まで織って一〇枚が限度であった。縄、小手縄（みご縄）はもちろんのこと、売るものとしてない農民たちがぎりぎりの生活を支えるため、藁を織り藁を縛って命をつないだのであった。

そして藁は、農民の抵抗の武器でもあったのである。地主のとりたてに素早く身をかくし、国の強権発動に剋復をかくし、ドブロクをじっくり発酵させたのも藁だったのである。

また、荒れ狂う川の流れも、次から次へと繰り出す土のうの山で防ぎ、火事があれば、たちまち焼け残った柱を縄で組み立て、藁で屋根を葺き、ムシロ、かけゴモを持ち寄って共同体を守りつけてきたのである。

そして、平らに敷いたムシロの上で、どうしてもくらしを

支えきれなくなったとき、それが鮮かに垂直に立てられ、ホラ貝とともに鍬や鎌の戦列の先頭に立つて、ひたひたと白壁の館に迫り、歴史を発展させる力となってきたのである。

いま、農の文化を、人間らしい豊かな生産生活文化としてとらえるとするれば、この藁のもつ特質と機能を充分に活用することが大切な土台になっているのである。

その特質と機能の一つは、農の生産を連鎖的に豊かにすることが出来るということである。そして、その中核はなんといっても役畜の飼育にあるのだ。一年分の収穫米を売ってもコンバイン一台分の価格を払うことが出来ないという農業よりも、牛や馬に農耕を分担させながら、経営に見合う軽量小型農機を組み合わせる例もあると思う。堆肥をたくさんつくって化学肥料と農薬の出費を抑えながら、人間の食物となるのにふさわしい作物をつくるという例もあると思う。豚や山羊や羊を飼い、バター・チーズやベーコンなどの自給的農産加工をおこなう例もあると思う。また、かつての技術を改良しながら多種多様な生産生活資材をつくることも出来るのである。とにかく、米・野菜・果実・花・畜産という金になる部分だけに目をうばわれることなく、それがなお一層豊かになるためにも、米なら藁・もみがら、野菜なら野菜屑というもの本体にもまさる貴重な生産物として活用循環させることが大切なことである。その中でも藁はもっともよくその課

題にこたえてくれるものなのである。

次は、農の循環を豊かにするということである。一本の藁が役畜の生体をつくり体内をとおつて土に還り、それぞれの用途を幅広く済ました藁もまた土に還り、燃焼することによって生活を支えた灰はまたその利用を済まして土に還り、つぎに稔る作物を豊かに育てあげてくれるのである。つまり農の循環というのは大きな輪を描いて回ることであり、役畜の飼育のためには藁だけでなく草や麦の裏作を必要とするように、輪の中の用途のポイントを中心にまた輪をつくることをいうのである。それはあたかも太陽の周囲を地球が回り、その周囲を月が回るしくみと似ているのであり、短絡的直線的に機械で切り刻んで土に踏みつけるのではないのである。農にとつて生産とはまさに創造であり、その土地のその風土に合わせて、ゆっくりとしたペースで豊かなものを仕上げていく仕事なのである。それはまた循環の輪の拡大であり、生産のポイントを核にして無数の生活の輪をつくっていくことなのである。

農の文化とは、「捨てる」という概念や「廃棄」という概念のない文化である。すべての物を活かし、人間を生かし、自然を生かすという最も人間らしい文化であるといわなければならない。それはまた、どこか一ヶ所の狂いが農の循環を狂わし、人間と自然の生存の方向に大きな狂いを与え、とり

かえしのつかない状態をつくり上げていくのである。私たちはこうした「狂い」の世界を浄化し、なくしていくために、藁の持つしななとした特質を活かし、「近代文明」が生み出している大きなマイナスを根こそぎにしていく必要があるのである。藁を食った役畜が藁でつくったひき鞍をつけ、藁で綱いあげたひき綱を引くことが、強烈なエンジンと、精巧なチェンで回転するロータリーよりも、はるかに人間にとつてふさわしい作物をつくり上げることであることを、いま静かに深くとらえ直し、人間にとつての本当の豊かさとは何かを考え合いたいものである。

(さとう・ただし 教員)

農 からの 発 想

星 寛 治



○ホモメカニクスの出現

たまに上京して、渋谷や原宿などの街を歩くことがある。ニッポンでいちばんナウイ街とか、流行のメッカとか言われる通りを、若者が肩すり寄せて歩いている。そこには、たしかに他の町とはちがうはなやいだ空気がただよっていた。『格好いい』ことを自認するヤングが、ファッションの先端部分をまとい、次から次と現れる。しかし、そうした幸せそうな若者たちの目を見ると、なぜかうつろな感じがしてならない。生きたキラキラ輝く瞳には、ついで出会うことがない。なぜなのだろうか。ふと私のまぶたに、かつて中国大陸を旅したときに出会った彼の国の青年たちの、燃えるような

目が浮かんできくる。街といわず、村といわず、未だ乏しい消費水準にありながら、すごく生き生きと仕事に打ちこんでいる姿があった。未来に夢を託して、自らの役割を精一杯果たそうとする生き方には、簡素な美しさがあふれるのであった。

私の訪中は八年も前のことであるから、今日どういう変化が現れているかはわからない。しかし、この夏訪中した知人の話からも、そうした印象は変わらないようにうかがえる。史上まれに見る経済繁栄の落とし子のようにして育ったわが国の若者と、大陸の黄土に根を張り、質素でたくましく育った中国の青年たちの、あまりにあざやかなコントラストは夫々の国の明日について考えこませずにはおかない。

ひるがえって、村の足元の所を見ると、そこにも若者や子どもたちの生活には、いちじるしい様変わりが見える。たとえば、地域の農業高校の先生が、「最近の生徒は、実習が様にならなくなった」とぼやいておられた。農作業に意欲をもって挑む姿勢がうすれ、十分間も働いて少し汗をかくと、直ぐにタオルを使い、水を飲みに行く。土にまみれ、汗を流して労働をすることが、何かイヤらしいことのように反応する、というのである。男生徒でも、教室にヘアードライヤーを持ち込み、休み時間には頭髮を整えることに余念がない。もしかりに先生が頭にさわったりすると、ひどく感情をいらだてる。つまり、格好とか髪型によってしか自己表現ができない内面の貧しさがある、と指摘するのである。

私は、農高の卒業生の動向を注目しているのだが、ストリートに就農する者は百人中二―三人あれば良い方である。女生徒にあつては、ここ数年就農ゼロという状態がつづいているという。せつかく三年間農業の専門教育を受けながら、ほとんど地元の中小企業に就職する。そのことに、何の違和感も感じない様子なのである。もちろん給料も安い場合が多い。なのに若者たちは、親たちに新車をねだり、さつそうと通勤する。街に出れば、村のはずれから通っている若者という特徴はどこにも見当たらない。仕事を別にすれば、車と女の子にしか関心がない風にさえ見えるのである。

しかし、こうした若者たちは、時代の潮流の中から自然発生的に生まれた、とだけはいえないものがあるように思えてならない。元をたぐれば、家庭の子育ての段階からその原因は形成されてきたようだ。

いま村で、なにが一番さみしいかといえば、野良をかけめぐる子どもたちの喚声が聞こえないことである。かつては、仕事をする父母のまわりで、ひねもす遊ぶ幼なごがいた。あるいは、少し大きくなると家族からあてにされ、遊びたい心を押さえて農作業を手伝う風景がどこにもあった。

学校の行き帰り、虫を探し、鳥を追い、草花を摘み、のどが乾くと小川や清水に腹ばい、ゴクゴクと天然の水を飲んだ。家に帰ると直ぐにカバンを放り出し、野山に駆け出し、木の実を拾い、野いちごや山ぶどうをほぼぼった。まぶしい少年の日が、つい昨日のことのように鮮やかに浮かんでくる。

いま、硬貨を何枚か手にした子どもたちは、ジュースやコーラの自動販売機に立ち、ガチャガチャと飲み物を求める。この満ち足りた飽食の時代の現代つ子と、わき水を腹ばいで飲んだかつての貧しい子どもたちと、いったいどちらが幸せなのであろうか。

村の子どもたちでさえ、四季の変化や、草花や、虫、鳥や魚など、生き物のことにあまり興味を示さず、家に帰ると部屋にとじこもり、マンガやテレビを観たり、プラモデルに熱

中する。最近では、ミニコンピュータのようなゲーム機にとりこにされている子も多い。大自然のめぐりや生命の輝きよりも、冷たい人工的なメカニズムに異常な関心を示す世代が育っている。そうした現代人生態を「ホモメカニクス」と呼んだ人がいる。万物の霊長を自認する人類といえども、この地球上に約二百万種生存する生物のうち、「ホモサピエンス」という種にしか過ぎないことを忘れてしまい、自然を征服できると錯覚しているのではないか。身の周りの、生きとし生けるものの生命の輝きに、何の関心も示さずに育つ恐ろしさを感じる。

○内なる自然と外側の自然

日本は世界一の長寿国になった。保健医療の環境整備がすすみ、食生活も豊かになったことが背景にある。しかし、ふしぎなことに、難病奇病といわれる病弊が深まり、先端的な医学技術をもってしても治すことができない事例が多くなってきた。このまま推移すると、いったん登りつめた平均寿命は、これがじりじりと下降するのではないかと見なされる。とりわけ、子どもたちや若者の体がもろくなり、幼少の頃から成人病体質があらわれ、その行先きが懸念されるようになった。

そうした状況に危機感を抱き、自らの健康については暮ら

しの中で自助努力によって解決するより他はない、と自覚する人もふえている。つまり、食生活から可能なかぎり添加物などの化学合成物質を排除し、自然食に接近したり、特別な健康法を試みる風潮が目立ってきた。私たちと産直・提携している消費者の多くは、学習の中で今日の矛盾にめざめ、健康的な暮らしを取りもどそうとする人々である。これまでのような物質万能的な使い捨て生活を洗い直し、簡素であつても生命と健康を第一義的に考えた生き方に転換しようとする人たちである。有吉佐和子さんの『複合汚染』などに触発され、本物の食べ物を求め、環境の汚染に歯止めをかけるために消費者運動・市民運動に参加し、ひたむきに情熱を注いだことの成果はこのほか大きい。

ただ、世の総体的な流れからいえば、近代化・工業化が進み、開発や都市化が進むにしたがつて、自然環境の破壊はとどまる所を知らないように見える。物ゆたかに、便利に、快適に、という人間の欲望と、自然の生態系の保持とは本来交わることはない。技術革新に支えられた現代文明は、最も根源的な所で反自然性・反人間性を内包しているのであつた。

私たちは案外無自覚に過ごしているけれど、口から入った食べ物は食道を通って胃袋に流れ込み、ぜん動作用を伴って腸へと移動する。その過程で無数の消化酵素など微生物の働きで腸壁から吸収しやすい状態に変化し、エネルギー源とな

り、血となり肉となる。つまり、人間の体内に棲息している目に見えない生き物たちの活動によって、生命現象は維持されているのである。ひるがえって、微生物たちにとって人間の体内は一つの自然界だといえよう。

私たちの体が健康で、正常な機能を保つためには、人間の内なる自然がバランスを保っていることが前提になる。ところが、造物主の意志になかった人工的な異物を体内にとりこむと、小さな生物たちは傷ついたり死滅したりする。消化吸収を助ける働き手の力が弱まるわけである。

考えてみると、私たちの内なる自然と外周りの自然環境はたえず相関関係を保って存在する。外側の環境を次々と破壊して、エゴイステイックに健康を求めようというのは、所詮無理な話なのであった。

○農耕の復権

現代社会の中に色濃く現れた生命疎外の潮流は、元をたぐれば農の軽視という所に行きつく。生存基盤として無くてはならない食べ物を生産する仕事を、社会的に汚れ仕事として差別し、経済的にも成り立たない状況に落としめて平気である。いまやわが国の食糧（穀物）自給率は三〇％を割るような勢にあり、あとは全て外国に依存する有様である。お金さえ出せばいつでも、どこからでも食糧は買えるという思いこみ

が、「自国内の効率のわるい農業などいらない」という発想にエスカレートしてゆく。しかし、ひと度非常事態が発生した場合や、平常時であっても地力の荒廃によってじり貧になっていく生産力の行く末を考えれば、自給を放棄した国の将来はきわめて不安定である。先進国型の飢餓が訪れないという保証はどこにもない。ましてや、「核の冬」の状況は、想像するだにおそろしい。

そうした予見される事態を未然に防ぐ力こそ、人間の英知というものであらう。私たちは、その拠点を「耕す」ことの復権に求めてきた。大地を耕し、種を播き、枝葉を茂らせ、花を咲かせ、実を結ばせる。そのわざの一貫性の中に、自然と人間の理^{ことわり}が存在する。文化の語源をカルチャー（耕す）に求めた意味は、自ずと永続的な文明の質を規定しよう。耕すことを忘れた根無し草のような文明は、やがて滅びてしまうことは、歴史の示すところである。

農耕という営みは、自ら汗を流して自らの生存を支え、暮らしをゆたかにする営みである。いわば経済以前の行為なのである。一時間いくらの貨幣価値に変える労働とは、本質的にちがうものをはらんでいる。働くこと自体の中に欲びと生きがいがあり、しみじみとした充足感を伴ってくる。それは、生命を産み出す営みだけに与えられた感動である。その感動を、日常的に取りもどすことによってしか、現代の荒廃

を救うことはできないのではないかと。

○よみがえった生態系

私たちは、昭和四十年代の後半頃から、工業化社会の吐き出す公害のほかに、近代農法がもたらす汚染がこのほかに深く拡がりつつあることに気づき、環境破壊や地力収奪を伴わない農法への転換を志すようになった。高畠町有機農業研究会を組織し、若い人たちと有機農業の実践に踏みこみ、すでに十三年が経った。化学肥料・農薬・除草剤など、化学的に合成された物質を全く使わないか、最少限度の使用にとどめ、稲や、果樹や、野菜を育てることをめざしたわけである。初めの頃は、全く手さぐりの状態で、失敗の連続であった。稲作については、堆肥を十アール二〜三トン施し、草とりは手押しの除草機で中耕除草をやり、つづいて四つん這いの手取り除草を何日もかけてやった。ひどく時代遅れな、労力のかかる営みに見えた。周りからは、変わり者集団という評価がなされた。しかも、初期の収量はかんばしくなく、三〜四割の減収に終わった。理念と現実のずれは、会員の中にも失望を生み、いつしか構成員も半減した。ところが発足して三年目、昭和五十一年のこと、東北地方を激甚な冷害が襲った。夏でもコタツを離せないような低温に出会い、稲の出穂は大幅に遅れ、出た穂も十分に稔らずじまいであった。私の

地域もおしなべて半作以下の凶作に泣いたのである。そのとき、全くふしぎなことが起こった。有機栽培の田んぼだけが、ポツリポツリと山吹色に稔ったのである。畔一本はさんでの歴然とした差異は、道行く人たちの目を奪った。収穫してみると、十アール当九〜十俵と、ほぼ平年作を確保したのであった。その結果を報告すると、有吉さんは「手づくり稲作のがい歌」とたたえてくれた。三年たつて漸く地の体力がゆたかになってきたのだ、と私たちは理解した。

昭和五五年から五八年まで、四年つづいた冷害のときも有機栽培の稲は健在であった。周りがみな白茶けた状態のときに、黄金色の穂波は感動的でさえあった。人間が汗水たらして、愛情をこめて、いとしごを育てるようにして育てた稲は、異常気象をはね返して、ものの見事に重い穂を垂れた。この事実は、自然の理法をいとも雄弁に物語ってくれた。ゆたかに肥えた土には、環境の変化に耐える丈夫な作物が育つという筋道は、私たちに勇気を与えてくれたのである。

七月の中下旬、肌寒い雨の日に、私は地温計を持って、田んぼの泥の温度を計ってみた。すると、十年も有機栽培をづけてきた田んぼと、農薬や化肥を使った他の田んぼでは、おしなべて三度位の差があった。もちろん有機田の方が三度高いのである。小動物、微生物、酵素、菌類などの無数の生き物たちの生命活動のエネルギーが、地温を三度も押し上げ

ているという事実は、驚くべきものがあつた。この温い土が、冷害下でも確かな稔りをもたらした主役なのであつた。

よくみると、澄んだ水の中には色々な昆虫類や多足類など珍らしい小さな生物たちが沢山動いている。図鑑の中でしか見られないような幻の昆虫も姿を見せ、私たちはハッと驚き目を見張る。米作り名人の佐竹さんの田んぼには、ホタルがきわ立ってふえ、やさしい夜景をつくり出す。きつと佐竹さんの田んぼの水は甘いにちがいない。

かつては草取りに苦勞した田んぼも、この頃ではだいぶ楽になつてきた。見ると、稲と相性のいいコナギなどのソフトな草がふえてきたせいである。いつしか、雑草の植生も変わつてきたのであつた。青田の朝、葉先にはクモの巣のネットワークがびつしりと張りめぐらされ、朝日にはえて銀色に輝く。そのまぶしい光景は、害虫などを一網打尽にし、稲のすこやかな成長を助けてくれる。

いま、稔りの秋、赤トンボが無数に舞い翔んでゐる。青空の下で刈り取った稲束は、ずしりと重い。張りのよい粒々は、銚色にすき透るようだ。私たちは、これまでの苦勞も忘れ、手ばさんだ稲穂に頬ずりしたい思いにかられるのである。

○落ち穂を拾う子どもたち

私の娘たちが通つた和田小学校では、もう十数年来おしど

りを飼育している。ある冬の日、校舎に迷い込んできた一つがいのおしどりを、大事に飼ひ育てたことが始まりであつた。今では、立派なフライングゲージもでき、子どもたちは当番で餌を与え、生育を観察し、日誌をつける。そのおしどりの餌を確保するために、毎年、稲あげがすんだ秋の一日を、全校あげで落ち穂拾ひに出ていく。コンバインが普及した穀倉地帯ではむずかしいけれど、私たちのように有機農業・杭掛け自然乾草にこだわる所では、まだ落ち穂を拾うことができる。子どもたちの真赤な小さい手が拾つてくれた餌のおかげで、おしどりは元気に冬を過ごせることだろう。

けれども海の向こうは、ひもじさに苦しむ子どもたちが、夕べの一碗のかゆを求めて、鼠と落ち穂を競い合う光景が伝えられる。胸を痛めた子どもたちは、相談し合つて小遣いを出し合い、国際児童基金を通して、アフリカやバングラの子どもたちに小さな手をさし伸べた。そうした自発的な取りくみは、他校でも行われ、ユニセフからの感謝状が届けられた。自然と一体となつて、生命を育てる「耕す教育」の十年の積上げは、子どもたちの心に他への思いやりと共生の願いをはぐくんだといえないだろうか。この子たちが成長し、社会の中堅として活躍するときには、何よりも平和を希求する世代が形成され、農を基軸としたあらたな文明が構築されることを願わずにはおれない。

(ほし・かんじ)

新しい家庭科を創るために◆◆小学校では

”ひとり立ちができ
思いやりの心を持つ”
子どもを願って

—— 一年生 ——

西垣 邦子
野澤 とみゑ
清水 恵子

一、はじめに

八年振りに高学年から降りて一年生を受け持つことになった。三十年近い教員生活ともなると、自分なりに体験の中から得た教育観・体系・知識もあつて気楽な気持ちで受け持った。

ところが一カ月近くの間に八年間の子どもの氣質の変わりに驚くことが多々あつた。

ここでは一つの事例を通して、今日の子どもの育ってきている動向を探り、一年生における家庭科的内容の指導の必要性をとらえてみたいと考え

る。

ある日の朝の会のできことから

C₁ これから朝の会を始めます

(本人、ちよつと前をつまむ)

T おしっこしたいのでしょ、お便所へ行つてらっしゃい

C₁ いいよ。こうしてつまんでいたら我慢できるで

T もれると困るよ。早くお便所に行つておいで

C₂ あれ!! 水がこぼれた

T あつ、おしっこが出ちゃったのね。早く全部出しといで

C₁ いいよ。ちよつと出て減つたから大丈夫。朝の会始めま

す

こんなやりとりをした。おもらしがあるにもかかわらず、彼は便所へ行くのを拒み、朝の会の司会を続けたがつた。私は彼に朝の会の司会をしなければならぬという責任感があつて、便所へも行かないで司会を始めようとしたのだなど、当時は考えていた。が、しかし、その後の彼の様子を見ているうちに、彼は何かに夢中になつて取り組んでいる時には、便所に行くのが億劫で、大小便を問わず、おもらしをすることに気がついた。

長い教員生活ではあるが、児童がおもらしをしたために、下着を洗つたという経験は一度しかない。しかも、それはずつと以前のこと、児童が体調を崩していて、やむをえずで

あった。当時は、おもらしをすると、たとえ健康上の理由であつても、本人はおろか、まわりの者もひどく恐縮したものであった。ところが、八年振りに受け持った一年生は、すこぶる開放的で、おもらしをしてもあつてかんとして、恥じ入ることもなく、下半身裸となつて汚れたおしりを拭いてもらっている。周囲で見ているクラスメートもにこにこと朗らかそのもので、しかも、軽い冗談が本人と友達の間を行きかっている。

このように、便所に行くのが億劫で、意識しながらもおもらしをする子どもは、彼一人ではなかつたのである。そればかりか、授業中に退屈してくると席を立ち、いたずら半分に大便を廊下でしてみるといった行為があつたりする。こうした行為をする子どもたちは、別に知能が低いわけではない。高い子どもから低い子どもまで幅広く、さまざまであつた。

こうした原因を考えてみるに、一歳足らずで保育所に預けられ、皆の前でオムツをかえてもらつたり、かえてもらうのを見てきた彼等にとつては、一年生になつてもその延長線上であつて、別に気になることではないのではなからうか。親も保育園に通う幼い子どもに、保育さんがオムツをかえているのと同じ気持ちで、小学生のおもらしをとらえており、おもらしをしたので下着を洗つたという連絡の電話を入れても、*「あつ、そうですか。はいはい」*という返事のみである。

以前は、電話が入ると、急いで着がえを持参し、迷惑をかけたと詫びにやつてきたものであつた。

ここで言いたいのは、おもらしに対して恥じるべきであるとか、詫びるべきであるとかいう事ではない。この事例を通して見られる現代の子どもの、基本的生活の乱れや、他人に迷惑をかけても氣にならないという風潮である。

排便・排尿の自立は、子どもの発達段階において最も基礎的なものに位置づけられ、これが身につかない限り、社会性が身につかない。つまり、さまざまな学習が成立せず、集団生活の中に入らず、孤立する。そればかりか、攻撃的になるか、依存性が強く、自立ができなくて、将来の性格形成や社会適応性がなくなるという。

人間が社会生活を営む以上、他人に迷惑をかけず、自分のことは自分でしようとし、お互いに相手を思いやりながら生きることがたいせつである。ところが、現代の子どもたちは、最も基礎の段階で身につけられていないことが多い。

一年生の排便・排尿という小さな窓を通して、遠い将来の日本の社会を思う時、これでよいのであろうかと不安がよぎる。親に基本的生活習慣の大切さを説いても、その重要性を十分に理解できず、テストの点数ばかりに氣をとられているのが現状である。基本的生活習慣を身につけ、自立していく過程では、努力・忍耐・けじめなどといった、社会生活を送る

上で必要なさまざまな力が育む教育的作用があることに気づかぬ親が増えつつある。

そこで、このような現状をふまえた指導が、学校教育に必要となる。基本的生活習慣は、単なる個人に対する個人の躾ではなく、社会を発展させていくための、一人一人の自立のための生活技能を身につけることだといえよう。

自立のための生活技能の基本は、衣食住の家庭生活に関わりを持つ家庭科で育てることになるが、一年生では、学校生活の中の問題（家庭科的内容）を、体験を通して、解決していく力を身につけさせたい。

生き甲斐を求めて、母親が社会に出る傾向がますますふえるであろう。これからは、“自立のための生活技能の習慣化（家庭科的内容）”を、家庭において一対一で身につけさせていく時間の減少が予測され、前述のような、年齢に相応した自立のできない子どもが増えると思われる。尚一層、義務教育第一歩の学年である一年生にこうした家庭科の内容を持つ指導の場が必要であり、指導上の学年のつかみどころであると思う。

二、実践 机の中の整理整頓

入学当初、机の引き出しへの物の入れ方は学習したはずなのに約束が守れず、下記のような問題が生じ、クラスとして

机の中の整理の仕方を解決する必要性が生まれた。

①整理して物を入れないため、必要な用具を取り出すのに手間どり学習を始めるのが遅れる

②雑然と入れてあるため、スペースが充分あるはずなのに、物が入りきらず、机の下に落ちて紛失したりこわれたりする。落ちた物で床を汚したり落ちているのを拾ったり掃除当番が迷惑したり教室がちらかったりする。

③鉛筆のけずりくず、ごみ等が入っていて、引き出しの中が汚れたり、入れた物が汚れたりする

④右記のようなことが気にならない体質が育ちつつある
ある朝、教室にうじがいるという。ある子どもの机の中を調べると、給食の食べ残しの卵焼きが裸のまま引き出しに入れてあって、これにうじがわいていた。

このことをきっかけにとて、本題材を取り上げることにした。

(1)ねらい

机の中を上手に整理できるように工夫し、日常生活の中で実践できる力をつける

(2)学習の主な流れ

⑦事前指導

道徳「おもちゃの会議」「物を大切に、整理」と関係づけ
机の中はどうなっているか観察。学習の必要性を提起する

④ 本時の学習

T 机の中を観察した時気づいたことはない？

C₁ 散らかっていて、何がどこにあるのかわからなかった

C₂ 鉛筆・クーピーのけずりくずや紙くずがあつて汚なかつた

C₃ 取り出す時、物が落ちたり、こわれたりする。床が汚れる

T こんな入れ方をする毎日だれでも困ることは何かな
C₄ 取り出すのが遅くなつて困るよ。やつてみよう

T ほんと。じゃあ調べてみようか。出せ出せゲームするよ。
クレパスの青。早く出せる子であれ。

く一番遅くなる子 M 君やわ。目茶苦茶入れたるで
くやつぱりな。M 君整理して入れとらんでや

T ゲームに勝つには、どんなことを工夫したらいいでしょう

C₅ 元あつた場所にきちんと入れる

C₆ 仲間わけをして、そろえて入れる

C₇ いらぬ物は、持って帰つて、机の中になんでも入れておかない

T 話し合つたように工夫して机の中を整理しましょう

く何度もやつてみては、工夫したことを発表し合う

T 整理した机の中を見てわかつたことは？

C₈ きちんとしていて、ぴしつとした気持ちにして良い気分

C₉ たくさん入るし、引き出しから落ちたり、ひっかかつて、

破れたり落ちたりしないし、スーッと引き出しがあく

C₁₀ どこに何があるか、パツとわかる。入れた物も汚れない

⑤ 事後指導

毎日机の中の整理を係を中心にして確め合い評価し合う

(3) 学習後の子ども様子

毎日の繰り返し指導の中で整理に対する関心が高まってきた。教室の机の引き出しの整理から始まつて、ロッカーの整理、靴箱の整理、学級文庫の整理と教室の中の整理へと目を広げていった。中には、「うちの食器棚の引き出しを整理してほめられたよ」と教室から家庭へと場を広げる子どもも出てきた。「おかあさんの鏡台の引き出しも、口紅や化粧水やブラシを仲間分けして箱に入れて片づけるときれいになるよ」「立つ物は空きびんや空き缶使つと片づけやすいよ」等、様々な整理法も工夫するようになった。

自分の身の回りの整理にとどまらず、友達の整理の様子にも目が向くようになり、整理を手伝つたり、黙つて整理をしてやるような行動にも出るようになってきた。家では「お兄ちゃん机の中汚れていたので掃除して整理したよ。お兄ちゃん高校で勉強いそがしいで、なかなかできんのやね」等と家族に対しても思いやりが生まれはじめた。

学習前には整理が不得手であるばかりでなく、言動も粗野

で、友人関係も円滑にすめられず、何かと教師の手をわずらわせたM男が時々整理する姿を見せ始めた。こうした彼の変革は学習が動機づけになったとも考えられるが、それ以上に大きな力となったのは整理上手のT子たちの働きかけであった。

彼女たちはM男に声をかけ、M男と一緒に彼の机やロッカーの整理にあたった。M男は彼女たちのこうした気づかいや、整理をしあいながら心を通い合わせるのがうれしくて、整理することに関心を見せ始めたのである。そして、そのことを通して友達と心を通い合わせることを学んだのである。このことは、“家族（学級）の一員としてよりよい家庭生活（学級生活）を築いていこうとする実践力のある子ども”という家庭教育のねらいとする人間像そのものである。

三、おわりに

基本的生活習慣を身につけ、身近なことから自立を始める、を学習の重点に置き、体験を通して学ばせた。体験を通して学んだことは遊びと同じ感覚で取り組み、生活化していった。その過程の中で自立する能力や、思いやりを持ち、よりよい人間関係を築いていく力も培っていった。このことは一年生なりに家庭教育の願う人間像に一步迫ったものであると考える。



編集室から
あなたに

〈投稿募集〉

あなたもWeのつくり手に…

（西垣―岐阜市立島小学校、野澤・清水―岐阜市立岩野田小学校）

◆「発言」に投稿を

2千字以内、縦書き、趣旨を換えずに直すことがあります。

◆情報の頁「泉」欄に、あなたからのメッセージを

集会・グループ・パンフの紹介、映画・テレビ・本・音楽・演劇…旅での出会いなど、ぜひ大勢の方に知らせたい情報をどうぞ。400字以内、✂切りは特に設けません。随時お送り下さい。

原稿はいずれも住所・氏名・職業明記のこと。原稿の返却はいたしかねます。掲載分には薄謝を送ります。

◆集会でチラシを配って下さいませんか

各地で教研集会をはじめ、いろいろな集会が催される時期となりました。その時、Weのチラシを配って下さいませんか？ 雑誌販売のお世話をしていただけませんか？ ご連絡いただければ、すぐチラシ等をお送りいたします。一人でも多くの仲間ができることを……
ご連絡をお待ちいたします。

調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎ 03-326-1380 ウイ書房

新しい家庭科を創るために◇◇中学校では

生徒から教えられたこと

橋本登志子

二年生は前期食物2、後期被服2の学習をしている。教科書に即して割合忠実な学習をさせている。「新しい家庭科を創るために」というには誠に不似合いな実情である。このような学習指導であるにもかかわらず、生徒からは、キラッと光る贈り物が時にはある。自信喪失の教師が生徒に支えられているようで、教育とは生徒と教師の相互作用の上に成り立つものだと思感している。

一、食生活指導の全体像

食物1では、青少年に必要な食物を各食品の栄養的損失を少しにとどめる食べ方ができるように

育てたい。食物2では食物1の指導に加えて、安全な食べ方ができることを願っている。食物3では、成人の食物についてこれまでの力に加えて経済面からも考える力を培いたいと願っている。

更に、食生活を考える時はどの学年でも家庭において料理したり、問題点を改めるようなお願いや対策を話し合ったりして、家族の絆を強めるように努力させている。

調理実習は、四、六人の小集団で行うので分担制が多い。そのため初めから終りまで直接に体験できなくて家に帰ってから自分一人で作る自信がない者もある。この打解策としてみんなで支え励まし、見届けのある一人実習も組んでいる。

一つの料理の事前研究では、その料理のポイントの一、二について実験的に行い、二度繰返すような方法をとっている。

授業の進め方は、「自分や自分たちの食べ方のようすを見る」「友達や他の人たちの食べ方と比べて、自分や自分たちの特徴をつかむ」「実態をよくするために調理実習したり家でも作って食べたりする」「家での実践を交流して、新たな問題をみつける」というパターンである。どの領域もこのようであるし、おそらく、どここの学校でも行われている普通のパターンであろう。

二、「精進揚げ・天つゆ」の学習

「油は、何度の時どんな状態になるのかを調べよう。そのことから、温度計がなくても油の状態から温度を知って揚げ物がやれるようになる。また、じゃがいもの素揚げをして精進揚げならば何度位で揚げるとよいかを予想しよう」

うすい煙が出始めたから200度を越えていること。この煙は油が気体になった状態だから引火しやすいこと。空気を遮断すれば火は拡がらないから、もしもの時のために各台にある鍋の蓋の一番大きい物をそばに置いて実習すること。この時間は、体中で油を見ていてあとで油の状態やいもの状態をノートでできること。温度計の目盛は、見にくいかもしれないが鍋に顔を近づけすぎないこと。班員みんなが一致していもを入れる箸先を見ていること。温度はみんなに知らせること。

以上の注意をていねいに話したのだが、生徒たちは聞いている顔をしているけれどもあまりわかった表情ではなかった。繰り返さなくてもやってわかるのだから、「安全に注意し油やじゃがいもの変化を見落さない」と板書して実習に入らせた。一班分100gのじゃがいもを三ミリ厚の半月切りか輪切りにして、120度、150度、170度の温度で素揚げをした。

○油やじゃがいもの状態の記録から

油 120度 ⑦あわがでてくるていどでそんなに変化がない

150度

①初めとかわらない⑦あまり熱^{あつ}そうではない
⑤あわがあまり出てなくて、もやもやしていた
⑦あわがだいぶんできてきている④ちよつとパチパチ⑦ジュワーとなった⑤少しあわのようでプクプク

170度

⑦入れたとたんあわがまわりにいっぱい広まった
けむりも出てきた④入れるとあわが白くなった

いも 120度

⑦まわりが少し焦げていた④まわりはカリカリしているけどまん中へんは白っぽくてやわらかい

150度

⑦少しきつね色になって中がやわらかかった

⑦全体がきつね色になっていた④全体がほんのりやけてちょうどいい⑦すぐ浮いてきて少し濃い目の色になってちよつと固かった

170度

⑦まわりが焦げていて中も少し焦げていた④黒い目の色だった⑦すぐあがつて焦げてしまい、黒くて固くてにがい

総合して、120度で揚げると油切れが悪くて味がしつこい。口の中がもやーとする。170～180度だとしっかり油がとれるが焦げてにがい

○この実習で得たことの発表から

野菜の素揚げは150度位のおいしい。精進揚げの時は、水どきした衣がつくのだから170度位がよい。油は加熱され下か

ら上へとゆるくまわり出す。材料を入れると底に沈むけれど、びたつくつくのではなくて少し浮いているだろう。衣を少し入れてすぐ浮いてくれば揚がっている。煙が出るようでは絶対だめ。もし熱くなりすぎたら火を消す、材料を一面に入れてしまう。鍋にそってそろっと入れると油がはねない。使った鍋や油のはねたコンロやコンロ台は金属がまだ熱いうちに紙でふきとったりして掃除すると楽にきれいになりやすい。

100gのいもでは少なすぎると不満をもらす生徒もいたが、実験的に調べてみた結果、たくさんのをみつけることができ、100gの量では少なくて学習課題を達成することができないという生徒はいなかった。自分のことばで油の変化や揚げ物の仕方を語れるようになることができたと思っている。「精進揚げ・天つゆ」の実習では、教科書にそった「さつまいも・れんこん・にんじん・さやいんげん」とした。

ころもは軽く混ぜるとよいことは、前に学習している「手打ちうどん」を作った小麦粉の特性調べの応用であるからわかっていた。

温度計を必要な用具に数えておかなかったが、やっぱり温度計で確かめたいという申し出があって、全部の班が使っていた。170度に調節しようとして、材料を多く入れたり火がけんしたりするのであるが、遠目で煙の出ているのを見つ

て、「六班温度高いよ」と注意しなければならぬ時もあった。他の班も一斉にその班を見て「あつ煙だ。離れているとよくわかる」と言う。「温度計に頼りすぎないで、自分たちの感覚を働かそう」とまた一声かけることになる。

先生方に試食をしてもらい、一言感想を書いてもらってき

た。「さつまいもに三つも穴があいていました。やわらかくなつたかを調べたのだと思いますが、一つ位ならいいけど三度も刺してみなくてもわかるようになってください。からっとしていいしかったです。ごちそうさま」という励ましがあつた。どれもこんなに穴をあけて調べていたようではなかった。たので、「あなた方のも穴を開けたの？」と尋ねてみた。「全部じゃない。先生のはやわらかくないといけないと思って、絶対よいというのを食べてもらつた」という返事である。

指導者としては、調べに調べて穴あきの物よりも見た目きれいで、これで中もよしと想像して取り上げた物を他の人には食べてもらつた方がよいと目頃思っていた。だから、感想を読んだ時に、しまった、食べていただく心の指導が不足した、少しでも自分が多くを食いたい、よい物を食べたいというさもししい行為だったのではないか、と思った。このクラスではないが、フルーツゼリー用のジュースを分配させ残りを使って教師が比較的ゼリーを作ろうと思っていたのに消えて

しまったので全員に尋ねたことがある。一時間待っても事情ははつきりしなくて、授業後に「知っていたけれど後でいじめられるので言えなかった」と伝えに来たという苦い思いをした後である。またもや自分中心の行為なのかと思ひがなしかつた。

ところが、彼女たちは穴をあけて、これでよしと安心したからこそ先生に出したのであるし、浮いてきたのが本当に柔らかいということは食べるか穴をあける時に腕に感じた手ごたえからしか判断ができなかったのである。フルーツゼリーのジュース事件も、私の問いかけが生徒の心にびたと合うものであれば、問題行動を起こしてしまひやすい生徒も、自分から「私、欲しかったもん」と言い出し、全員で一時間の沈黙という方法をとらなくてもわがままな行為を認めてくれたのではなかったか。実際、ゼリーの後の「スパゲティ・ナポリタン」の時は、彼女たちにスパゲティの分配の責任を持たせた。少しの余分もないように準備しておいたので、「平等に分けてあげてね」と念をおして任せた。しかし、自分たち仲間がいる班には多目に渡してしまひ、最後の班のが不足した。「先生、これ店の人が足らんように持ってきたわ」と言うので、「困ったね。店の人が注文した量を届けた伝票はこのとおりあるけど証拠を示さないと先生だって店の人に足らないと決めつけられないよ。支払いの時に言うから、各

班のを全部集めて目方を調べ直してから分配したらどう？一本でも台の上に落としていると不正確になるので、班長に注意してね」と返事した。今度は、各班長を前にして全部の班に分けてから持ち帰らせていた。総重量は伝票どおりであったし、計り込みもなかった。

こんなことも思い出し、いやしい子どもたちと決めつけてしまわなくてよかったと思った。と同時に、もっと、生徒の気持ちに寄り添えていて、よい物をおさがり下さいという気持ちが、穴あきいもを選ぶのではなくて、見た目もよい物を自信をもって選ぶことになる技術的能力と生活感覚を養うような指導をしていけるようになりたいと反省した。

三、ささくようなA子の声

試食している各班を回って感想を聞いたり、焦げ色や油切れの様子から材料を入れた時の油の温度や状態を確認したりした。生徒たちが半分位食べた時に、私は、今日の自分の試食席についた。いただきますの合掌をして、まず、いもを一切れ食べ終えた。淡い黄色の衣は油切れもよく、さつまいもの甘味を十分引き出しているやわらかい揚物であった。おいしい。慎重に温度計を見つめ、温度の変化を油のようすを見ながら少し早め早めに火力調節していた成果だなとうれしかった。

「先生って、お上品に食べなさる」と向かいに座っているA子がつぶやいた。「えっ、なに？」と不意のつぶやきの意味がわからなくてまごついた。生徒から誉められたのが気恥ずかしかった。A子のほっとしたような誇らし気な眼、それでも不安そうだが喜びに満ちたような声。この生徒は積極的に発言するとか、休み時間に大声で話をしたり、飛びはねたりするような目立つことはしない生徒である。

「うちのおかあさんもね。私の作った物を喜んで食べてくれるよ」「にんじんは色はいいけど、少し硬いので氣をつけて食べてください」「れんこんはこのぐらいしゃきつとしていてもいいでしょ」「大根おろしが入っているとさっぱりするのですね」とA子に誘発されて班員が次々と話しかけてきた。

先に食べていたA子は、先生がどう評価してくれるのかを期待して待っていたのだ。私は、揚げている途中で、「いい調子だ」と温度調節のよさを認めていたのだが、さつまいも一切れを食べてみて、実際によくやつたと満足したのだった。その上、揚げ物指導の気疲れから一時解放されほっとして教師心を忘れてもいた。それらが食べる姿に出ていたのだろう。うまくできたと思うけれど先生はどう思っているかしらと箸を止めてじっと教師を見ていたA子にとっては、期待していたとおりの評価ととれたのではなからうか。この時、大根おろしが天つゆの中に入れてあったので、皿の端に添え

るのでしたと注意しようという気持が先立っていれば、A子の眼は、教師が自分たちの学習ぶりはダメだと評価したととらえたであろう。そうすれば、班員の発言もなかったかもしれない。

A子のささやくような声は、「学ぶ」ということ「教える」ということのあり方を示してくれた。今まで、自発的な学習とか無意図の教育とかと言ってはきたが、改めて実感させてもらったという思いがした。

自ら学ぶというのはどんな姿なのだろうか。

。ある結果が出てきた時、それが出るまでに自分はどうのように行ってきたのであるか説明できる。もっとよいのは、どうしてその結果が出たのかを考察できる。

自分の意志で物事に対処していく時に「学び」があると言える。

。ささやくような声にもはっとし合える仲間がそばにいて、すぐに反応をし合えることによって「深い学習」になる。

。自分の思いや行動を友達のそれと比べたり比べようとしてその機会を見つける努力をすることが、「生活を向上させ力」となる。

「先生の全ての言動が私たちに何かを語っている」とA子たちは今日もこちらを見ている。私も彼女たちの心に寄り添いたい。

(岐阜市立陽南中学校)

新しい家庭科を創るために◇高等学校では

忘れられない実践 II

森 幸枝

石の上にも三年

府立高校の男女共修も、多くの学校が三年目を迎えると、教える側にはゆとりができ、学ぶ側も当然のこととして受け止めるようになって、漸く定着しはじめる。研究会では、その実践の交流をふまえ、内容の改善・充実にふみ出した。「石の上にも三年」とはよく言ったものである。

三年目の実践では、私は「婦人労働について」の学習の時のことが心に残っている。当時の山城高校は、生徒数一二〇〇余名、普通科と商業科の比率が五対四、男女比は五対六であった。校下は、京都市西北部の商業地域の多いところで、市街地としては比較的サラリーマン家庭が少なく、

生活意識は意外と保守的であった。（京都の公立高校には、少なくとも、本年三月高校入試制度が改悪されるまで格差がなかったが、地域差はかなりあった。）家庭科は、普・商共に二年生で家庭一般を男女共修で二単位、三年生で女子必修二単位、選択科目としては、普通科には三単位の食物と被服、商業科には二単位の食物と被服をそれぞれおいていた。

五十一年度には、研究会での合意を基礎に、前年度の反省に立ち、次頁の表のような年間指導計画を立てた。家庭科の独自性として、とくに力を入れていたのは、グループによる生活課題の共同研究、保育・教育の自主研究、家計の事例学習、調理実習などであった。共修の調理実習は、知識を生活に活かし、物価や公害などと結んで課題解決のための一手段として位置づけ、また、家事労働と深く関連させて男女の協力を学ばせ、その必要性を理解させて民主的な家庭建設への足がかりに、と願っていた。

さて、「家庭生活と職業」では、人間の進歩に果たして来た労働の役割や、労働の真の意味、経済のしくみの中の職業などについて考えさせようとしていたが、それはなかなか口で言うほど安易ではなく、ついついお説教に終わりがちだった。さらに、高校生にとつての職業選択や、老人と職業の問題も扱うべきだなど、まだ整理がつかかねてもたもたしていた頃だが、その中で、欠くことが出来ないと考えていたも

昭和51年度 男女共修家庭一般年間指導計画

	指導内容	実時間	指導の要点	備考
一期	オリエンテーション	1	家庭一般とは、共修の意義	目標・内容・年間計画
	家庭生活の現状	10	グループ学習 } 生活をとりまく 自主研究 } 課題の意識化	事前・中間・事後指導 研究発表
	家族の歴史とその機能	7	歴史の流れの中で、将来への課題 と展望（方向性の把握）	性的もんだい、差別と区別
	家庭生活と法律	3	憲法第24条・第25条と現実の生活 新旧民法の家庭像の比較	男らしさ・女らしさ TV視聴
二期	家庭生活と職業	4	労働の意味・役割 婦人労働のもんだい	賛否両論意見発表
	保育・教育	12	自主研究、グループ討論、全体報告 発達観、家庭保育・集団保育	子どもをとりまく環境の変化 児童憲章・児童福祉法
	調理実習	3	保育自主研での共通理解をもとに 「子どものおやつ」作り	クッキー・のみもの
	家庭経済の現状	3	物価のしくみ・物価指数 家計の実態・事例学習	エンゲル係数・住居費・教育費
三期	食物費・栄養・献立	4	グループ研究	食物費から生計費、望ましい収
	調理実習	3	なぜ、何を、どれだけ食べるべきか 「青年期の一食分」 栄養分析・費用・労力・時間検討	入の逆算 チキンライス・スープ・サラダ 食品成分表
	食品公害（添加物）	3	とくに添加物をとり上げる理由	日常の食生活の点検
	消費者問題・生活保障	4	衣・住の問題点 権利の自覚、運動の歴史と必要性	具体的事例
	総まとめ	2	グループ討論 家庭生活創造への展望	プリントで反省 感想文

のに婦人労働についての学習があった。
 当時、「婦人労働」をあまり取り上げると、男子の反発を招くのではないかと案じる意見もあった。しかし、私は、そのこと自体が重要な教材であり、婦人労働Ⅱ女性の問題ではないことを、男子にこそしっかり理解させたい。そして、母性保護は女性の保護ではなく、人間（両性）にとつての権利でもあり、義務でもあること。またとくに、働く婦人が急増する中で、家事労働や保育とかかわって家庭経営を民主化していくためには、婦人労働の現状を知り、その保障について考えさせることはとても重要だと考えていた。もちろん、家庭生活と職業に関連して労働者一般がもつ労働上の課題も大切だが、家庭科では、婦人労働者が、女性であるために男性労働者の持たないさまざまな問題（職場差別、母性破壊、家事育児との二重労働等）に直面することを認識させ、男女が協力し連帯して諸課題の解決に当たらなければ道は開けない、という自覚を持たせたいと思っていたのだ。

た。

ところで、そのためには、先ず婦人労働に対する価値判断が前提となる。保守的で働くことに実感を持たない多くの生徒たちに、押しつけてでなく納得させるには……と考えて、

①婦人労働が増え続けて来た具体的事実を資料で示す

戦後女子労働者数の変化。雇用者総数中の女子比率の推移、女子雇用者中の有配偶者構成比の変化、女子パート増加の推移、身近な女性の就労の状況など

②なぜ、そうなる（なった）のだろう。皆で列举する

それを促す要因は何か（個人的に、社会的に）

それを妨げる要因は何か（個人的に、社会的に）

③こうなったのは、良いことか悪い（困る）ことなのか

一体女性は、仕方がないから働くもので、本来働くべきではないのだろうか、本気で考えてみよう。

ここで、討論といきたいが、なかなかホンネで討論とまではとても無理、そこで「女性が結婚後働くことについての賛否と理由」を全員に簡単な文章にまとめさせた。

④意見発表と討論

賛否両論、その主張のはっきりしているものを、予め男女二、三名ずつ選んでおき、それをもとに発表させた。

これがよかった。とくに強い反対派の男子の意見は面白く、それに触発されて、各講座ともぐつと話し合うふん

きが出来、生き生きとして楽しい授業になった。その中で、ごくユニークな三例をあげよう。

[A] 僕は絶対反対。何となれば女性の本来の仕事、つまり本職はあくまでも家事であり、ごく一般的な経済条件であるならば、道楽くらいにしか過ぎないといっても過言ではない。社会的労働については男がいる。経済云々は全て男が、夫が握りしめればよい。夫が安心して家に妻を残して、心おきなく社会に出て戦うためには、へつつい虫のように副収入などねらわず、任せられている家事などを十二分に手がけておけばよい！ 自分は、絶対的かつ強じんな収入をかつきり家に持ち帰り、家庭経済全体を支える。せっかく手許に来てくれた嫁さんに、外で家事以外にうろつかれ、疲労させたり、金銭面でおたおたさせたのでは、妻も自分もたまったものではない。よく言われるが、何のために嫁という字は、女へんに家にくっついていくのですか！（彼の勇ましい発言のおかげで、講座は大いに湧き、同性からの反論も多く、彼は次第にはじめのカッコよさを失くしていった。私も、生徒から嫁という字で説教されるとは思ってもみなかった。）

[B] 自分のエゴだと言われるかも知れないが、将来妻を持つたら、やっぱり家事に専念してほしい。男は、少なくとも僕は、馬鹿な所があるもので、妻を持てばそれは自

分のモノ、自分が責任を持たなくてはと思う気持ちがある。差別といわれても何といわれても、かくすことの出来ない事実である。それだけに、それを守り育てていくことに生きがいを感じる。従って、妻が自分で生計を立て自分だけのものを作れば、男にしてみれば自分の生きがいをはぎとられた気持ちになる。もはや自分の助けを必要としない独立したものになってしまう。たとえ妻が精神的に自分を頼ってくれていても、男は何か物理的な証拠がないと落ちついていられないものなのだと思はる。皆さんはどう思いますか。

(小柄で可愛らしい彼が切々と訴えたので、講座はシーンとなってしまい、男女ともに同情論も出たが、でも妻は夫の私物か、養い養われるだけの関係か……と話はずんだ。)

〔C〕 考え方が古いのかも知れないが、自分は妻を養っていくだけの「かいしよう」が出来た時に結婚するつもりである。妻子を養えないようなら結婚しない方がよい。しかし、結婚して本人がどうしてもというなら許してもよいし、やるべきことをやってならよい。育児を犠牲にすることは許せないと思う。男の自由と女の自由とはちがうから、同じ様にはいかないと思う。

(自由になぜ男女差があるのかと、大へんよい問題提起

になった。「甲斐性」論も展開出来た。)

それにしても今日なお、たて関係に生きる男女観が、高校二年生の心にすでに深く根をおろしているのは何故か。

日本の家庭のふるさ、教育のふるさ、生活の現実と生活意識のズレを、その時改めてしみじみと思ったのだった。これは、九年前の話だが、このような発言こそ男の中の男だなどと喜びそうな人たちが今まだ一ぱいいて、男女共修の家庭科への道を妨げて来たといえるだろう。

⑤ 全員に書かせてみてわかったこと

賛否は男女ともに約半数ずつであった。しかし、男子の賛成には家事育児をしつかりやった上でとの条件付が多く、「許す」という表現を当然のように使っていた。女子は現状では無理だからというものも多く、やはり「許してもらったら」という書き方がかなりみられた。

重要だと思ったのは、賛成論者には、よく互いに話し合つてとか、家庭の外からもより多くを学びたいとする意欲が強く、人間的な暖かさが感じられた。反面、反対論者には、家事育児天職論のほか、子どもがダメになつてしまつとか、両立は絶対に無理だ等のきめつけが多く、固さがみられた。とくに男子の中に、「どうぞ勝手に、女のことだから男が口を出すべきでない」など、いかにも自由で物わかりがよいようできて、実はきわめて無責任で利己的

(非現実的)な考えがあるのが目についた。

また、働く母を持つ生徒たちからは、実感としてそのすばらしさも不満も述べられたが、前者は人間としての本質にふれるもの(若々しくなった、生き生きしている、話題が豊富になったなど)であり、後者は今後解消し得る条件的なもの(かぎっ子になる、夕食がおくれるなど)が多いことに気づき、生徒たちにも考えさせた。

また、平素の授業ではわからない生徒の人間性や、なかなか発言しない生徒の価値観にもふれることができた。

⑥ 討論の後に確認したこと

婦人が働くということとは、許す・許さない、好き・嫌い、賛成・反対といったものではなく、人間の権利(生存権)の問題であるし、基本的には、経済の自立が両性の平等の前提となること。しかし、具体的な現実では、さまざまな問題があつて、まだまだ一律にはいかない。まず夫婦でよく話し合つて、より多くの人たちと協力し連帯していく運動の視点を持つこと、などであつた。

⑦ 『働く妻は美しい』(藤田健次)を読み、感想文を書く

討論やその後の確認で、頭の中が柔軟になった所へ、共働きのなまなましい、きびしいが素晴らしい実例を与え、夫婦・家庭の在り方について追求、男女ともに自分が当事者ならどうするだろうかと考え、まとめさせた。

婦人労働の実態を詳しく知るには及ばなかったが、生徒の反応は、互いに異性の考え方が聞けたと大いに好評、またその中で悩みとして浮きぼりになった家事労働・育児について、男女ともに事後の学習への意欲を見せ、共修ならではの感を深く味わった実践として忘れられない。

「家庭科なんか」から「家庭科こそ」へ

この年で、私は山城高校を去ることになる。何といつても行きがかり上、常に府下全体にアンテナを張りながらの三年間、不安と緊張、充実と満足との交錯した三年間だった。

毎年四月当初には、女子をも含むかなりの者が、「家庭科なんか……」という差別意識を大なり小なり持つ中で、その、どうでもよい、バカらしい、ナンセンスとの思いをひるがえし、「本当の意味の勉強ができる稀少な教科」ととらえ、「他のどの教科よりも大切」「人間が必ず学ばねばならない科目」「今後生きていくのに一番必要なもの」「日頃軽視していたことの大切さがよくわかった」「新しい発見が多くなった」「とくに自分の意見の確立に役立った」「本当に男も女も協力して一家を支えていかななくては」「とにかく家庭と社会のつながりがよく理解できた」等々、数多くの生徒たちが、それぞれに変革し成長してくれた三年間でもあった。その喜びは大きく、私の共修への確信は磐石のものとなった。紙幅の都

合で、象徴的な一例のみをあげる。

家庭科を学んで

川本 晃男

家庭科なんて!! と最初は思った。こんな学科は、小学校の時に習ったかぎりでよいと思っていた。そして高校に入って、またしなければならぬのかと思うとゾッ!! とした。けど、小学校とは本質的にちがっていることがわかった。小学校では料理や裁縫ができさえすればそれでよかったけれど、高校では現在の社会の状況や家庭生活のことなど、急に高度になったのにはおどろいたものである。

家庭科を学んでみて、料理一つを作るにしてもカロリーなどを考えると、極めてむづかしいことや、経済のことなど今の自分の家にあてはめて考えることができた。またそう考えると、自分はいくらくせいたくなくことをしているなあ、親の気も知らないで、わるいことをしてきたなあとつくづく思った。

家庭科は、僕にそういう社会における常識的なことや、また知っておいてよいというようなことをいろいろと教えてくれた。少なくとも僕にとっては、利となったのである。だから今、家庭科に感じることは、二年のはじめに感じていたこととは、まるっきり逆になった。

この一年いろいろありがとうございました。

(前京都府立田辺高等学校教諭)



編集室から
あなたに

あなたも、Weのつくり手に……

◆新しい家庭科の中身をみんなで創ろう!

「家庭科教育に関する検討会議」は、男女とも選択という方向だけを出し、教育課程審議会にゲタを預けていましたが、その教課審がいよいよ発足しました。最終答申は'88年6月が目途と聞きます。もはや女子のみ必修ということはあり得ません。そればかりか、家庭科を、男女平等を貫き、性別役割分業を変革するための教育にしていこうとこそが求められているのです。男女共修の家庭科の中身をどう構築するか、それが今一番問われていることです。家庭科教師や家政学・教育学の研究者はもちろん、生活しているすべての人が、家庭科の中身をめぐって百家争鳴

すべき時は今、です。

Weは「こんな家庭科をこそ」の欄を新設します。答申が出るまで、いや半永久的に続けたいものです。教課審委員が参考にしたくなるものを、私たちWeで創ろうではありませんか。

はがきに気軽に書かれたものでも、大論文でも結構です。ともかく、どんどんイメージをふくらませましょう。メ切りも特に設けません。随時お送り下さい。

この呼びかけに答えて下さる方がなかったり、また二・三回続いて開店休業になるようだったら……、いいえ、そんなことあるはずないですよ。

あなたが、Weのつくり手、そして、新しい家庭科のつくり手なのですから

新しい家庭科を創るために◆◆◆大学では

家庭科、男女共学の

時代を迎えて

——見直し迫られる
食生活の教育(1)——

佐藤 慶子

鞆の中にもいつも入れている私の電卓は、七センチ四方のソーラー型、黒皮ばり二つ折りの名刺入れタイプでたったの二千円。世に言う軽薄短小だが、それ以上に時の流れを感じるのは、「電池」を入れなくてよいということである。戦後の私たちの生活を彩った真空管が消えてゆき、今小型機器から電池が消えつつあるということは、技術変化の波を生活のここかしこに感じざるを得ない現象のひとつである。

しかし、高度技術が簡単に適用できない領域、それは、人間自身のありようであり、人間が食べたり、着たり、ふれたりするものたちである。何

といっても、それは人類の歴史はじまって以来の長い経験科学の集積であり、単に人間のもつ貨幣や産業機械が増加したぐらいでは超越できない多くの壁がある。その壁にぶつかる度に気づかされることは、「人間って、何だろう？」という不可思議さである。

ところで、私は十年来、家庭科における食生活教育は再検討するべきではないかと考えていた。そんな折読んだ次の文章は、教師としての自分を反省させられるものであった。

1、家庭科優等生の嘆き

これを書いたのは、境野米子さんという主婦で、消費者運動、とくに有機農業に関心を持って活動をしている方である。『土と健康』（八三年五月）に掲載された「私たちの食生活はどうあるべきか——小学校の家庭科教科書を読んで——」の主要部分を引用すると——

「粉ふきいもやサンドイッチの調理実習は、今でもはつきりと思い出せるほど印象深い。学校で皆で作った楽しさもさることながら、家へ帰って作り、家族に喜ばれた嬉しさから何度も作った。また、『パンは牛乳や肉と一緒に食べるが、ごはんは汁と漬物だけで食べがちなのでパン食の方が栄養豊かな食生活だ』あるいは、『ビタミンCは毎日とらないとダメなので、調理による損失の少ないサラダが最適だ』などと教

えられたことを長年実行してきた。栄養等の目に見えないものを考えて食べるという大切な視点を教えて頂いたと思つて感謝もしているが、栄養だけしか教えてもらわなかったために大きな損失もこうむつた。

昭和二三年生まれの私はインスタント食品時代を享受してきた。ラーメン、ジュース、コーヒーなどを無批判に食べてきたし、パンを食べられない父や祖母としばしばいさかいを起こした。白米なら強化米（ビタミンを添加）でなければだめだと家庭科で習つたことを母に強要し、煮物や漬物ではたんぱく質がたりないと市販のソーセージを買つて食卓にならべたりもした。『安全性』と『食文化』の重要性を認識し、食べものは『栄養』だけではないと思ひしらされたのは、病弱な息子を産み、安全な食生活とは何かを模索し始めてからであつた。

家庭科教育がつくづく大切であると思うのは、以上の私の体験からと、昭和二六・七年の中学校家庭科教科書を読んで衝撃を受けたこと、さらに、食品公害に取組んできて今日の食生活や食品のありように種々の疑問をもつようになったからです。家庭科は、学校教育のなかでは単なる一分野にしかすぎず、算数や国語などと比べると、あつてもなくてもよいような位置しかなくても、家庭生活のない人はないわけ、ひとりひとりの子どもにとってその内容は重い。衣食住とい

う生存に欠かすことのできない大切なものを、将来への見通しのなかでよりよく選びとれる子どもに育てる一助に家庭科がなるようにと願わない親はないでしょう」として、子どもたちを取りまく食生活の状況を取りあげ

「このように、すさまじいばかりの食べものや食事観の荒唐をふまえた上で、私達の食生活はどうあるべきかと、今こそ考えなければならぬと思います。家庭科教育は、子どもにこうした現実をよりよくしていこうとする実践的な力量をつけることこそが求められていると思います。決して、『食品の洗い方、切り方、加熱の仕方……』といった技術の習得だけを目標にしてはならないと思うのです」と教科目標の根底にかかわる洞察をしている。

そして、教科書で取りあげている調理の題材から

「これらの調理はあまりにも一般的で、季節感、地域性といった料理に欠かせない大切な要素がまったくありません。さらに、調理材料である野菜や卵を自然の恵みとしてではなく、単なる商品としてしか扱っていないために『食事を作る』ときには、栄養素がかたよらないように』ということだけが教えられてしまっています。

人間が自然とともに生きている時にはあたり前に存在していた季節感や地域性によって、私達の祖先はその地域独自の食文化を作りあげてきたのです。こうしたものをとりもどす

のではなく、画一化の方向へ急速におしすすめている大きな原動力に家庭科教育がなつてしまつていゝのではないかと思わざるを得ません」と嘆いている。

そして、ビタミンCの扱いが生野菜に偏つてゐることの問題点やせんに質の生理的効用が見落とされてゐること、せんに質をとるにはむしろ根菜の方が有効であることなども伝統食の合理性であることを示した後、次のように結論づけてゐる。

戦後、私たちの食生活に定着した多くの食品はアメリカから輸入されたものが多く、『米食民族の食習慣を米から小麦に変えていくことは可能』(高嶋光雪「アメリカ小麦戦略」家の光協会)というアメリカの農業政策と、安い工業製品をつくるための安い賃金、そのための安い食べ物を求める日本経済の弱点とが結合してゐる状況を、教師も気づく必要性があることを提起してゐるのである。境野さんが驚いてゐるのは、昭和二十六、七年ころの中学校教科書を見たところ、食物領域において、(1)季節を重視してゐる (2)伝統的な料理を柱にしつゝ (3)食生活の改善を打ち出してゐること (4)さらに自給(家庭菜園のやり方、鶏ややぎの飼ひ方、自家用加工食品の作り方)を重視してゐる、という各教科書の共通性があったことである。つまり、戦争後の新生家庭科が発足した頃の教科書が、今の教科書と読み較べてみるとかえつて納得

できる部分を残してゐたというわけである。

2、教える側としてだけでなく

この筆者は、小さい頃家庭科の優等生だった。習つたことを家庭でも実践し、むしろ周囲に迷惑がられるほどだったようだ。しかし、病弱なわが子を何とか健康にと願つて自発的に学ぼうと、食物が背後に背負つてゐる経済的社会的諸課題を知るようになった。そうして見ると、食生活は食品の買ひ方、調理の仕方では終わらないし、食生活の教育も、栄養的な献立を調理できるようになりましよう、だけでは終わらないのではないかという疑問にさらされるといふことである。

家庭科の教師は何も悪意をもつて、食生活にまつわるさまざまな諸問題を隠そうとしてゐる訳ではない。しかし、多くの場合、この筆者同様に無知な部分をかかえており、また、この筆者と違つて、食生活をめぐる諸情報を集めて歩き、また消費者運動として実践してみるといふ機会に必ずしも恵まれない。そのうち、栄養から出発した食生活の教育は、やがて過剰摂取や欧米型成人病を回避する日本型食生活の見直しへ、家族の団らんと食事などという食事のとり方(食生活学)へ、と課題を移してゆく。余程注意してゐないと時流を把み切ることができない。

生活というきわめて現実的、実践的接点と結び合わされて

いる家庭教育、そして、他に例を見ないほどの激しい変動をした戦後四十年のわが国の消費生活、家庭生活、これらに振り回されたのは教師も研究者も、そして教えてきた生徒たちでもあった。しかし、激しく変わる生活運営の価値観に、素早く対応しようとしたのは、実は過去の生徒、すなわち今の消費者ではなかったかと思う時、心に思うところがあつても、何もしない私たち教師は、国民の教育を受ける権利を、無意識のうちに粗末にしてはいまいか、という自責の念にかられるのである。

児童・生徒の親が、一人の率直な市民として、教科書を読み比べ、自分なりの経験と意見を、まとめることができるこの現実の前に、教師は専門家としての自覚と対応をやはり示さざるを得ないであろう。私は、これを読んでしばらくは、言葉が出なかった。

自分一人が学ぶ、新しい情報を知る、ということとは、その気になればそう困難なことではない。しかし、教師という集団が、日常の勤務とそれぞれの家庭生活を背負い、その新しい知識、適切な教授法、教科観に触れる価値観の変動を追究してゆくことは、思うほどには容易ではない。

教委の研修会もある。教研集会もある。しかし、そこで提示されるのは既に一定の評価を受けるに至ったものが中心であり、新しい方法、将来の動向を簡単に占うことは困難であ

る。消費者は、市民は、もっと遠くを見よ、もっと本質に迫れ、と無言のうちに教育に要求している。技術や価値観のめくるめく変動する時代に、教師はどのように現実に対応することができようか。学術研究か、民間研究か、適切な雑誌情報か、再教育期間の設定か、そのどれもでもあり、しかもそれのみではないかも知れない。

そうなのだ、教師が常に教える側にしか身を置かない時、変化は間接的であり、未来は予測がつかない。しかし、自らが生活の諸矛盾に身をさいなまれる時、状況は意外な確かさで教師自身の中に映像化されるのではないだろうか。

3、必要な教育を創造するひとたち

その頃、私はジャーナリストの砂田登志子氏を訪ねる機会があった。彼女は長くニューヨーク・タイムスの東京支局にいた人で、アメリカの生活情報や食品情報を紹介、翻訳している女性である。彼女がアメリカから持ち帰ってまだ新しい生活情報について聞いているうち、楽しいおみやげを見せてもらった。

それは、食べものについての絵本で、子どもがいろいろな食品の分類（大まかな性格わけ）ができるように作られたものであった。しかも、それは仕掛けつきで、お魚の絵のところなど、池で魚つりする場面が、背面の仕掛けで釣糸がしな

＊ひと＊

「フェミニスト・テレビ考」の

鈴木みどりさん



逗子駅からバスで
10分。お住いは山の
手にあり、閑静な住
宅地。

大学卒業後二年間
アメリカに留学した
ことが、鈴木さんにずいぶん影響を与えてい
るのでは。アメリカで「美」の認識の違いを
思ったと。日本は欧米指向的だが、アメリカ
は「それぞれ人種的美が違う」という意識。
黒い髪、直毛の美しさをすぐくほめられて、
あらためて自分のもっているものの美しさに

ったりゆるんだりして、今にも魚がつり上げられそうなか
わいい、情景になっていた。食品の種類は日本の食品とはやや
異っていたが、ミルク、肉、パンやクッキー、野菜や果物な
ど四種類ぐらいが大別できるものである。
こういうふうに住きどもなどに奉仕する仕事（たとえば、学
校ざらいの子に楽しく学ばせるセサミ・ストリートの番組づ
くりなど）の多くが女性の手になっているのを見て、ア

気付いたと。自分らしさの中にこそ美が……

日大の映画学科を卒業。卒論は「映像によ
る教育」。小学生の時から演劇に興味。その
頃お住いが早大近くで、早大祭には必ず演劇
を見に行っていた程。中・高は女子のミッシ
ョンスクールに通い演劇部。大学は、もっと
新しいものをと映画を選んだ。

留学した十八年前は、アメリカも日本もテ
レビの変換の時。テレビが報道メディアであ
るアメリカでは、残虐なベトナム戦争が日々
家庭に報道され、大きなインパクトを与えた。
それは戦争終結へ導いたと。日本は高度経済
成長の影響で、娯楽メディアとして大普及。
'68年にアメリカでテレビについて考え、行動
を起こす市民団体ACTが発足。鈴木さんは

アメリカの文化活動にはなおなお学ぶ点があるという彼女に、
「これは何歳ぐらいの子どものためのの？」と質問した。「ま
だ、おむつをしているような赤ちゃんよ、おむつをかえても
らいながら見て楽しむのよ」とこともなげに答えられ、今度
こそ私はため息がでるほど驚かされてしまったものである。

(山形大学)

翻訳などの仕事をきっかけに、77年、FCT
(子どものテレビの会)を作り、今年で八年目。
テレビはお子さんと一緒に見、一日、30分
1時間位。その時は、テレビのメカニズムを
機会あるごとに話していた。これは子育ての
一環です、と。番組調査の時はビデオでとっ
ておき、子供たちが学校に行った後、見る。
その時は「一生懸命」。まさに「苦行だ」と。
テレビを変えるのは、くだらないと言つて
テレビをみない人。だからこそ、番組調査な
どなんらかの機会にみてもらいたい。教育に
携わっている人は特に。テレビの全体像をみ
つめてほしいと。

FCT会員130人。実績を確実に積みあげ、こ
の巨大なテレビとよくぞ闘っている！（馬場）

〔7〕

感動



私が、とあるテレビ番組に登場した時、耳のすでに不自由な八十七歳の祖母は、離れた故郷で、「げんきじゃったのう」と受像機の孫に語りかけ、実際に会っているような気分であったという。そして、横向きの姿勢を変えようとしないう映像の孫息子に、「こっちは見けサ」と言いながら、受像機に手をかけてそれを動かそうと試み、画像を横から覗き込んだのだという。私は、後日、この話を母から伝え聞き、ほのぼのとした感動を覚えた。

この感動の根拠は一体何だろうか、と考えてみる。すると、すぐ近くでもうひとつ、次を思い出す。

「日航ジャンボ機墜落」のテレビ報道に釘づけになっていた時。奇跡の生存者として救出された少女のおばあさんの、二言三言のコメントは、私をとらえて今も離さない。

わが愛すべき孫娘が、担架で痛々しく運び

出されてくるのを見て、そのテレビ画像を、なで、さす、つてあげた、というのだ。クソ科学的に言えば、相手は単なるテレビ受像機器なのであって、さすつてあげたところで、行為そのものは全く届きようがないのに、である。なんと直截な、心のこもった表白の仕方であるうか。おばあさんの裸形の心に、じかに触れる思いがしたのは、おそらく私だけではないはずである。

ともあれ、「受像機を横に向ける」といい、「画像をさすつてあげる」といい、考えてみれば、どうしようもなく非科学的で、非合理的行為ではある。ではあるけれども、その「非科学的」で「非合理」な行為が、私の感動の根拠であったのは、どうやら確からしく思われる。

ではこの時、ふたりの老人の経験的な「科学的認識」は、どこに行っていたのであろう

か。比喩的に言えば、おそらく、膨らみに膨らんだある心的状態が、その限界に耐えきれずに弾け散り、霧状となって、「科学」や「合理」を包み込んでいたのだ。包み込んで圧倒していた、といってもいい。

ところで、このような行為は、少し注意深ければ、子どもの世界にも容易に見ることができる。ある集まりで、幼稚園の先生が次のような話をしてくれた。

鉢植えのアサガオがかわいい芽を出したので、みんなで大事に育てていた。そんなある日、ひとりの幼児が、別の植木鉢に丹念に水をやっていく。先生が不思議に思っ何が植えてあるのか訊いてみたら、なんと「ビー玉」だった、というのだ。

たとえばこのような話を聞いて、馬鹿げた認識だと、一笑に付す人はおそらくあるまい。むしろ、愛らしさと、ほほえましさをこそ認めるだろう。逆の言い方をすれば、私たちの心地よいかすかな感動は、非科学的で非合理的な、子ども固有の認識に支えられているのだ。

そうすると、先の老人の認識と、幼児の認識は、レベルが同じことになるのであろうか。

「老いて再び稚子になる」とか「二度おぼこ」などとコトワザにもいうように、確かに、現象的には同じように見えるのかもしれない。しかし、「似て非なるもの」という言葉もまたあるように、その内実は当然異なるものと見なすべきである。

そこで問題は、どう異なるのか、ということになる。次のように考えてみる。

老人にあつては、ある心的状態が膨張し、それが前面に突出することによって、いったん形成された科学や合理性が、後方に退けられる。つまり、心的状態の裸形の表出が最優先されることによって、非科学や非合理が現象する（庄司和晃の理論でいえば、「おり」の過程）。

一方、幼児にあつては、科学や合理性が形成される途上で、その空隙を埋める空想や想像が、非科学や非合理を誘発する（「のぼり」の過程）。

と考えれば、両者の認識レベルの違いを、過程的構造の違いとして把握できる。つまり、老人の認識レベルと幼児のそれとは、同一でなければ、老人の方が退行したのでもむろんない。非科学的であつたり非合理であつたりという現象は同じであつても、もともと過

程が違ふ、というわけである。

ここまできて、さて私たちは、再び、子どもの問題に立ち戻らう。

みてきたように、子どもに固有の認識が、非科学的で非合理的な世界に大人を拉致するのにもかかわらず、近代学校は、それを振り切る方向で進行してきたのではなかったか。いやむしろ、「知識の詰め込み教育」というもっと積極的な方法で、子どもの豊かさを封じ込めてきたのではなかったか。

たとえば、「心」ってどこにあると思う？と、子ども達に質問してみた。すると、「え——ッ?！」と長引かせる例の反応の後、「胸にあると思う」（33人）「おなかだよ」（3人）などと、クラスは騒然。富岡君は、「どっかに隠れていて、そんな時そんな時で出てくる」と考えた。「この野菜嫌いなんだけど、嫌いだな」って心は、この辺にあるよ」と机の上の野菜と口の間を、スプーンを持った手でグルグルと示してくれた。そしてさらに、「きのうのプールで水が冷たかった時、冷たい」

って心は、足の辺にあった」と真顔で続けた。すると、じっと聞き入っていた栗林さんがハタと思ひ付いた。「冷たい」って心は、気持ちでしょ。気持ちは脳が命令するんだか

ら、心は脳にあるんだと思う」と。これに同調の子が3人。食べる手を休めて、議論百出。妙に活気のある給食時間になったのだった。

それにしても、ビー玉を植えた幼稚園児の話と同様、富岡君の「心—移動出没論」の、なんと新鮮なことであらうか。ナルホド、と感心してしまうほどである。

ところが残念なことに、近代学校は、近代科学や近代合理主義をその路線としてきた。だから、子どもに固有な空想的認識は、非科学や非合理として排除されてきた。もつとリアルに言えば、「知識の詰め込み」は「点数」になつても、非科学や非合理は「点数」にならないのである。

しかし、考えてみればわかることだが、近代科学の歴史は、空想力や想像力をバネにしてきたのだし、非科学や非合理の時代も確実に経てきたのである。その人類史を、子どもが圧縮して背負うのだとすれば、突飛で荒唐無稽な子どももの認識もまた、正当に受けとめられなければならないのではあるまいか。

ここ数年会っていない故郷の祖母と、テレビの中のおばあさんに、何かを私はゆさぶられて、こんなことを考えたのである。

（横浜市立日吉南小学校）

Counsellingの応用 counsellingの応用 counsellingの応用

—現場から—

「共に生きる」 その1

児玉 すみ子

Eの存在

高一のEを担任してまだ日も浅い頃である。朝早く、Eの母から電話があった。

「昨夜、Eの父が、自ら命を絶しました。私が勤めに出ていて遅く帰りますので、Eが発見者で、その後の処置も、全部一人でやってくれたのです」

父の痛ましい死に直面した、十五歳のEの衝撃を思った。そして、入学式の日、呼びとめられ、Eの母から聞かされていたことを思い出した。

「父親は、長く心を患って、家で療養してあります。Eは、無口で、暗く、ふさぎこむことがあると思いますが、こんな家の事情があることを、お耳に入れておきたいのです。学校では、少しでも気が晴れるような毎日が送れますよう、よろしく御配慮ください」

人には知られたくないプライバシーを、思い切って打ち明けてくれる母親の切なる想いを、私は、胸に痛く受けとめたのであるが、さて、私に、何ができるのであろうか。

入学当初に書く、「高校に入って」という作文に、Eは、こんなことを書いていた。

自分は消極的で、内気で、困っている。中学時代は、女生徒の一人も口をきけなかったが、高校では、異性の友達とも自然につき合えるようになっていたいと思っている。それに、大好きな野球に打ち込み、勉強とも両立させていきたい、というのである。

文面から溢れる、彼の意欲に、私は望みを持った。願わくば、父の死という不幸が、彼の、この若者らしい意欲を、そぐことのないように、ひたすら祈る気持で一杯であった。人の生き死にに代表される、生きる上での深刻な問題に直面している生徒に接する時ほど我が身の無力を思い知らされることはない。「祈る以外に術なし」を、実感させられるのである。

しかし、その祈りは、又もや、陽気で屈託のないクラスメートたちの動きによって、成就されることとなる。

野球部に属し、なかなかの腕前のEには、れ込んだ男子のクラスメイトたちが、クラスに「○○○スターズ」と「○○○アンズ」という野球のチームを作り、暇を見つけては、対抗試合をして遊ぶようになったのである。これに、女子の応援団ができたりして、いつも、クラス内は、珍プレー・珍ゲームの話で、笑い声が絶えない、そんな和気あいあいとした交歓の中で、Eの顔にも、微笑みが浮かぶようになっていったのである。

当時、私は、クラス作りの一環として、グループ・カウンセリングを試みていた。一グループ七、八人、話の交通整理の役を私が担って、自由な雰囲気の中で、何でも思う存分話し合い、心のつなが

りと解放感を味わうというものである。

Eは、あれこれ、話の花を咲かせるメンバーに耳を傾けてはいたが、自ら進んでしゃべることはしなかった。話題が部活のことに移った時、私がEに意見を求めると、こんな答が返ってきた。

「野球部の練習は、ハードで、家へ帰ると、くたくたになるけれど、それから僕は、働いている母と、幼い弟のために、夕食を作るんですよ」

「わあー、偉いんだな。E君、どんなものを作るの」と、女の子のメンバー。

「冷蔵庫の中にあるものを見て、さて、何にしようかって考えるから」とE。

男子も女子も、感極まって、Eを見直す。私の心にも、Eへの敬愛の気持が湧き起こる。

◇ ◇ ◇

クラスに、何でも話し合える雰囲気生まれ、自分たちが疑問に思うことの解明を、話し合いによって行う習慣がついた頃、ある事件が起こった。

Sという数学の女の先生が、この活発なクラスの問題提起の対象とされたのである。

「週6時間の数学を、熱心に教えてくれるのはいいが、あれ程多量の宿題と、テスト攻めでは、たまらない。数学だけをこなせばよいというわけではないのだから、消化できる量を考えてほしい」というのである。

S先生は、それを受けて、「勉強したくない人たちの甘え」として退けた。「若い時には、何が何でも量をこなさなければ、実力はつ

かないのだから」というのが理由であった。

納得のいかないクラスは、その後も、何度も討論を行い、S先生にも加わってほしいと申し出たが、感情を害したS先生は、態度を硬化させてしまい、その後、数学の授業は心の行き交いのない、惨たんたるものになっていった。

担任の私も仲に入って、收拾しようとしたが、S先生の態度を大人数ないと批判する者、試験ボイコットで対抗しようという強硬派、問題提起以前の方が平穩でよかったという後悔派、数学はもう捨てたとする諦め派、ここは謝まって何とか元通りにとする妥協派、が入り乱れて、收拾がつかぬ一方で、S先生は、私のアプローチも避け、拒否する姿勢をとり、困った状況に陥ったのである。

そんな時、放課後の全体の話し合いの中、又、同じような意見のやりとりの後、Eが、発言を求めた。入学以来、初めてのことであった。

「僕たち、もしかしたら、S先生だから、こんな問題提起したんじゃないだろうか。もっと恐い先生、強い先生に對して、いろいろ感じているのに、同じことができただろうか。」

僕らが結集して、S先生だけに、ほこ先を向ければ、先生だってショックを受け、硬化してしまうんじゃないだろうか」

低い声ながら、腹から絞り出すように、皆に問いかけるEの真剣な調子に、クラスは、しーんと静まりかえった。

代表者が、S先生と静かに、ざっくばらんに話し合いを持てたのは、数日後のことであった。代表者の一人に、Eも加わっていた。

(つづく)

夕風に吹かれて

武田 秀夫

私がまだ教師をしていたころ、授業を教えたことのある卒業生のその妹に、「お姉さん、元氣かい」となげなくたずねたら、その子がいかにもうんざりしたといった顔で、「お姉ちゃんね、先生たちに私のことをきかれたら、高校でちゃんとやっていますからご安心下さいと言っておきなだって」といいました。その瞬間、私はぴしっと面をたたかれたような気がしました。

その子の姉は中学にいたあいだ少々教師をてこずらせたことがあり、教師たちはその妹の顔をみるとみんな判で押したように姉のことをたずねるので一年生になったばかりのその子はすっかりいやになってしまつて、家に帰ってきてはそのことを言う。姉は姉で、いつまでたつてもそういう目でしか自分をみない学校の教師たちに激しい怒りをこらえながら妹に言う、「私は高校でちゃんとやっていますからご安心下さいって言うっておけばいいんだよ」と。そしてそのかたわらでは母親がこれまたやり場のない怒りをじっとこらえている。私は一瞬のうちにそうしたなりゆきを察し、はずかしさにあ

とのことばをつぐことができませんでした。

退職する二、三年前、職員室で同僚にこんなことを話したことがあります。

「考えてみれば、卒業生に町で会つても、こっちの文句はいつも決まってるんだな。『どうだ、まじめにやつてるか』、それがまず口をついて出る。ひどい話だよ。つくづくいやになる」

すると同僚の教師も、「ほんとどうにやだね。まともな人間どうしのつきあいじゃないよ、これはもう」と心底うんざりしたといった顔で言いました。

登校拒否をおこした生徒のことで国立小児病院をたずねたとき、W先生もやはりいかにもうんざりしたといった顔でこう言いました。

「先日登校拒否の女子高校生に小学校から中学校までの通信簿を全部みせてもらったんだけど、その所見欄はどれもこれも『がんばれ』ということばのオンパレードなんだよね。『よくがんばった』『もうすこしががんばろう』『がんばればできる』もうそればかり。これじゃあ子どもも疲れてしまうよ」

今朝、テレビニュースをみていたら、ある議員が、議員特有のゆっくりとした奇妙なイントネーションで「わたくしの考えを率直に言わせていただけますならば、都庁新宿移転問題につきましては基本的に不賛成なのであります」などと演説していて、紅茶をのみかけていた私は、あやうく吹き出してしまふところでした。こう書き写してみるとおもしろくもなんともありませんが、もったいぶった顔と音声がともなつて、それはなんともいえずおかしいのです。

率直に、ということばや、基本的にということばのこの上ない無内容さが絶妙な効果をあげていました。

そういえば、やはり教師をしていたころ、生活指導の学校間連絡会である教師が、手におえない生徒を強引に転校させていまはむこうの学校でおとなしくしているそうですと得々と語ったあと、同席した指導主事にむかって「転校措置が生徒を立ち直らせた一つの事例ですね」といったとき、私はなにを言いやがると思う一方で、そのもったいぶったことばの使い方に思わず吹き出しそうになったことがありました。

閑話休題。そういう私のことばもながらく教師をつとめているあいだにすっかり手垢にまみれてしまいました。この霞通信を、ですから私は、そうした自分のことばをゴシゴシ洗濯して陽に干すようなつもりで書いているのですが、私はこのごろようやく、教室に通ってくる子どもたちに対する私のことばや姿勢が少しは変容をとげてきたかなと思えるようになってきました。

先日も町で自転車に乗った教室の卒業生にばったり出会いました。私立の工業高校に通っている彼は、「製図の点がよくなかったけど、学校はメチャおもしろい」といいます。都立の高校へ行っている女の子にも会いましたが、その子は、「あたし、甲子園に行けるかもしれないよ。いいときにいい学校にはいって、もううれしくて」とにこにこしています。別の日には無口な男の子がそれでも遠くから私をみつめて寄ってきて「いまおやじの仕事手伝って、結局定時制に行ってるんだ」と話してくれました。いずれもなんでもない立ち話ですが、道で出会った瞬間の雰囲気、子どもの顔、私の気持ち、そして話しているあいだのリラックスした感じ、やがて

「じゃあね」と別れるその別れ方、そのひとつながりの流れが、微妙に、しかし決定的に教師をしていたときとちがうのです。私と子どもたちとの間を、気持ちのいい風がすうすう吹いているようなのです。ああ、いい気持ちだなと、このごろの私は子どもたちと別れたあいつも思います。

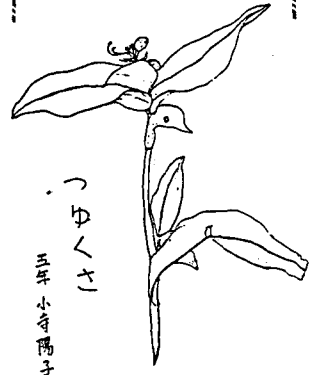
八月のはじめのある夜のことです。私は塾を近くでやっている若い人たちとバドミントンを毎週楽しんでいます。その日は授業もなく、汗を流したあと夕方から近くの店で気持ちよくビールをのみました。あんまりよい気持ちなので、よし、もう一軒と、皆で、行きつけの酒場に行くことにしました。昔ながらの炭火でヤキトリを焼いて出す、時代劇に出てきそうな小さな店です。その夜は青梅の駅の裏手にある永山公園で花火大会がひらかれており、私たちはTシャツ、ゴムズリ、ズボンだけのかまわない服装で手には何もみず二駅むこうの青梅まで電車に乗って出かけました。

丘にむかう狭い通りを花火見物の人波がつづき、家々の軒先には縁台が出て、みんなうちわを持ち浴衣なども着て夜空を見上げています。その空に花火が上がり、見上げる私の真上でズンと音がして大輪の菊の華がひらき、そして落ちかかります。空気は澄んで、夏の夕風がすうすうと肌を吹く。歩きながら私は、自分のからだやところがたいへん軽く、なんだか空を歩んでいるような陶然とした気持ちになりながら、ひとり心の中で、ああ、おれは教師をやめて、こんな歩き方がいつのまにかできるようになったのだと思い、やがて人波から分かれてやきとりの煙がただようその酒場の座敷に皆であがりこんだのでした。

＊ 学習の主人公たち ＊

はたらいっているよ

岐阜県揖斐郡春日村古屋分校の子どもたち



岐阜県の南西の端に標高千三百七十七
米の伊吹山がそびえています。

その東の麓の「コロボツクルの里」
(We 8・9月号参照)に古屋分校がある
のです。

児童は全部で十五名で、低・中・高の
複式学級をかまえています。

ここでは「ひとり歩きのできる、四チ
ヤンネルの生活のできる子」(たち)を
育てようと、教師四名は連携をとりなが
ら指導をすすめています。

四チヤンネルの生活とは、健康を基礎
に、学習、仕事、遊びをふまえた、自主
的・自律的な生活のことをいうのです。
子どもたちはとてもよく遊び、働きま
す。時には家計を助ける「労働力」です

らあります。

どうか「古屋の子」の働く姿をごらん
ください。

＊

(近藤 宏)

まきはこび

一年 小寺 豪

おとうちゃんがおので、木をわりました。
まるい木をたてて、おのをあたまのうえか
らおろしました。

木はパーンとおとがしてわれました。

おとうちゃんがわれた木をなげて、ぼくが
それをひろって、こやのそばにつきました。

なんかいいまはこびました。
はこんだらあせがでたのでやすんじからや

りました。

そしたら、まきはたかくなりました。

まえやったときより、きれいにつめました。

おとうちゃんが

「ありがとう。」

と、いいました。

このまきは、ふるをたぐるときにつかいます。

米とき

三年 藤原尚子

よる九時ごろ、おばあちゃんが、

「米あらって」

と、いいました。おばあちゃんは、足がいた
いし、えらいといっているのです、洗いにいき
ました。

米をふるから出して、ますではかつてボ
ールに入れました。

プラスチックのおけにくんである水を、ひ
しゃくでくんで入れて、ごしごしとかきまぜ
て、三回ぐらい米を洗いました。

水道からくる水は、雨の時はにじるので、
その水を米の中に入れると、ごみがいいるから
水がためてあるのです。

わたしのお父さんとお母さんは、滋賀県へ
一週間ずつとまり込みでいって、たおれた木

をおこしたり、木を植える仕事をしています。それでおねえちゃんとわたしはこうたいで米洗いをしているのです。

次の日の朝、おばあちゃんは、早く起きてガスのかまのスイッチをいれて、ごはんをたきました。ほとけ様にもごはんを供えてからわたしたちを起こしてくれました。

おじいちゃんとおばあちゃんと、姉ちゃんと、わたしと妹と、下の妹とで、朝ごはんを食べました。

とってもおいしかったです。

こえ運び

三年 藤田明子

お母さんとわたしとで、こえ持ちをしました。おかあさんが、おしっこを、おけにくみました。じやぼじやぼじやぼと音がして、くさいにおいがしました。

おけにいっぱいになるまで数えていたら、ひしゃくに八はいでした。

なわにぼうを通して、お母さんとわたしとでかついで畑にいきました。歩いていたら、かたがいたくなつたので

「タオルとつてくる。」

といつて、とりにいつてまいてまたかついだら、こんどは、いたくなくなりました。

おけのおしっこは、ちゃぼんちゃぼんして道に少しこぼれました。

「くさいねえ。きたないねえ。」

といいながら、がまんして畑までかついでいきました。

畑に着いてから、お母さんがおしっこを、

ひしゃくでじゃあじゃあとかけました。

しっこは土の中にしみこんでいきました。

お母さんが

「なっぱ、大きくなるよ。」

といいました。

かたがいたかったので、首を回す体そうをしたららくなりしました。



こてきたい
でボンボン
をふつてい
ます (三年明子)

だんど

四年 小寺利美

朝はやく起きて台所にいったら、母ちゃんが白い粉を大きなボールに入れて、お湯を入れて、こねていました。それで

「わたしにもさせて。」

という、

「手を洗ってきてからやって。」

といいました。私は手を洗ってきてから、ボールが動くので両手でおさえていました。

ボールの中には、白い大きなまるいかたまりができました。

母ちゃんがそのかたまりを、手で長くのばして、はしっこからちぎって手のひらでまわして、丸いだんごをつくりました。

私もつくりたくなつたので、

「私にもやらせて……」

という、だんごのもとをちぎってくれました。

私は手のひらに乗せて、くるくるとまわしました。するとひびのはいいたまるいだんごができました。母ちゃんが、

「もつとうまくやりや。」

といったので、もう一度やりなおしをしまし

た。

今度は力を入れてまわしていたらきれいな

形のだんごができました。

力を入れて、手をまわしながらつくつくといくと、丸いだんごがたくさんできました。

次になべのお湯の中にだんごをふちの方からゆつくりつづけて入れました。どぼんと入れると、お湯がかかってあついかからです。

しばらくすると、ふつとうしたお湯の中にだんごがこんにやくといっしょで浮んできました。母ちゃんが、おたまで一つずつくってざるの中に入れ、私はそのだんごを三こずつ皿に乗せて、仏様にそなえました。

おがむ時、「みんな元気です。おだんごができたのでみんなで分けて、食べてください。」といいました。

かざらなかつただんごをさましてから、そのまま食べてみました。あじはぜんぜんしなかつたけどとてもおいしかったです。

下刈り

四年 小寺 誠

父ちゃんが

「いっぺん山に来てみるよ」

といったので、下刈りの手伝いに行くことにしました。

ズボンに長ぐつをはき、軍手とかまを持ち

私がズボンを受け取ってうとしています。



リュックサックには、かしやちらしずしやお茶や梅酒を入れていきました。

父ちゃんについて急な山道をどんどん登っていききました。

草むらを通っていた時、急にへびが出てきて長ぐつの後ろにくつつきました。

「へび。」

と大きな声でいうと、父ちゃんが、「どれどれ。」

といったのでぞいてみて

「これはマムシやなあ。」

といって、地下たびでマムシの頭を上からふみました。するとマムシのしっぽが父ちゃん

の足首にまきつきました。父ちゃんのはしっぽをほだいて足を少し上げておいてへびの首をひもでくくって道のそばの木にしばらくつけた。へびはひもにまきついてもがいていました。ぼくはかわいそうに思っただけそのままにして上に登っていききました。

山に着いてからとてもえらかったので横になっていたらいつの間にかねてしまいました。起きてからかまで草を刈りました。

草がじゃまをして光があたらないと、山に植えた苗木がのびないので下刈りをするのです。左手で草をつかんで右手にかまを持ってざくざくと刈って山を登っていききました。

あせがいっぱい出しました。また刈っているところんでしまいました。そこには大きなながあつたのを知らなかったのです。

「おーい。」

と大声をあげたら父ちゃんが

「なんやあ。」

といってやってきて、父ちゃんも落ちてしまいました。けれども父ちゃんは大きいのでぼくを助けてから一人であがってきました。

とてもあつくて、シャツはべたべたにぬれたので新しいのかえてまた刈りました。

「おーい。めしやあー。」

と父ちゃんが呼びました。

ぼくはお昼が待ちどおしかったので、走っていった、木の枝を切ってはしにして、広いはっぱをさがしてきて、それをお皿にして、おすしを食べました。

はやく食べたのでのどにつまって苦しくなりました。母ちゃんが梅酒を水筒のふたにくんでくれました。

「こういうあつい日は、梅酒にかぎる。」

といつてがぶがぶのんでいました。

下刈りがこんなに大変だとは思いませんでした。でも楽しかったです。

じやがいも

五年 佐藤めぐみ

土曜日学校から帰って、私と利美さんと妹の千恵といっしょに、伊吹山のドライブウエイのすぐ下にある笹又の畑へ、じやがいも掘りにいきました。

それは、ポテトチップスをつくって食べようという相談をしたからです。

三人とも藤つるであんだビクを背負い、利美さんは、くわを持って行きました。

「えらい。えらい。」

といつて、急な坂道を登っていると、道にき

れいな水が流れていたの、手ですくって飲みました。

笹又に着くと、伊吹山はみどりがいっぱいでした。畑に着いて、じやがいもを掘り始めました。茎をぐぐつと引つばると、土の中からじやがいもがたくさん出てきました。

大きいのは直径が十センチもあったので、

思わず

「わあ。大きい。」

と、大声でいってしまいました。

親指でこすっていると、いもの皮がぺろんとむけてしまいました。新じやがだから、皮がうすいんだなあと思いました。ぬるつとしたのは、でんぶかなあと思いました。

おもしろいのでどんどん掘っていくと、そのうちにじやがいもは、ビクにいっぱいになりました。

「もう掘るのやめようか。」

といつて、やめました。帰る時、

「重い。重い。少しにすればよかったねえ。」
といいながら、くねくねの山道をおりて家に帰りました。

家に着いてからは、じやがいもをうすく切つて、ふきんで水を切ったりして油であげてポテトチップスをつくって食べました。

スズキ



洗濯物干し

五年 小寺陽子

朝六時半ごろ母が、

「陽子。洗濯物干しといてよ。」

といつて、父と自動車に乗って仕事に行つてしまいました。

私は起きて、テレビをみながら朝ごはんを一人で食べました。

それから、母が、「山仕事で着がえが間に合わないから、干しておかないといかん」というと思つたので、干すことにしました。

まず洗濯機の中から、父や母のシャツを出してきて、えもんかけにかけたり、竹ざおにかけて洗濯ばさみでつまんだりして、車庫の中の日の当たるところに干しました。

それはシャツの数が少ないので、早く乾かないといけないし、車庫の中は、雨が降つてもぬれないからです。

次に自分の服は二階に干しました。それは

体操服などはいっぱいあって、乾きがおそくても、すぐにはいらなからずです。

これで夜までには乾くだろうなあ。すると母はよろこぶだろうなあ。と思いました。

次にかばんを背負ってから、テレビの電気が切れているか確かめてから、戸じまりをして集合場所へ走っていきました。

そこではみんなはまだ遊んでいたのではありませんでした。

薬草

六年 小寺江利

母がせたに薬草を背負って伊吹山から帰ってきました。

せたには、米袋を切った紙に、じゃこうそう、とうき、ぼうふう、げんのしょうこなどが分けて包んで積んでしぼりつけてありました。とうきのいいにおいがプーンとしました。

それを母と分けて背負って、下の大川へ洗いにきました。せんじて飲むのだから、きれいに洗わなくてはならないからです。

まずとうきを流れ水につけて、根っこをたわしでこすって土を落しました。何本も洗っているうちに、足が痛くなったり、手がだるくなったりしてきましたが、がまんをして洗

いました。

じゃこうそうや、げんのしょうこも分けて洗いました。

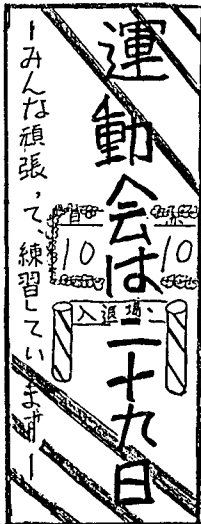
洗った薬草は家に持って帰って昼はえん側のコンクリートの上になたてかけて、夜は家に入れて二、三日干していると乾いてしまいました。

祖母や母は、土間にビニールのシートを敷いて、その上で薬草を「押し切り」で細かく切りました。ざくつ。ざくつ。と音がして、みどりの薬草の山ができました。

それを私が、かきまぜて大きなビニール袋につめました。

あたりには、あまいようなにがいような薬草のにおいがプンプンしました。

この薬草は、寒くなってから、せんじて飲んだりするのです。



*

身近なところを季節の花が次々と咲いて、通り過ぎていきます。今はひがんなの紅があつちこつちの山肌をかざっています。

土地産のいもを使ったこんにやくも出はじめました。

渾水寸前だった谷水も、今度の雨で何とか持ちなおしました。もう給食も大丈夫です。

こうした「自然」の中で、紅いほつぺたをした子どもたち十五名と、先生たち四名は、今日もくらしを楽しんでいます。

屋久島に移り住んで

手塚 賢至

引越して来たのは三月末であつた。妻と七歳を頭に六・四・三歳の子供たちと猫一匹を引き連れて埼玉県入間市を發ち陸路トラックで幾日か。着いた先はここ鹿児島県の屋久島。鹿児島港を出て四時間の船旅。時化に揺れる船の上から島の姿が大きく目前に広がり、招くように曇空がわずかにほゞけて、陽の光が射し、島の山岳部を明るく照らす様を皆で見えていた。山腹の緑に囲まれて山桜の白い色が固まりになつて散らばっている。こんな季節から半年が過ぎた。

雨が上がり透き通るように晴れた日には海上はるか、九州最南端、佐多岬や開聞岳がかすかに見て取れる。円周百kmあまり。ほぼ円型の島。九州一の高峰宮之浦岳をはじめ二千m近い山々を中央に収め、全島山塊、海上アルプスとも呼ばれる島。

亜熱帯から亜寒帯まで植物分布が連なる。縄文杉（推定二〇〇年）に代表されるようなとほうもない樹齡を持つ杉の原生林（一般に千年以上の杉を屋久杉と呼びそれ以下は小杉と呼ぶ）。それらを育む雨、雨、雨、雨。無数とも知れぬ谷川が清流となつて走り、巨岩を噛み、溜まりはあくまで澄み通り、碧い海へと注ぎ込む。ヤクザルもヤクシカも人間も、同じ水を飲み生きている。この多量の雨と高温によつてすさまじい植物たちの宴が生まれる——と書き出せば屋久島の自然に関する記述はキリがない。世界的にも貴重な自然遺産であると指摘されることもキリがない。

私とて半年という僅かな期間でこれら龐大な自然のすべてを知つたかぶりする訳にはいかないから、ここに住み始めてから自分自身が体験し感じたことを日々の生活を通して書いてみる。

火を起こすことから始まつた。屋久島の北部一湊（いっそ）という漁港から被さるように立つ山へ向かつて回りくねつた狭い道を四kmほど登ると「白川山（しろがやま）」という集落。ここが私たちの生活の場。島外から想いを寄せた者たちが集いつつ、集落を形成し私たちで十戸、現在子供たちを含め三十五名。山あいの谷間に点在する新しい里。ここで公民館と呼ばれるだれもが泊

まれる建物に仮住いさせてもらっている。ここに囲炉裏が
あって、火を起こすことから私たちの生活は始まった。薪を取
りに山に入り、割って焚く。たったこれだけのことに生きて
いくための凝縮された営みがあるような気がする。馴れない
と火を起こすのは難しい。木の性質を知り、炎と語らないが
ら、ボウボウと無駄に燃やさずそして絶やさず。近頃やつと
いくらか上手になって人間らしくなったかなと思う。

そして水。家の脇を小さな谷川が流れていて、この上流か
ら水を引く。この川は「白川山」の中心を流れる白川に流れ
こむ。白川は美しい川だ。両岸は艶やかな葉を持つ照葉樹の
群に囲まれ、花崗岩の岩の間をゴウゴウと音をたて力強く流
れていく。雨粒も大きい。遠くから雨雲が次第に近づく様
手に取れるようだ。見事な雨粒が地にある物すべてに打ちつ
ける。周りがボンヤリ霞むような激しい雨の中で響く白川の
音を聞いていると、まるで水底の王国。雨が上があれば谷沿
いの道を大きくカーブする度に現れる虹に出合う。又虹の列が
海の上にいくつも重なり、まばゆく輝き、溶けるように重なる
時がある。

何か夢中になって仕事をしていると聞こえてこない川の音
も、ふと手を止めると静かに体にはいつてくる。いくつもの
川の音が聞こえてくる場所もあり、その音は止まることがな
い。そう言えば人間の体内七〇％は水分ではなかったか。

光にもたくさん種がある。

輝やかしい日の光。海面に反射する眩い輝き。海底を映し
出すスペクトル。子供たちの笑い声にはじける夕方の陽光。
ランプの揺らめき。ランプの光にも初めて出合った。ランプ
は必要な物を、話してる相手の顔や、唇の動きを、大切な物
はきちんと表し、いらぬ物は描き出さない。必要でないもの
はいらないと柔らかく主張しているようだ。夜になると天
空に輝き渡る星、そして月、満月の夜は月の光を受けながら
夜長焼酎の宴となる。橋の上で川の音を言葉が歌が交感す
る。月が時間を越えて眺めている。

一本の樹にもそれぞれの主張があるように感じられる。人
が生きて同じほどの。この島の豊かな自然の中でも、無謀
な森林伐採は続き、人間は自然とどのように互いの意志を切
り結べばよいかわかっているようだ。

俄か文章書きの浅はかき、もつと私たちの生活の実際や希
望を書きたかったが、枚数がつきてしまった。作り始めた家
のことや子供たちの毎日、長女が通い始めた学校のこと、自
給をどのように実現するかとか、屋久島の森林の実態。やつ
と屋久島の自然を上滑りして終わってしまった。編集部の意
図に添えずにゴメンナサイ。

(画家)

宙ぶらりん悶々族の

モンモン

ささやかな行動

高橋 泰子

ハイ、こんにちは！ 私、花の四〇代です。なんて——
ガンバリやさんのWeには、思いっきり威勢よく登場したかったのに、残念無念。

仕事（書きものや校正）に子育てに地域の活動に、と二〇代後半からずつとつ走ってきたのが、この春、四十二歳の声を聞いたとたん、ズッコケてしまった。れっきとした病名をつけられ奈落の底へ。目がつらいのでモロ稼ぎにひびくし、家事、共同購入、種々の会合への出席、すべてが重く感じられ、自称「元氣印」も形無しだった。

「病は氣から」というなら、氣が萎えたのは、現在の生活があまりにも不本意なものだから、反自然だからにきまつていく。まずは「住」、これがよくない。

私が住んでいるのは、東京郊外多摩ニュータウンの高層、

一階の3DK。入居して九年になるが、コンクリートジャングル、芝生、キチツと線引きされた区画、個性のない商店街の風景には今なおまったくなじめない。四角いコンクリートの箱の中で、日夜「自然を！」ともだえていく。

つぎに「食」、これも大変。団地のスーパーや商店に私の求めるものがないので、ひっこしてすぐに生協の班を作り、以前から参加していた無農薬野菜の共同購入のための組織を作るのに奮闘した。いいだしっぺの立場上、どんなに仕事が忙しいときでも、多くの雑用がおしよせ、ストレスもたまろうというもの。どうしていま私たちは、地域の商店であたりまえに安心な食べものを買うことができないのだろうと、これも日夜、憤っていること。

加うるに、結婚以来ずつと深夜に帰宅する夫の仕事のやり方への不満。「どうしてもっと人間らしい、ゆつたりした生活ができないの？」と問うのが、つねに夫婦ゲンカの原因。

あれやこれやと疲労がつもるなかで、自然にそった人間らしい生活がしたい！ という切なる願いはますます燃えあがる。だが、オイソレとは生活を変えることができない。私が自分を宙ぶらりんモンモン族とよぶゆえである。（We'84年6月号「地域に生きる」の緒方さんの行動力、ウラヤマシー

イ！)

さて、去年の秋のことである。多摩ニュータウンから一時間ほど歩いた緑ふかいところにあるキリスト教神学校の先生が、「放置されている学校の農場の一部を耕やしませんか」と声をかけて下さった。地域の子どもたちの夏の合宿を神学校を借りて行なった、そのご縁であった。私は即座に「やってみよう！」と勇みたった。モンモン族としては、今の生活の中でも土にふれたい、自分の手で作物を育ててみたい、子どもたちが自然となかよしになってほしいと願っていたから。おとな、子ども、お年より、障害をかかえた人もごちゃまぜになって畑仕事ができたらいいな、と考え、知りあいによびかけてみた。

「また用事がふえるのに」と娘たちに心配されながらも、約十五人ばかりの仲間が集まり、「やかまし村」という名のグループを発足させた。なん回かの話し合いをへて、はじめて土にクワを入れた日のことは、いまでも忘れられない。

年末の二十八日、私と仲間十人は、作業着もカッコよく、農場へ出かけた。「暮れのこの忙しいときに物好きねえ」とご近所のひやかしを背にうけて。まずカマでバッサバッサ。背丈ほどもある草を刈っていく。学校の耕耘機をかりて耕やすとみるみるうちに黒々とした土地に。なんという快感！そのあとをクワでていねいにたがやし、作っておいいた堆肥を

入れこむ。

手動の耕耘機を巧みにあやつるのは私のよき相棒Nさん。以前、植木やさんや山番をしていたが、今は小学校の用務員。三十六歳のすこぶるイイ男で映画狂。彼も奥さんに大掃除をするようにいわれていたのをふりきって出てきたから、帰ったらきつと文句をいわれるにちがいない。

またひとり、ひとときわハツラツと働いているヤングは中二のOくん。かれは私の昔からの友達だが、知恵おくれといわれて中学の特殊学級に入れられている。とても明るく人づきあいの好きな子なので、対等な人間関係の中では見ちがえるほど生き生きとし、指図もされずに見よう見まねでカマをふる。このほか、会社員、市会議員、保母さん、主婦、学生、障害児施設職員と「やかまし村」メンバーは多士済々だ。

こうして私の百姓仕事はじまったのだが、その矢先の発病だった。でも死ぬような病気じゃなし、ムリをしない形で、私は「やかまし村」に通いつづけている。

子どもむけには、一月の落葉かき、四月のピクニック、六月、芋の苗さし、八月には二泊の合宿、九月は栗ひろい、十月は芋ほりと行事を。

おとなたちはジャガイモ、大根、夏やさい、と次々作物にとりくんでいるが、メンバーの大半が仕事をもっているの

ささやかな収穫でも喜びはひとしおだ。私たち都会人が「自然を」希求するとき、こんなかわいらしい形しかないんだろうか、やはり中途半端だな、とは思うものの、私はまだ当分、仲間たちといっしょに歩いていくつもりだ。

「やかまし村」のある神学校周辺にもヒタヒタと開発の波がおしよせている昨今、私たちにどういう展開があるか、それ

私の畑作レポート

小平 陽一

今年、50坪の畑を借りました。モットーは、無農薬・安全でおいしい野菜を作ること。それにもう一つ、ありのままの自然を生活の一部にとり込むこと。今、28種類の作物が畑狭しと植えられています。

とりたての野菜は果物のようにおいしいといわれます。夏の太収穫期を前に、考えただけで今から興奮、ワクワク。

皆さんもやってみませんか。晴れた日に、ヒバリの鳴き声を聞きながら土をいじる楽しさは、もう最高！ 日頃のモヤモ

はいまの経験のつみ重ねと自然を恋うる気持の深さにかっ
ている。それと、「運」というのもあるかもしれないけど。
(多摩ニュータウンに住むWeの読者に)

もし畑仕事が好きなら「やかまし村」に参加して下さい

「やかまし村」村長 高橋泰子 多摩市落合 3-4-3 102

TEL 0423-76-4580

や、うつぶんがふつとびます。(最近、家族からは根っからの農民、ピッタシ小作人と呼ばれています。)

☆やったぜ収穫(六月上旬)

小カブ、小松菜、レタス

小カブは五月初旬に播種、一か月半で収穫。もう100個以上とれたかな？ 大成功でした。小松菜は五月中旬播き。これは虫に好かれて、虫くいだらけ。ちよつと失敗きみ。味もいまいで残念！ ほとんど堆肥にまわしてしまいました。まあこういうこともあるさ。秋播きはガンバルゾ!! レタスは苗から植え、虫もつかずに全部収穫、成功。

☆とれとれ料理メモ

「小カブ」とりたてをスープやみそ汁に入れるとおいしいけど、たくさん穫れるので、漬け物やサラダにします。

①カブの一夜漬け

カブはやや厚めに切り、茎も適当に切って混ぜる。キュウリ、キャベツ（ナタ切り）をさらに加えて塩をふる（野菜の持味をいかにするため、少なめにしよう）。軽く重しをし、一晩おいてできあがり。しょうがの薄切り、トウガラシを加えると風味が増します。

②カブサラダ

カブは薄く小口切りにし、塩もみする。レモンの薄切り半分（他の柑きつ類で代用してもよい）さらし玉ネギを加え、レタス、トマトなどをそえる。これにフレンチドレッシング（酢1にサラダオイル3を混ぜたもの。酢にはあらかじめ塩、コショウを加えて溶かしておく）をかけてできあがり。

発言



発言

私たちの望む共修家庭科の

内容を私たちでつくろう！

石川 由紀

昨年十二月に発表された「家庭科教育に関する検討会議の

☆畑作ワンポイント

種を播いたら、種の厚さの二、三倍の土をかけ、しっかりと足で踏みつけておくと発芽が良い。

☆畑作あれこれ

周りの畑は皆農薬畑。きれいな野菜が立派に育っています。おかげで、こっちには虫が集中、無念の思いもしています。でもいいんだ、虫くいでも、こっちのほうが安全。「鳥や虫にも多少わけてやる」ぐらいの鷹揚さがなくちゃだめ。だって人間も生態系のバランスの中に生きているんだから。

「自然との共存」これが私のテーマです。（高校教師）

報告」は、高校「家庭一般」の男女共修を盛り込まず、単に「男女同一課程」という方向を示すのみに止まりました。

We誌上等でご存じのとおり、一案は、家庭一般あるいは家庭科的科目から、二案は、他教科の科目と並べて男女共選択必修、というものでした。第二案については述べるまでもありませんが、第一案が採用されたとしても、生活全般を総合的・科学的にとらえた「家庭一般」の意義は失われる可能性が大と言えましよう。

男女で学ぶ家庭科の必修を要望し続けて来たWeの読者は、この事態にどう対処しようとしていらつしやるのでしょうか。

教育課程審議会がいよいよ発足しました。ここでは先の検討会議の報告を受けて、家庭科も審議されます。教課審の答申が報道される前に、大枠が決まってしまいう前に私たちが何かすべきことはないものでしょうか。家庭科の性別による機会不均等は正されたのも、世論の高まりがあつたからこそではないでしょうか。私は今、必修に向けてのコンセンサスを取り付けるためには、内容の検討と提示が必要であると思うのです。

私が家庭科の共修運動に加わってから七年目に入りますが、その間、共修運動の拡がりにとって何が一番障害と感じたかと申しますと、それは過去及び現在の家庭科の授業そのもののなのです。「私は家庭科の男女共修は賛成ですよ。ただし今のままだとごめんですよ」「家庭科なんて女の子にいないわ。浴衣もパジャマも着れもしないのに、時間ばかり取って、成績表の手前、親の負担ばかり」「キュウリの切り方や早さでエネルギー使ってバカみたい」。このような言葉が返ってくると、私は私のイメージする共修家庭科に熱弁を振るう気もなくなるのです。

家庭科の関係者や共修運動の支持者はこのような時、どう

いう対応をなさっていますか。

We 八・九月号の中で、小沢有作氏も「今の家庭科の内容でしたら、僕は自分でも逃げ腰になります。共修の主張は内容の変革と結んで行われるべきだと考えています」と述べられています。又、We誌上で紹介のあつた兵庫県高教組「これからの家庭科教育」及び日教組家庭科教育内容検討委員会「男女共学の家庭科の構想」第一次案にも賛同はするものの、家庭科の教師でもなく、ただひたすら、自らの意志決定により、生を全う出来る基礎、すなわち自律した生き方が出来るための思考や知恵の基礎となる教科であつて欲しいと願うばかりの受ける側としては、このような試案だけでは何となく不安で、小中高一貫して組立てた内容のものを共通のものとして、今後の運動の出発点にしたいと思うのです。

現在の全ての枠（学年・時間数等）にとらわれないで、「私たちの望む家庭科」の青写真を描いてみませんか。そして抽象的な「共修家庭科」の内容を具体的に形づくってみませんか。

Weの読者の方々と、ぜひ話し合ってみたいのです。

（「家庭科の男女共修をすすめる会」世話人）

子育ての中で

北谷 瑞恵

大きくなったら何になる？ と聞かれたり、家庭というものを意識し始めた頃からだろうか、「先生になってずっと働くんだけ」と決めていた。そして、いつの間にか独身主義などと頭から決めてかかって自分で道を狭め、ガムシヤラに歩いてきた。悔いはなかったが、立ち止まってそれまでの自分、これからの考えた時揺らぎはじめた。

結婚は人からみれば遅かったし、出産も私の体にしてはギリギリだったと思う。今、一歳になったばかりの子供をみて、もっと若い時の子だったらどう違っているのだろう、と思ったりする。子供は自ら親や環境を選択して出現したのではないのだから、高齢出産というハンディは負わせたくないかった。妊娠を確認した時はうれしかったけれど、進むにつれて不安で悩み、つらい思いをした。健康であるためにできる限りの努力をした。母乳分泌に有効といわれるものを食べ、飲んだ。そして、小さめではあるが活発で健康な子が誕生し、本

当にホッとした。母乳で通すことができたが、不思議なことに七ヶ月に入った途端に病院通いが始まった。下痢便に近い状態、離乳食も進まず体力もつかないでいた所へ、風邪、仮性コレラ（白痢）、突発性発疹。年末年始はなかった。あれもこれも高齢のためかと思ったが、そう思いつくる環境がそうしてしまふのだと、気を持ち直し、明るく考えることにした。

この一年でいろいろ考えさせられ、教えられた。妊娠・出産は全くプライベートなことだと思っていたのに、知人が「心配のあまり電話もかけられなかったけど、一ヶ月たったので」と連絡してくれた時、こんなに心にかけてくれたのかと深い思いで受けとめた。皆、子育ての先輩なので、小さなことでも納得いくまで教えてくれた。お医者からは安心して話る話があるが、母親学級での意見交換、保健婦さんへの相談で、ノイローゼ気味になっていた所を救われた（できれば夜間に相談できる所があればと思うが……）。また、引越して一年余りしかたない私は、近くの公園での何げない話でも、吸収しようと必死だったし、熱でも出ようものなら、ワラをもつかむ気持で知恵を借りた。そうして、地域の公共施設や人間関係の大切さを知った。

赤ん坊の時からあまりねない子で、おろせば泣くので、いつも抱くかおぶうかで、くっついて生活をした。心身共に至近距離にあつてよくないこともあつた。今では眠る前と朝起きた時、帰宅直後の20〜30分は、ゆっくり一緒に遊ぶことにしている。眠り足りないとか、少し具合が悪くなる前兆かなとわかる。子供には不思議な程こちらの気配、気持ち伝わる。気が立つてなかなかねなかつたり、なぜかイライラしているなど、ふつと自分にもどして考えてみると、私自身が疲れ、イライラしているといつた具合である。まず、保育者が心身共に健康で余裕がないとだめだ。子供と向かいあっている時、芯から浸っていないと感じとられてしまう。

職場復帰した直後、保育園に通い始めて一週間で高熱を出し、健康を害している私の手を借りた。やつとお腹の具合も収まっていた所へ扁桃炎、鼻づまり、中耳炎になった時は、抗生物質を飲み続け消耗していく子をみながら仕事が続けられるのかと悩んだ。世話をする人がいればゆっくり治せるが、働く私が「保育園」へと思えば、抗生物質の投与になる、中耳炎では二回切開した。かわいそうだったが、皆、精いっぱいだった。今やつと見通しある治療を続けているが、どんなに多くの人の励ましや援助をいただいたことか。

通院は、彼が毎朝五時半に順番を取り、私と母が医院へゆき、治療後、母が孫を抱いてタクシーで帰るというパターン

で二ヶ月半たった。このうちの一人が欠けてもやっていけない。二家族・三家族を巻き込んでやつとこさである。核家族が多くなった今、病気の時の保育、育児相談、労働条件など、もつともつと充実させなければ。育児休業はありがたかったが、無給で生活は楽でなく、社会体制が整わない中で、当事者の物心両面の負担は大きい。育児ノイローゼの新聞記事は他人ごととは思えなかつた。

今こうして考えてみると、孫への母の一寸な気持、激務の中、余儀なく別居体勢をとっている彼が、自分の生活をしなから早朝からかけ回ったこと、父親として子を思う力の大きさに支えられてきたと思う。

「手にしたものを皆、後ろにまわすね」こんなに学習意欲の旺盛なのが本来の子供の姿なのだろうな。など客観的な示唆をしてくれる彼。問題にぶつかった時、彼だつたらどうするだろうと思つたりする。じっくり、ゆっくり話をする時間も以前より少なくなつてしまつたが、新たに子育ての話題も加わり、豊かになると思う。当面は、モンテソーリ女史の唱えた子供の「敏感期」について、自分の子供の問題として、一緒に考えたいと思つている。この先、その都度子供に考えさせられ、教えられながら、母や保母さん、地域の関係の人々と手をつないでやっていきたい。体験を通した声を、生徒たちにぶつきたいと考えられるようになったこの頃である。

いま、家政学に

何が求められているか(2)

武藤 朋子

「女の時代」と家政学

「女だから家政学を」という声が、ごく自然に身近な所から聞こえてくる。「そうね、家庭に入ってから役に立つし、何といっても女だからね」というダメ押しが必ず返ってくる。意識のうえでは、男女平等を要求していても、無意識のうちに「男は外、女は内」という性別役割分業に慣らされてしまっている。「女だから」ではなくて「一度限りの人生だから」という理由で、自分の進むべき道というものは決めるべきはずなのに。

「平等・発展・平和」をメインテーマに、「雇用・健康・教育」をサブテーマとした、世界婦人会議は、西暦二〇〇〇年に向けての女性の新たな時代への展望を採択した。私は、そこに、今まで閉ざされてきた女性の可能性の開花への期待と人間生活全般への視点が盛り込まれていると感じた。女が男なみになるということではなく、女も男も人間らしく生きるためにどうしたらいいかという方向性である。

最近、男の視点で残されてきた歴史を女の視点から見直そうとい

〈人数()は%〉

'77(52)	'78(53)	'79(54)	'80(55)	'81(56)	'82(57)	'83(58)	'84(59)
244,617	256,817	275,760	285,129	294,078	293,344	281,998	285,443
4,093	4,338	4,891	5,190	5,677	5,856	5,691	5,734
1,274 (31.1)	1,420 (32.7)	1,586 (32.4)	1,723 (33.2)	1,554 (27.4)	1,736 (29.6)	1,598 (28.1)	1,502 (26.2)
325 (25.5)	378 (26.6)	561 (35.4)	523 (30.4)	395 (25.4)	382 (22.0)	419 (26.2)	314 (20.9)
200 (15.7)	212 (14.9)	185 (11.7)	293 (17.0)	272 (17.5)	401 (23.1)	327 (20.5)	308 (20.5)
219 (17.2)	302 (21.3)	336 (21.2)	414 (24.0)	387 (24.9)	399 (23.0)	381 (23.8)	383 (25.5)
744 (58.4)	892 (62.8)	1,082 (68.2)	1,230 (71.4)	1,054 (67.8)	1,182 (68.1)	1,127 (70.5)	1,005 (66.9)

(学校基本調査報告より作成)

小学校教員は必ずしも家庭科教育従事とはいえないが
家庭科教育の可能性は大であるのであえて加えた。

う動きが盛んである。いろいろなところで「女の視点」からの試みがすすんでいる。「女の学問」と称され続けてきた家政学が、この「女の時代」に果たす役割は大きいはずである。たしかに、家政学は、日本の場合、その出発は家事・裁縫の技術中心であった。一九四七年、大難産のすえ家政学部設置が認められ、一九四八年に初めて大学に家政学が登場した。良妻賢母・主婦養成学部ということでの女の学問として、現在に至っていると見るのが通説であろう。しかし、一面で、女性に学ぶ道を開き、地道に、最も身近な生活に関する問題を取り上げ続けてきたことも忘れてはならないだろう。だからこそ、家政学を学ぶ人間は、日々営まれている生活を対象とし、人間が人間らしく生きていくための根本的な問題を扱っているという基本的な命題を忘れてはならないのではないだろうか。そして、家政学を学んだ人間が、男女の民主的な家庭や社会を築くことにもっともっと目覚めているなら、まわりに与える影響はどんなにか大きいことだろう。いま、まさに、女性差別撤廃条約の精神にのっとった、生きた家政学が求められているのではないだろうか。

おわりに

家政学とは、ということ抜きにしては論じられないにもかかわらず、私見を展開してきたが、家政学を考えるきっかけにでもなれたら幸いである。

女性差別撤廃条約を読み返すたびに、日本の憲法や教育基本法のすばらしさを痛感する。にもかかわらず、日本の現実には、なぜそれほどまでに、男女の性別役割分業意識が浸透しているのであらうか。誰もが生きやすい社会をめざして、地道な努力を重ねていくたいものである。

(日本女子大学)

家政学部卒業者の教員の割合

年 度	1974(昭49)	'75(50)	'76(51)
大学卒業生全体	230,687	232,683	230,463
家 政	3,769	3,787	3,686
教 員	1,033 (27.4)	1,207 (31.9)	1,320 (35.8)
	小 290 (28.1)	371 (30.7)	332 (25.2)
	中 138 (13.4)	170 (14.1)	177 (13.4)
	高 270 (26.1)	228 (18.9)	322 (24.4)
	計 698 (67.6)	769 (63.7)	831 (63.0)



◆バグダッドからこんにちわ。うなぎのかば焼きと枝豆とビールのおいしい季節……ああ食べたい。

Weは毎月きちんと届いています。ここでは実際の活動はできないから、せめてWeを読んで、自分なりの感想を言葉や文章にしておかなければいけないと思います。また、Weと一緒に読み合うような仲間を見つけたのですが、日本にいてもそういう共通の意識を持った友人というのは、正直なところ、なかなか見つからないものでした。他愛のないおしゃべりはしても、少し固い話になると身構えてしまつて……。

まして、日本の現状から、遠く隔たり、会社とのコミュニケーションが強まらざるを得ないこの地において、テニスやプールが唯一の娯楽と

いうこの国において、男女の差別の問題を話し合ったり、管理社会の矛盾を考えたりする仲間を集うということは、かなり困難なことであり、そういう意識を持ち続けることすら、なかなか難しいように思われます。

来たばかりではつきりしているわけではありませんが、戦争中のこの国では、あほらしくいらい外国人との接触や情報の洩れを恐れているようで、この国のことを色調べたりするのは非常にまずくそういうものに対してのチェックの眼で、すぐいらしいのです。

そう考えるとクラーイ国だなあと思つてしましますが、私ごときが大事なこととするわけではなしせつかく来た国なのだから、この国のことや、生活している人のなまの考えなどというものも知りた

いとと思うのです。
暑さでグデーとなりそうな時はWeを読んで、知的刺激を受け、できれば仲間を増やしていきたい

のです。(バグダッド・水野純子)
◆We夏増刊号を、二日間でやっと読みました。共働き、私もその渦中にあるのに、なんだか過去のことであったような気がします。七年間の核家族時代に、大変な思いをすべてしてしまったからかもしれません。

まだ育児休業が確立されていなかった時の長男の出産。産休明けから預かって下さる方を捜したりわからない育児に一喜一憂して、今考えてもゾツとするようなメチャクチャなことをして、今でも長男にそのころのことを話しますが子育てではやはり「経験」だと、四児をかかえた今になって思います。

長女の出産の時から育児休暇を一年間とり、母乳で思う存分子どもに接し、経済的な苦しさにもさる貴重な時間が持てたのは、産んだ子にとっても、他の子にも、そして夫にも幸せだったと思いま

す。そしてその一年間は、私の精神的な充電をする時でもあり、四人目の子を産んで休んでいた時にWeとの出会いもあったわけです。

そのダイゴミ(?)が忘れられないせいでもないのですが、十月に、五人目を出産の予定です。最近では三人の子持ちは多くなつたそうですが、子どもは男一人、女三人なので、もう一人男子を増やしたいという欲もありますが、何より、子どもは共育ちというのでしようか。親が教えたり(しているつもり)、しつてたり(しているつもり)する以上のことを兄妹の中で身につけるのだなあ、と見ているので、非常に楽しいのです。

今も、小四の長男、小二の長女は、とりわけ赤ん坊が生まれるのを楽しみにしていて、おなかをさわりに来ては「妹がいい」「弟がいい」とやり合っています。二人目、三人目の時が、共働きの大変な時期でした。病氣ばかりしている長男と赤ん坊の世話とで、どうしてよいかわからなくなり、校長



に退職の意志を表した時、その校長が「今を乗り切れない。大変なのは、子どもが小さい時だけだ。復帰したくても思うようにできないのだから。学校としてできるだけのことをするから、がんばりなさい。私の家内も苦勞してきたけれど、やめなくてよかったと言っている」と励まして下さいました。その言葉を信じてやめずに来ましたが、今ではあの時、どうしてやめたかったのかと思うほどです。

ここまで書いてきて「この世に無駄な人間は一人もない。この世に無駄なことは一つもない」という、どなたかの言葉がふと浮かんできました。ありがたい毎日です。

(敦賀・高嶋みどり)

◆ずっと念じていましたが、また今度もフォーラムに参加できました。来年こそ……。

現在、いろいろなことをとりとめもなく考えて、子育てで動けない状態の中で、やはり疑問や問題となる事柄は、決して忘れまい。そして自分のその思いを、いつか表現し、語れたらと思っています。

Weの中で、特に「結婚の風景」に心を強く打たれ、また励まされしました。頭の中だけで考えたことではなく、自分の体験・実践は強く心を打ちます。そういうものを、多くのせてほしいと思います。

私は、まだ動き出せず、うじうじと、それでも前向きに何か考え続けようと思いますが、家庭科の教師でもなく、職業も持っていない

ということ、いま一步自分がふみ出せずにいます。これから何かやろうとしている人にも読者へのまなざしを向けてほしいと思います。

それから「新しい家庭科」への努力は、すなわち今おかれている女性のあり方そのものを前進させるものであり、それをふまえないでは、「家庭科」教育にはならないと、ばくぜんと思うのですが……。

家庭科と現在の女性、また時代の有様とどう結びつなげていくのか、いまひとつ、私の中ではつきりしません。私の勉強不足なのですが……。

(三島・白石登代子)

◆増刊お届けいたしてから、一気に読み上げました。夏期休暇に入る前に、片付けるものが山積みしていて、少々ハードワークの中ストレスレベルの限界に達しそうな状態でしたので、増刊号を読んで救われたと思います。また元氣が出てきました。

(熊本・宮原由美子)

◆「女性による民教審」とりあえず、地ベタのオバサンの甲斐性としては応援歌かなと思ひ、傍聴に出かけました。印象としては、けっこう大変じゃないかなアというところ。ねがわくは潤いのあるWeスピリットを下敷きに！母親の、という見地からは、私たちは国家の人的資源を生んだわけでも、育てているわけでもない、という線の提言を……。いま、民教審のメンバーの中においでになるかどうかわかりませんが、哲学畑の方の力を借りてまとめていただきたい。

臨教審のメンバーとの対話集会は大事にしたいですね。実際は相当にバカバカしい思いを背負いながら、になるでしょうが、そこは当世風にな。パフォーマンスと割り切つて。それには、平場からのナマの材料を十分吟味して仕込まなければ強味を発揮できないと思いますが、学生とのティーチ・インなど、周到にやっつけて下さいますよう。

(小金井・若竹キミイ)

男の台所

DAI

DOKO

☆イワシ…良質の蛋白質とカルシウムをタップリ含み、その上、イワシの脂肪酸はコレステロールを抑えてくれる。安い、旨い、栄養豊富な三拍子そろった健康食!

その7 イワシの唐揚げモヤシ添え

高瀬 育



国勢調査に異議あり

五年に一回の国勢調査がこの十月一日に行われました。今年は簡易調査の年だったのですが、「勤務先の名称」「従業上の地位」「国籍」「世帯員に関する諸調査」「居宅の畳数」など十七項目におよぶものでした。

「あまたか」と、調査されることにあきらめている人が圧倒的なのですが、国勢調査の歴史をみると、大衆を管理支配する大きな役割を果たしてきたことがよくわかります。

日本で一番はじめに実施されたのは一九二〇年で、大正デモクラシーの最盛期、初のメーデー、普選運動の高まりの中です。政府は当然、民衆の実態を把握する必要に迫られていました。宣伝歌や都々逸などもつくって徹底をはかったそうです。そして二回目は一九四〇年。一等入選の標語にもあるように「ものの調べは興亜のしるべ」として戦争動員計画にあますところなく使われます。

戦後は戦災復興のデータに、一九五五年からは労働力対策に、現在は地域管理

や地域開発に利用されています。つまり調査にすんで協力することによって、環境破壊に手を貸すという、何とも皮肉な結果になっているのです。調査内容は他の統計と結合しメッシュ化され、新幹線の建設や道路建設、スーパーやデパートの進出計画にも利用されます。調査結果の利用割合をみると、民間企業が七割をしめ、公選法施行令などにうたわれている「議員定数の配分」など、実際に使うべきところには全く使われていません。

五年ごとの国勢調査には多額の費用が計上され、各地方自治体も、独自財源を上づみして調査のために職員を動員します。実際の調査票収集には、地域のボスが指名され、毎回団地などでは調査票収集にトラブルが起これたりしています。前回の一九八〇年の調査では、調査票を密封する封筒の要求運動が全国化し、今回は用紙そのものを折り込んで密封化できるようになりました。しかしめだたないように書かれているのでほとんどの人は気がつかないようになっています。そしてとりわけ東京における今回の調査の特徴として、「簡易宿泊所」「調査の実施に不安が見込まれ

宮本なおみ

る自治会」「再生資源卸売業に従事している者及び住居不定者等が居住している地域」を事前調査対象にあげています。

こうした差別的調査を、管理と開発の目的に上のせし、すさまじい情報化社会で利用されつくして行くことに背すじの寒くなる思いをいだくのは私ばかりではないと思います。

アメリカでは調査項目を減らす運動がおこりました。西ドイツでは運動の高まりの中で争った裁判が、連邦憲法裁判所で支持され、一定期間の凍結を勝ちとったということです。西ドイツでの運動の高まりは、反核のテーマにもみうけられるのですが、ポスターやたれ幕のスローガンに生活感覚があふれているということです。

日本における人権感覚からすると、即西ドイツのようというわけにはいかないけれど今回の調査に現われた問題点をひろいあげ、五年後をみすえて反管理の陣型と人権意識を結び合わせて行かなければならないと思っています。

早稲の稲刈が始まった。夫の両親の時代の稲刈はすべて手刈りだった。それが今はコンバイン。稲を刈ることと脱穀とを同時に一つの機械がやってしまう。

空気が澄み、どこまでも高い空の下、コンバインのエンジンの音が響く。私は機械が回りやすいように、田んぼの四隅を手刈りする。ザクツ、ザクツ、ザクツ。刈っていく小気味よい音。この音はたぶん、昔も今も、そう変わっていないのだろうと思う。左手に、刈り取った稲の重さを感じる。

古田ではたまに深いところがあつて、足がズズズーともぐつてしまうところがある。

昔は足のつけ根までもぐる田もあり、まるで泥沼を這いずり回るようだったという。今は機械化で、田は硬い方がよい。

作業の合い間をみて、畦で一服する。義母が長女二女も連れて、お茶を運んでくれる。おやつにはふかし芋やぶどう、枝豆も顔をそろえる。今年は日照りで、梨や栗はほとんど

実をつけなかったが、みな家の畑や庭でほんの少しだが穫れたものである。まさに収穫の秋、味覚の秋。また昨年は、ちょうど東京から来ていた友人が、「初めての体験なのでぜひに」とトドロキワセの稲刈を手伝ってくれた。活気があつて、楽しい稲刈だった。

あれから一年経った。農業をやっていると月日の経つのが本当に早い。田植えも稲刈も苗起こしも一年に一度。ちよつと失敗したからもう一度という訳にはいかない。農民の一生で自分の満足のいく稲作りが何回できるだろう。私は今年で六回目だが、まだまだごつくことばかりだ。

結局八月は、この辺一帯一滴の雨も降らなかった。畑は日照りでカラカラ。家から大きなタンクで水を運び、水をやりながらブロッコリーの苗を植えた数日間。植えている私の長靴が日に焼けて、足の甲の熱かったこと。翌日から夫は一日に数度、畑に水やりに通ったことだった。自家用の茄子・ピーマン・キ

ユウリ・トマト等夏野菜は水不足で枯れ上がってしまった。湿気を好む里芋などに毎日水やりをしている人も何人もいた。

こんな年も珍しいという。予報に反して豪雪だった冬に、炎暑の夏。

しかし田んぼでは、この暑さのおかげで早くから色づいた。コシヒカリは、黄金色というか透明なうすいオレンジ色を帯び、まるで小さな宝石のように、重たそうに穂を垂れている。稲刈前の田んぼは、一年で一番光り輝いている時かも知れない。

今、スイカ畑のあとにはブロッコリが次第に大きく育ち、九月に入つてすぐに雨の降った翌日から播いた大根が、それでももう5cmほどに伸びている。

春から夏にかけての畑の風景は、一変した。これでもうあと二週間余もして、稲刈がすっかり終わると、田や畑の風景すべて秋一色になる。

それにしても当たり前だが、種を播けば芽が出て、茎を伸ばし根を伸ばし、花が咲き実をつける。その種のもつ生命力と、土の包容力には、いつも驚嘆せずにはいられない。

土

収穫の秋、来たる

五十嵐 愛子

おとなの旅・好奇心の旅

—— 人生のたのしみかた

長谷川公一

どういう書物が好きかときかれたら、何と答えよう。わたしの趣味はいささか古典的だ。第一に明晰達意な文体で、論旨は明快。いたずらに感傷的だったり、大仰ではない。何よりも、伶俐な観察力と人間性についての省察力、批判精神。着想やまなごしの新鮮さと、表現の細部にいたるまでのこころくばり。そういう書物がわたしは好きだ。

たとえば湯あがりや休日の午後などに、折にふれては頁を繰って、気のむくままにところどころをたのしむというように本に、高坂知英の『ひとり旅の楽しみ』『ひとり旅の知恵』『ひとり旅の手帖』がある（いずれも中公新書、順に一九七六年、七八年、八三年、四四〇円／四八〇円）。名所・旧跡の案内書ではない。ひとのいかにところに出かける、押し寄せの団体旅行とは正反対の旅である。わたしにとっては、さきにあげた好ましい基準をすっかりみたしてくれる。出色の旅のエッセーである。著者が撮りためた、挿入の写

真も素晴らしい。

著者は編集者のかたわら、四〇年にわたって、たとえば愛好するロマネスクの建築や同時代の平安仏をもとめて、ヨーロッパや日本の各地をひとり旅してきたひとである。最初に読んだとき、わたしはああこんなおとなの人生があったのか、こんな知性的な人生の楽しみかたがあったのかと興奮した。職業生活のあいまいまいに、こころのおもむくままに旅をする。家庭生活のしがらみから離れたところに成立するもうひとつの生きかたがここにはある。旅の方法論を意図したというこの本は、人生の方法論としても読ませてくれる。

食の本でも、旅の本でも、まあ何であれ、著者が、自分の趣味のよさに得意気であると厭味なものである。池波正太郎、開高健、丸谷才一など、当代のエッセーの名手といわれる小説家のエッセーもこのきらいなしとしない。売文を業とするひとびとの芝居気たつぷりの厭味さ、感動を売りものにするひとびと

の道化師的滑稽さ、そういうものからのがれえているところにも、この本の魅力はある。

旅をたのしむとは、なによりもおのれの好奇心をたのしませることである。したがって「旅に出てたのしくあるためには、日常の人生そのものにたのしみを見るという習性をもつことが必須の条件である」（『ひとり旅の楽しみ』一一七頁）。第二に、かの地とこの地を比較し両者を相対化して、人間と文化のあり方について思いをめぐらすことである。文明を批評することであるといってもいい。第三に現場に立ち会うことである。ある社会を膚で、五感で感得することである。第四にそれぞれの社会、それぞれの文化の個性を愛することである。本書がのべる旅の魅力を整理すればこのようになろうか。

著者にとって旅の魅力を知ったことは生き残ったことの意味でもある。「私の年代では友人の中にも戦死させられた者が多い……私は自分が戦死しなかったことの本当の意味を、今頃になってやっと理解し始めた。このことで若き友が奪われたものの巨きさを、私は今さらながらに思うのである」一九一七年（大正六年）生まれの筆者のあとがきの言葉である（『ひとり旅の知恵』二二六頁）。

テレビからの情報

鈴木みどり

テレビの報道機能が再び注目され、それに反比例するように、人びとの活字離れが進んでいる。若者だけでなく大人も、特に女性たちの多くが、世の中の動きを知るのに、新聞や本ではなく、テレビに依存するようになってきた。テレビは手帳で、つけっ放しにしておけば、同時に何か別のことだつてできる。その上、日航機墜落のような大きな事故が突如として起こる世の中だから、テレビの速報性に入びとの期待が集まってしまふ。

だが、報道メディアの優劣は速報性だけで決まるのではない。こんな当たり前のことを忘れ、テレビからの情報だけに満足して生きるようになる、人びとの世の中に対する理解や関心の持ち方も、必然的に変わってくる。この変化は一般に認識されている以上に重要で、危険だ。テレビが日航機事故に関してどんな情報を流し続け、人びとの関心をどう方向づけていったかを、振り返ってみよう。まず、事故発生の第一報。それに続く乗客

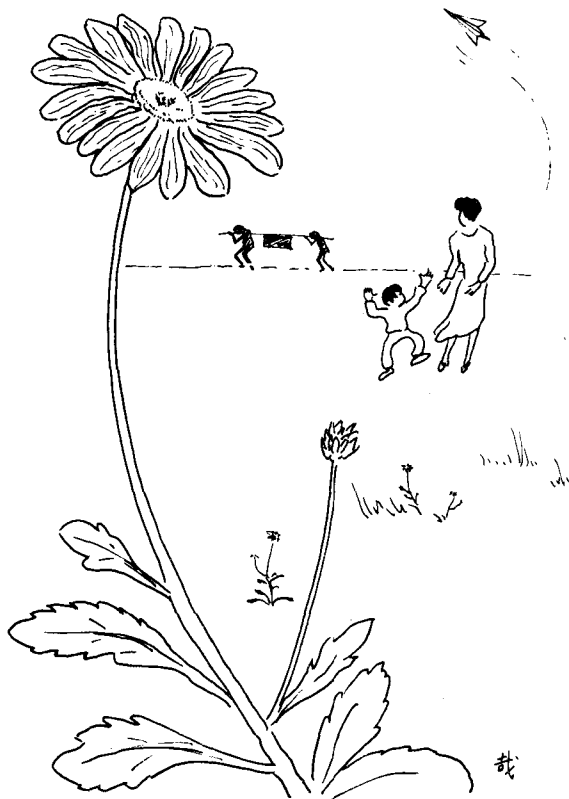
名簿の発表、墜落現場の発見、生存者救出。この一連の動きを伝えたテレビには、速報性といひ、映像メディアならではの臨場感といひ、確かに、視聴者を画面に釘付けにするジャーナリズム機能を見て取ることができた。ところが、それ以降、テレビは各局競つてワイドショーの取材合戦を展開し、遺族や生存者を追い回して得た情報を、派手な見出しをつけて、連日、お茶の間の「話題」として提供するようになっていった。この情報の変質に、ワイドショーの視聴者の何人が、果たして、気づいていただろうか。

ワイドショーは、もともと、報道とは無縁の番組である。制作も報道局によるのではなく、一般の娯楽番組担当者によって行われている。その内容は、私たちが昨年六月、平日朝の全テレビ局のワイドショー（計10番組）を対象に行つた分析調査によると、主として実用・実益、芸能、殺人事件という三種類の情報で構成されている。

実用・実益情報というのはTVショッピング・プレゼント、料理・食一般、家庭運営、美容・健康、趣味・ペット等のトピックスのこと、その多くは番組の一部なのかCMなのかの区別も判然としない代物である。芸能情報は歌手やタレントの結婚、離婚、各種のスキヤンダル。コンサート案内、新作の映画やレコードの売り込み情報も多い。さらに殺人事件情報。過去の事件簿から選り取り見取りで殺人事件を取り出し、それらを脚色して（実際、ドラマ仕立てで再現してみせる）、痴情がらみの女の事件に仕立てあげるのが、ワイドショーの一般的手口なのだ。

結局、ワイドショーの情報はすべて娯楽、それも、商業主義と覗き趣味の強い「見世物」（ショー）として企画され、提供されているといえる。テレビの手にかかれば、日航機墜落という悲惨な社会的出来事までが、この種の情報の一つに作り変えられてしまう怖さ。もつと恐ろしいことに、情報を作り変えることで、テレビは人びとの関心を社会的・政治的文脈から切り離し、たとえば奇跡の生存者・慶子ちゃんの帰郷というような、断片的な情報に一喜一憂するその日暮らしの人間を、多数、作り出している。

* おとなって… * * * 葬式って だれのもの? * * * 文・松本のり子 絵・松本 哉



息子のクラスメートの父親が急死した。

灰色のブラウスに黒のズボン。

私が手持の服から選んだ私の気持ちなのに。

「黒のスカートはないけど、黒の

ブラウスならあるよ。貸したげようか」

「そうよ、貸してもらいなさいよ」

どうして?

「いいよこれで。おかしい? これじゃだめ?」

子どもたちは灰色やGパンでよくて、おと

なはだめだっていうわけ? どうして? おとなたちより、子どもたちの方がずっと悲しげな顔をしているじゃない。正直なとまどいの顔をしているじゃない。

養護学校の中三の男の子がいて、彼は父親の死をわかっていないようだと言った。五年のSちゃんは白いワンピースでキラリと座っている。母親は夫の死と入れかわりに男の子を生んで、通夜の席にはいない。「生まれかわり」とあちこちでささやかれている。涙をさそうはずの光景。

なのに私は泣けない。その家族との面識がない。何にも知らない。これからどうつきあっているのかわからない。クラス委員として出席するみじめさ、「形ばかり」のみじめさを思っている。

お焼香、これも四度目になるけど、わからない。三回やるのか、パラパラと炭に落とすのがどういう意味があるのかわからなくて、ギョチない。

飾られた写真の主をしっかりと見てから、「ああ、この人が亡くなったのか」と、初めて心から手を合わせることができた。

大正七年四月、横芝町立尋常高等小学校入学、といつても前年大嵐で倒れた学校は改築中。町の子は二軒余り先の藪の乾燥場が仮教室だった。近所の四年の清ちゃんと一緒、一年生の私には大人のように頼もしく見えた。受持は山羊髯のじいさん先生で竹の笥を持って怖かった。

一学期に三度も立たされた。一度は学校の帰りに喧嘩の加勢をして、相手を田圃に突き落とした。翌日助人の私だけが朝から立たされた。自分は正義の味方をしたのだからちつとも悪かあないと思ひ、先生のいない休み時間になると級友に小石を拾ってこさせ、おはじきをやつて虚勢を張つた。そんな態度だから、他の者は一、二時間で席に帰されるのに、私は終わるまで立たされつ放し。

二学期から本校が出来て新校舎に移った。

町から海寄りに一軒位離れていて、子どもの足では遠いと思つた。まして冬の雪の朝、一年生は皆親がついて登校したが、私は竹の棒で足駄の雪を落とし落とし行く。いくら気の強い私でも時には半べソになりながら登校した。小さい時から依頼心をもつなという養父の方針なのだ。だから帰途も苦勞して帰ると偉い偉いと褒められ、それに満足して、送り

迎えしてもらう子なんか軽蔑したもののだが、世間の人は表面だけ見て、かわいそうにもらいつ子だからというような眼を浴びせた。

母屋の生活で、茶作り・味噌作り・田植・芋掘り・秋の取入れを覚えた。皆で摘んだ茶の葉を蒸籠で蒸し、臼の底へ新しい灰を敷き、その上で揉む。それを絞つて軒下の焙炉で揉

思えば思われる物語

生活即学習



丸山光子

みながら乾かす。焙炉は壁土で作つた畳一帖位の大きさに尻つぼみ、高さは腰位。中に藁灰と炭火。火の上に掛ける中子は和紙を張り重ねたもの、叩くと太鼓のようにパンパンと響く。

お茶の木は屋敷の裏道から中庭の境まで、垣根のように植えられ、初秋に白いかわいい花が咲き、円い実がなつた。往診の駕籠の中

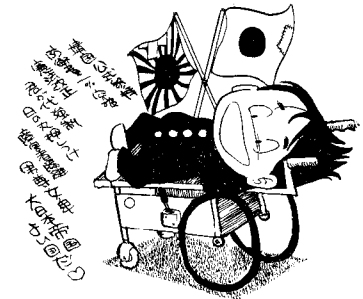
でまで茶を点てて飲んだという、賢二謙徳先生の挽いた茶臼も駕籠も、入学前まであった。

味噌は新しい大豆のとれた秋、庭に土で大きなへつついを築いて、経三尺もある大釜で豆を煮る。その味噌豆を椀にもらつて食べるのも楽しみの一つ。煮上がった豆は臼で潰して糲と塩を混ぜ樽に入れてねかす。味噌豆を葉苞に入れ、釜場になかせて納豆も作つた。

裏の桃畠の桃は手入れをしなないので虫食いの桃。桶の水に漬けておくと虫が這い出す。祖母は「桃は暗がりで食え」「桃の虫は菓」と言つたが、虫食いの桃を食わせる術だったのかも知れない。無花果・びわ・蜜柑・柿など食べ放題、となるとあまりありがたくない。高貴菓に使つた？という牡丹・芍薬は畠だった。県道を荷馬車が通ると祖父に馬糞拾いを手伝わされる。牡丹・芍薬がちよつと憎らしかつた。

祖父は裏の竹藪の竹の枝を集めて、竹の柄に針金で纏めつけ、高箒（竹箒）を作る。高箒は腰をかがめて使う、幅広く掃けて能率的だし、箒もすりこぎにならぬとは、祖父実演つきの教えだ。蠅叩きも棕櫚の葉の先を切つて、風糸で編んで作つた。蠅叩き裏も表もなかりけり」とは、その時の私の実感である。

純粹培養



文・カット ウツのみや

僕たちが同居して一年過ぎた。同世代の友達連中からは次々と出産の知らせが舞い込んで来る。

「みんなよオ産むなあ、子供作るんは簡単やけど、育てるのは大変なんやろなあ」

「そうねえ」

などと話しながら僕たちは出産祝いを買いに地下鉄に乗った。

六年間付き合ってきた、幸か不幸か一度も避妊に失敗した事はないが、二人共、産む覚悟だけはいつもしていた。

別に子育てに興味がないわけではなく、むしろ今の社会で「健全者」として純粹培養される事なく、われわれ「障害者側」の論理も

教え込み、その中で子供が「どちらが正しい」かを選択できればいいのである。

「元気な子を産むために」

母子手帳、母親学級、育児書のスローガン、誰だって元気な子でいて欲しいと願っているに決まっている。問題なのは「元気な子」の具体的実像が「ちえおくれでなく手足に異常なく目も耳も普通」の状態を、すなわち「障害児でない子」を指すからである。

そしてそれは南アフリカ共和国の人種差別隔離政策にある「白人と黒人は婚姻してはならない」という暴力に似ている。

何故なら、白人にとって、黒人は、差別される市民的権利を奪われる不幸な人種だからだ。

人工受精、遺伝子操作、果ては代理母まで現れてしまった現代。

障害児たちはこれからさらに存在を否定され続け、医学の進歩は規格外人間をいよいよ少なくして行くのだろうか。

「あなた、障害者じゃなかったら右翼になってるんじゃない」

彼女の言葉にドキリとしながら、こいつは当たってるかも知れないと僕は思った。

子供の頃は何しろ「いかに障害を克服してエライ人になるか」考えてばかりいたし、仲間と共に闘うなんて思ってもいなかった。

教科書問題にも見られるように、殴る側と殴られた側の主観は違う。

神さまはきつと僕が「殴る側」にならないように障害児にされたのだろう。

秋風が吹き、今年も就学時検診の季節が近づいて来た。

障害児は又、規格外の部品のように学校からつまみ出され、普通児たちは「健全者の純粹培養」をされてこの社会を構成して行く。

『かにた便』

かにた後援会

何年前だろうか、売春婦更生施設かにた婦人の村を訪ねた。寮生と昼食を共にした後、そのうちの二人が村を案内して下さった。夕方、帰り際、施設長の深津文雄氏にお礼を述べ玄關を出ると、さき程の彼女たち。そつとわれもこの花をさし出した。しつかり握りしめた私。彼女らとどこかで接していたくて、『かにた便』(年四回)を読み始めた。施設長のおつれあい春子さんは、そこで「指導記録」を書かれている。心暖まる頁だ。(後援会員一口④一万円、⑤五千元、〒204千葉県館山市大賀504 かにた後援会)

佐藤 正著

『農の文化史—古老に学ぶ』

たいまつ社 価六八〇円

「土の章」「堰の章」「藁の章」「草の章」「灰の章」「季節の手しごと」から成る。秋田県に住む佐藤さんは中学校の先生で、村の古老

星 寛治著

『農からの発想—育てるということの意味』

ダイヤモンド社 価一二〇〇円

山形県高畠町に住み農業に従事し、有機農業運動を推進している星さん。

「人間性を取り戻す拠点を自然への回帰のなかに、その生命の躍動と光のなかに求めようとするならば、農村という地域空間と農業という生命生産のいとなみのなかに、新たな現代的視点での光がさしこむのではないか」

田仲のよ著・加藤雅毅編

『海女たちの四季—白間津・房総半島』

海浜のむらから』

新宿書房 価一八〇〇円

「海に生きる人自身の手になる記録は少な

い」そんな加藤さんの思いが、海女・田仲さんとの二人三脚によって実現した本。

危険の多い仕事だけど、四十年間一度も海女をやめようと思ったことのない田仲さん。こよなく海を愛し、自然を、人間をいとおしむ。海女の生活、文化が広がってくる。淡淡とした語りが胸を打つ。

水俣病関係映画リスト(16ミリ)

「水俣—患者さんとその世界」

「実録公調委」

「水俣一揆—一生を問う人々」

「公害原論」

「不知火海」

「医学としての水俣病—3部作」資料・証言編、病理・病像編、臨床・疫学編

「水俣病—その20年」

「水俣の図・物語」

「わが街わが青春—石川さゆり水俣熱唱」

「水俣の甘夏」

(以上青林舎作品)

「苦海浄土」(RKB毎日放送制作)

「無辜なる海」(フィルム工房制作)

(青林舎)〒105東京都港区西新橋2-8-13

海で働く女―能登半島の輪島から船で一時間五〇分、舢倉島の海女を訪ねた。

舢倉島行きの船は、朝八時半の一本。その日、船内は釣り客など十人位でガラ空き。輪島は晴、海はおだやか、良い船旅日和、と、同行していただいた七尾の木下雅子さんと話していた。

しかし、港を出るやすごいゆれ。長いすの座席にしがみつくように横になった。ビニール袋を口にあって、胃のものを全部吐き出した。吐き気は続く。油汗が扇風機にふかれて寒気を感じる。ただただ「舢倉島は遠い」と思い続けていた。舢倉島に着くと外は強い雨、風。舢倉島では、船が運んできた荷物を大切におおひながら運び出している。人間はびしょぬれ。

約百世帯が、桧橋近くの区長さんの家を中心に身を寄せて並んでいる。島を端から端まで歩いても30分位。車はなく、ほとんど自転車。複式学級の分校、保育所、診

療所、派出所、民宿二軒、雑貨・食料品店三軒、喫茶店はない。

島の人たちは冬場、漁ができないため、殆どが島を引きあげ、輪島で生活。家財道具から水道料金まですべて二軒分の出費である。

海女の佐渡はるよさん(49)、岩多花子さん(55)に話を聞いた。海女には、命綱海女とたらい海女がある。命綱海女は、男女、主に夫婦が組みになって、男が船で命綱を引っぱる。たらい海女は、海女二人が組みになって、一方が潜っている時、片方はたらいにつかまって水面にいます。命綱海女の方が深い所を潜る。約17尋(1尋1.5m位)の所を。お二人ともベテランの命綱海女で、それぞれのおつれあいが命綱を引く。

ものごころついたときから海にはいつてもり、遊びが自然と、中学を卒業する時ぐらいから海女になっていた。最初は浅い所から。海藻、さざえ、あわび……

あわび解禁の七月一日から九月いっぱい潜る。四、五月はわかめとり。冬が終わり、四月にはじめて海にはいる時「わたしらの出番があるというのはうれしい」。男たちが稼ぐ漁が主で、海女の仕事はあくまでも「家計を支えていくための補助」。だが「稼ぐことは楽し

い」といい、あわびがとれた瞬間が一番うれしいと話す。

海女の仕事は、朝九時、小舟に二人あるいは四人乗って出かける。十二時から一時間位休み、二時半に終わる。

二十二、三年前頃から着用するようになった潜水服(ウェットスーツ)は、潜る時間を長くし、より深い所まで潜れるようにした。潜る人も増えた。それまでは「つめたかった」と。しかし、あわびが少なくなり、潜水病が増えてきた。その日、佐渡さんは頭痛止めに、はり薬をしていたが「体が悪い時、海にはいつているほうが気分がいい」という。潜るのは「自然の息」で一分位。

こわい経験は? 「自分の体調にあわせてはいつているから。こわいことはないよ。忘れたよ」と。だが、自分の健康維持には常に注意をはらっていることがうかがえる。健康診断には必ず行く。

海で亡くなった人には、比較的冷ややかな眼を感じる。オカにあっても死ぬ時は死ぬ。自然に逆らわず、自分の体にあつたところを確認しながら潜っていけば大丈夫だと。そのころあいはかりきれなかった人が不幸に……子育てでは? 「自分は働くから」、輪島に住む

おばあちゃんに安心して任せっきりという。

しかし、みてくれる人がいない人は大変だ。産前産後各一カ月位は潜らないけれど、その後は子供を舟につれていく。

お二人とも子供の将来に関しては、各々の自由選択に任せている。佐渡さんの長男は輪島でまき絵を、次男は中学を卒業して鮎倉島で漁を、長女は輪島で高校に通う。

しかし、自分の娘には「あんなあせえところ」に潜れねえかな、食べるさざえも拾えねえかな、情けねえ娘だなー」と思うと。お二人とも、高校生位の年齢で、いっちょ前に潜っていたのだ。

海は変わりましたか？「あわびがいなくなった、さざえがいなくなった、だけだ」

港に近い民宿に泊まったが、客は私たちだけ。私たちの食事の仕度してくれた木村世紀子さん(27)も海女。たらい海女だ。潜るし遊びがなかったから自然に海女に。つれあいはイカ釣りで夕方でかける。

翌朝、さわやかに晴れあがった。
8時10分ごろ「今日の磯入れは中止になりました。ご了承下さい」と島に有線放送が流れた。海女の仕事は休み。その後、漁の中止

も有線放送で流れた。島の女も男も今日は休み。保育園だけは予定通りあったけれど。潮が速いのか、風が強いのか、私には海が全然わからない。

家はあけっぱなしだから、中がよく見える。網を繕っている年老いた人、区長さんの家に集まり、にぎやかに話をしている人たち、運動場で野球をしている人たち。

こんな日、木村さんは「家事をする。」とにかく疲れている。潜れる日ならば、連続して潜る。たとえ生理の日でも。休みは天候しだい。一夏で、7、8キロはやせる。疲れて食べ物がはいらないからだ。

一〇代から七〇代の人たちが潜っているが潜水病は若い人たちにも広がっている。島では恋愛結婚がほとんど。結婚しても一、二年は家の都合で一緒に暮らさない人もいる。小さい弟や妹のめんどうをみる人がいなくなるからだ。

海の静かな所を禁漁区とし、何万もの稚貝を育てている。そして、それが自然に移動するのを待つのである。

港の反対側には人家がない。黒い岩はだ、立っていると吹き飛ばされそうな強い風、紺

碧の海、まっ白い波、ここが海女の仕事場、港側とは海の色から違う。

自然に逆らえば死。生死隣接した中で営み、自然に寄りそい生きている島の人たち。

朝、島全体に流れる有線放送が、その日一日の住民の動きを決定する。

「なぜ、より危険な「潜る」を女がし、より安全と思われる舟の上での命綱引きを男が担うのですか」「東京よりかかえていった問いの一つだった。

「深く潜っているでしょ。命綱がないとあがつてくるまでたいへんだ。あげるのに力がすぐくいる」

正直いって、この問いを投げかけた時、その意気込みは失せていた。島に来てそんなに時間がたっていないのに、そう感じさせるものが、海女の言葉に、島全体にあった。

来る時の船酔いを思った。海は、私が都会生活の中で身につけたものを吐き出させたものでは、と。海に守られ、海に生きる島。

なにを言えよう、私は、生死紙一重の中で生きる人たちに、ただただ耳を傾け、見つめるだけだった。

島の女は、身がひきしまり、生き生きと魅力的で、堂々としていた。

4. 今後取り上げてほしいテーマ、
拡充してほしい欄 (56名回答)

〈テーマ〉

教育問題 21

- ・教師と生徒との関係 ・学校、PTA
- ・評価について ・臨教審 ・教科書問題

男女、家庭家族、役割分担 13

- ・女が働くということ
- ・男コトバ、女コトバ
- ・主婦と働く女性の連帯
- ・男社会と性別役割分担
- ・家庭の中での家庭科教育
- ・児童心理方面のもの (少年非行)
- ・ほのぼのとした家庭でのエピソード
- ・共働きの子として育った子の声

家庭科・共修 7

- ・共修の実践例、生徒の声
- ・授業の実践例
- ・共修に対する父親の意見
- ・一般サラリーマンの家庭および家庭科についての意識
- ・PTAと家庭科
- ・女のライフサイクルと家庭科教育の関連

くらし・衣食住 6

- ・家庭科の内容充実のため衣、食、住を詳しく分けて扱って
- ・親と子の関わりの中で、くらしの現実を
- ・食文化を子にどう教えるか
- ・生活費 (家計) ・因習、風習

高齢化社会・生涯教育 5

- ・老人問題 ・女性の生き方
- ・生涯教育について
- ・老後―新しい相互扶助を考える
- ・女と老後、老人介護

人権問題 4

- ・障害者についての問題 ・人権問題
- ・人間らしく“働き”“学び”家族と共に生きること

政治・海外の情報 4

- ・“政治の目”で日本、アジア、地球規模での連帯
- ・海外先進国 (スウェーデンなど) のくらし結婚、子ども、教育、主として家庭科
- ・日本とアメリカ ・戦争をどう伝えるか

その他

- ・毎号のテーマも一つの関連性をもたせて取り上げると頭を整理しやすい
- ・Weの読者会以外の女性を中心とした、各地のサークル活動、運動の紹介
- ・単一テーマ (結婚、学級づくりなど) コーナーによる継続的読者の交流
- ・それぞれの場で、ぶちあたっていること悩み、わからないことを出し合う特集。
- ・どうやって、それぞれの場で「仲間」を増しているかの実践

〈拡充してほしい欄〉

- ・特集欄
- ・カウンセリングの応用欄
- ・「新しい家庭科を創るために」の実践欄
- ・ページ数をふやしてほしい
- ・十字路 ・泉

5. 公開ゼミナール、夏季フォーラムに対するご意見・ご希望 (36名回答)

- ・参加したいが、日程、場所、子どもの条件が合わない 16
- ・出会いの場、連帯の場として大切
- ・講師が男性中心
- ・テーマがひきつがれていくことは、深まり発展してよい
- ・テーマが大きく、焦点がしばりきれない。表面をなでただけという印象を克服することが困難というジレンマがある。具体的なテーマにしばるのも一法
- ・教育現場の日常的な営みに流されず、根源的、根底的な思考を深め合えるような企画
- ・「ゼミ」「フォーラム」よりは、〇〇を考える会、〇〇交流会の方が親しみやすい
- ・希望する地方でも開く、小規模のものを数多く
- ・やらなくていいと思う

アンケート結果報告

読者の皆さん、ありがとうございました。

一昨年につづき、2回目のハガキによるアンケート調査をいたしましたが、8月末日までに、70名の方から回答をいただきました。ご協力下さった皆さん、ありがとうございました。その結果をここにご報告いたします。

回答者は、70名で前回に比べますと少し減りましたが、年齢構成、地域分布はほぼ同様の比率でした。職業では、前回教員が半数を占めていたのに比べて、今回は少し減っています。

回答が記述式で多岐にわたっておりましてので、一つの傾向として集計した数字を読むより、一人一人のご意見を、重視しました。

「よく読まれるのは」の質問に、52名(74%)の方が「ほとんど全部読む」と答えて下さって、編集部一同、感激すると同時に身の引きしまる思いです。

みなさんのご意見を参考にして、5年目のWeを創っていきたいと思います。

○回答者のプロフィール

〈年齢〉		〈職業〉		教員の内訳	
20代	13	教 員	30	小	2
30代	27	主 婦	15	中	9
40代	20	公務員	5	高	13
50代	5	会社員	4	大	5
60代	2	自由業	4	その他	1
		学 生	3	家庭科	20
		自営業	2		
		無 職	2		
		その他	5		

・中途半端、学術誌的な地味さが好ましい

・表紙がものたりない

・Weの字、もっとめだつように

2. よく読まれるのは(複数回数)

ほとんど全部	52
特集テーマ	12
新しい家庭科を創るために	5
発言	6
連載	17
その他(巻頭言、Weになん	10
でも、わたくしから…)	

1. デザイン・体裁は (70名回答)

①よい 41 (59%)

- ・表紙のデザイン、カラーが新鮮
- ・本文の文字が大きくてよい

②普通 26 (37%)

- ・活字がもう少し大きいと助かる
- ・内容にゆとりのあるものがほしい

③改善すべきだ 3 (4%)

- ・表紙の背文字がタテに^W_eとなったのは残念
- ・目次はタテ型の方が読みやすい
- ・巻頭言は普通の活字のものがよい
- ・中は、まだまだ活字が多すぎる

3. 既刊の中で特に印象に残ったのは

(数の多かったもの) (58名回答)

〈テーマ〉

性をどう語る	9
結婚の風景	7
離婚と子どもたち	7
育てるということ	6
産む、産まぬ	3

〈連載〉

新しい家庭科を創るために、波
カウセリング入門、霞通信、教室の窓



〈We 山形の会〉

◆しばらく休んでいましたが、サークル家庭科と合同で、「夏季フォーラム in 羽黒山」を開きました。サークル家庭科とは、庄内地区の先生方によびかけて、今年四月からスタートした有志による学習会です。この会は、家庭科の男女共学を推進するために、教科内容を検討してゆこうとするもので、月一回のペースで集まり、本音の話し合いができる、多方面からの研究を目指しています。山形地方の地理的条件から言うと、全県下のみなさんが定期的に集まって活動するのはとても難しいことですが、地区毎の組織が各地にでき、全体会としての集まりにつなげてゆければ、と思います。

開いたのは、We のフォーラムから帰ってすぐの八月十五・十六日。

「毎日の忙しさに追われ、とかく大切なことを見つめる機会を忘れがちですが、せめてこの夏休みを利用して、お互いに学び合ひましょう。内容は盛りだくさん。外へ出て吸収してきたこと、今考えなければならぬことなど、多くの問題提起があることでしよう。どうぞ多数お誘いあわせの上、羽黒山でお会いしましょう」と呼びかけました。

「案内が遅れてしまったため、またお盆の忙しい時期に重なってしまったため「残念だわ」出席したかったのよ」の声がたくさん届きました。集まったのは七人でしたが、日頃の忙しさから解放されて、この一泊二日は、盛りだくさんの濃い学習会でした。

「我々をとりまく状況」と「地域における生活の教材化」は、山形大の佐藤慶子先生。We フォーラムに参加して「を、渡辺・大場、家教連夏季集會に参加して」を、瀬尾・斎藤。中国を旅して「の」スライド上映や、We を語る座談会、最後に、これらの活動を語って、総括としました。

次回は九月十四日、We フォーラム、家教連集會の報告を、羽黒山に集えなかった人にもう一度伝えます。来年も羽黒山でぜひ、との声が出ています。

(酒田・大場広子)

〈We 大阪の会〉

◆夏休みも残り一週間となった八月二十五日神戸市立勤労会館で、大阪教育大学の岸本幸臣氏を迎えて、住教育の学習会を行いました。岸本先生からは、1、住教育をめぐる議論の活発化とその背景 2、住教育を論じる二つの視点 3、住教育の現状と問題点、これからの住教育の視点について、わかりやすくお話していただきました。特に家庭科での住教育構想(案)は、現場の教師にとって非常に参考になるものでした。お互い住教育の重要性を再認識し次回は11月17日(日)PM一時～五時、テーマー「子どもの人権」深江誠子、会場―豊中市ほたる池公民館、です。

(浅井由利子)

〈We 兵庫の会〉

◆八月二十五日の大阪の会と合同で開いた住教育を考える会は、二十名ほどの集まりでしたが、とてもいい会でした。

三十一日には、姫路で勉強会。若い先生が技術の先生とタイアップして、織機を各自に作らせて「織る」実践を報告してくれました。どこかの県の指導主事が心配するようなことなく、現場の英知で、さりげなく共修が進んでいます。

(入江一恵)

教課審スタート、

家庭科共修を答申

させよう

文部省は、「今世紀最後の教育課程改訂」に着手するため、九月十日、二十七人のメンバーによる教育課程審議会を発足させた。メンバーは別項のとおり。首相直属の臨教審を設置したため、凍結されていた教育課程改訂の審議がようやく始まる。

教育課程検討の観点としては

①社会の変化に適切に対応する教育内容の在り方 ②国民として必要とされる基礎・基本的な事項の指導を徹底するとともに、児童・生徒の能力・適性等に応じた教育を充実させるための教育内容の在り方 ③幼稚園、小学校、中学校及び高校を通じて調和と統一のある教育内容の在り方 ④「六年制中等学校」の教育内容の在り方をあげた。

①では「家庭科教育の在り方に関する検討会議」が、教課審にデータを預けているので、その決着をつけなければならない。その他学校五日制、コンピュータ等に関する教育、中

学英語の週三体制などに関する論議が予想されている。

②では、幼稚園教育要領（'64年告示）の見直し、小学校低学年の既存教科の改廃を含む再構成、小、中学校の多様な指導方法の工夫（習熟度に応じた指導を含む）、高校では科目構成の多様化方策の検討、などが挙げられている。

最終答申は、'88年六月が目途。臨教審は、'86年春に基本答申、'87年春に最終答申を出す予定だから、当分は教課審は臨教審と横並びで審議をすすめる。指導要領の作成は同時進行で、'89年四月に告示（高校は、'90年）。新教育課程は、'92年度小学校、'93年度中学校で全面实施。高校は、'94年から学年進行で実施される。あと十年がたっぷりするが、答申を発表するまでを第一次目標とすればあと三年足らずである。NHKのTVニュースでも、改革の四本柱の一つに、「家庭科男女共修」の文字が出た。私たちは運動の最終ラウンドに足を踏み入れるのである。

教育課程審議会総括委員

▽青木生子（日本女子大学長）▽秋山和夫（岡山大学教育学部長）▽東洋（東京

大教育学部長）▽江副浩正（株式会社リクルート社長）▽沖原豊（広島大学長）

▽奥田真丈（横浜国立大学教授）▽小田島哲哉（東京都立戸山高校長）▽木村尚三郎（東京大教授）▽栗原一登（日本児童演劇協会会長）▽幸田三郎（恵泉女学園短大教授）▽佐藤愛子（作家）▽鈴木誠太郎（東京都世田谷区立深沢中学校長）

▽田村哲夫（渋谷教育学園渋谷女子高校理事長・校長）▽西原春夫（早稲田大総

長）▽縫田曜子（日本放送協会解説委員）▽畑中良輔（東京芸術大名誉教授）▽広中和歌子（評論家）▽福井謙一（京都工芸繊維大学長）▽船木哲（宮崎県教委教

育長）▽古橋広之進（日大教授、日本水泳連盟会長）▽松田岩男（中京大教授）

▽村井実（慶応大教授）▽森隆夫（お茶の水女子大教育学部長）▽諸井虔（秩父セメント社長）▽諸澤正道（国立科学博物館長）▽柳下昭夫（東京都文京区立誠

之小学校長）▽山口薫（東京学芸大教授）

'86年夏ごろには、定員いっぱい（四十八人）に拡充、臨時委員も加えて六十人規模にするとき。

彼

運動の小さな赤い実

半田 たつ子



七月十九日、臨教審の有田一寿第三部会長は、都道府県教委の付属機関として、「教育陪審」制度新設を提案した。これは教員の「試補制度」「事前申し込み制度」の導入とともに論議を呼んでいるが、いま教師である人は、有田氏が作成・公開したメモをどう読むのだろうか。メモは、次の文で始まる。

「戦後の教育において、学校の荒廃が始まる前に教師の荒廃が始まっていたと指摘できる。ストライキによる授業放棄、赤旗を立てての教育委員会前での坐り込み、気に入らぬ（組合推薦でない）校長の着任拒否闘争、黙秘戦術、校長いじめ（耳ひっぱり、耳元でメガホンでの怒号）組合脱退者に対する村八分——等々、数えあげれば数限りなく例示できる。子供に対して模範を示さなければならぬ立場の教師が、使命観、寛容、譲り合い、謙虚、礼儀、信頼などの倫理感を持たずに効果ある教育の実践が行われるわけがない」。

そして「教師は労働者である」と宣言した人達に教師の倫理を問うのは、お門違いかもしれないが「子供のため」に黙って見逃せない。犯罪を犯せば処分されるが、犯罪を犯してはいないが、教師と

して教壇に立たせることができない教師には、教育陪審の制度を作らねばならない、と言うのである。

「臨教審を監視し、ひろく子ども、父母、教師の声にもとづき、女性の立場から具体的な教育改革案を提言」することを目的に、四月以来活動を続けてきた「女性による民間教育審議会」は、タイムニングを合わせて九月、十月は教員養成・採用の諸問題を取り上げた。

九月三日はその一回目の審議会。ゲストとして、国民教育研究所所員代表伊ヶ崎暁生、雑誌「教員養成セミナー」編集者津久井洋の両氏と、教師を目ざし勉強中の大学生、採用試験を受けたばかりの人、合格して教師になった人、落ちた人など若い男女六人を招いた。非常に充実し、中身の濃い審議会で、司会をした私も満たされた。ゲスト・審議メンバー・傍聴者、約六十名の学習にとどめておくのは、余りに惜しく、その一端を紹介したい。

伊ヶ崎氏は「教育改革とは、基本的に教師を激励し、展望を持たせるものでなければならない。それなのに臨教審は徹底的に教師不信。陪審制度創設など、まるで教師を罪人扱いしている。これではますます教師は事なかれ主義に陥るだろう」と語り出された。社会状況の変化に対応した子育てが、親も教師も難しい時代。それでも、教育は教師にかかっている。私たちが望むのは、①薄い教科書を厚く教えられる、そのために努力する ②子供の発するサインを敏感にキャッチできる ③人間理解が深く、文学に親しみ、自身の人間形成をする ④個性豊かな ⑤自主性と集団性の両面を持つた、教師である、と。

若い人たちの発言も、短時間に核心をついた内容で、今いかに教員養成・採用が歪められているか、その実態を浮き彫りにした。そ

の中で、最も私の心を洗ったのは、ある私立大四年のO君の言葉だった。首をかしげるような採用試験の一次にパスし、二次を受けたばかりの人、教員採用率の高さで脚光を浴びているある私大の教育のおかしさを訴えた人に続いて、彼は自らを「採用試験に受かるための教育をしない大学で、教員を志す学生」と規定した。

「教員になるということは、ぼくにとって学校に乗り込んでいくことだ。先の二人に負けないで。果たして乗り込んでいけるかどうかは自分自身の問題だ。教員養成のための大学のおかしさに対して、ぼくは、『当事者は大学生でしょ』と言いたい。学生が怒らなければ大学は変わらない。大学生のイメージも、学校のイメージも、自分でふくらませなければカラは破れない」と言い切ったのだ。ひとのせいにすんなよ、自分の問題でしょ。すがすがしい言葉だった。

九月九日の朝日新聞一面トップは「臨教審義務教育九年は維持、教員の質向上柱に」。タテ三つに分かれた記事のまん中に「駆け込みラッシュつくば万博最高潮32万人閉会へあと一週間。左は連載『ハッピー・ニッポン』第2部の最終回で『新軍国主義? バラバラ個人はどう向かい合う、力に抵抗できるか』。そして八月十五日の曽根首相の靖国神社公式参拝の写真を載せている。これが、まさに日本の現在なのだ。

おおらかに「ハッピー・ニッポン」に浸り、自分を捨ててまで国のためなんてご免、と思っている人たち。権力者に足を引っ張られはしないのか。半世紀の昔、人々が戦争に巻き込まれていったのと同じように。「ハッピー・ニッポン」この回の筆者石川真澄編集委員は、「個人主義が、もし自分たちの『ハッピー』さを守ろうとするのなら、ばらばらでは駄目だろう。互いに別々の自分の利益があ

ることを認め合ったうえで、手をつなぐことが必要になるかもしれない」と遠慮がちに書いているが……。

「自分らしさをこそ―私がわたしであるために―」というフォーラムのテーマを新聞で見て、**We**がなにものかとも存じないまま、フォーラムに参加された方たちがあつた。ほとんどの方が、すてきな体験をした、と喜んで下さった。人々が今、いかに自分らしい生き方を望んでいるかを知る。そう、やつと個が芽ぶき初めたことを知る。戦後四〇年にして。これが、民主主義の実りなのかもしれない。しかし、てんでにさまざまの方向を向き、あくまでも「自分」に固執しようとする人が公へのまなざしを失っている間に、着々と国家の政策の手が打たれていく。足もとをすくわれるのはもう御免だ。若い教師の井沢佳子さんは、フォーラム参加のアンケートにこう書いた。「自由な自己表現から脱け出し、その表現をはばむ大きな体制とか、圧力とかいった共通の問題をともに意識しあう、発見しあう場としての**We**もさらにつくっていききたい」「責任のない表現は、自己満足だけに終わり、大きな実りは少ないと思う」と。私たちは、疑問を抱き、批判する力を確かに育てた。これも戦後民主主義の実りだ。だが、それは文句は言うが責任は取りたくない、という類のものではないか。ぼくが当事者。こうありたい、改革したいイメージそのものを、自分でふくらませなければ、言ったO君。自由な自己表現をはばむ体制や圧力を、意識し発見しあう場としての**We**をつくらうと提言した井沢さん。さわやかだ。文句を言うが責任もとる。個への埋没からぬけ出し、状況をつかむ。改革のイメージをふくらませ、カラを破る力とする。この難問をあえて生きること、運動は赤い小さな実を結ぶのだろう。



◆半田さん・馬場さんへ

We、フォーラム、お疲れさまでした。

フォーラムに参加する度に自分が変わってきているなっと思えます。初めての時は、吉田清彦さんにグサツと刺された通り、教師のイヤラシサみたいなものを、自分

もまたしつかりもっていて、発言したいことがムラムラありました。そしてまた、恥ずかしげもなく発言してました。

でも、二回目(去年)は少し冷静になりました。今回の三回目は、発言したいと思わなくなりました(特に大きい集団であればある程)。それは決して進歩でもなければ後退でもなく、だんだん素直に他の人の意見を聞けるように

なったんじやないかと思っています。

心の中で、「あの人何いってんだかちつとも届いてこないなあ」とか、「そうか、そういう考え方もあるんだ」と発見したりしながら、自分自身を確かめているような感じです。

青木悦さんのお話の中では、何回も涙があふれそうになりました。特に、息子さんが、紅茶を入れる悦さんに、「悦ちゃん、悪いねえ」と言ったという話では、お

かしくて笑いながら泣けてしまっただ。とても暖かい人間関係がそこに凝縮されているような気がしたのかナと、今思うのですが……。人間ってがまんしてる時や、突っ張って立ってる時より、暖かさを感じてホッとする時に泣けるん

でしようか。私は泣き虫で、そんな時につい涙が出てきてしまします。

この春のフォーラムで、学校に對して鋭いつきつけをした方がいましたよね。教師である私は、それに答えられなかった。半田さんがそれに対して、「一口で答えられない複雑な問題をかかえているのではないか」というような言葉

を、まとめて言われた時、ポロリと涙がこぼれてしまつて、あわててハンカチを取り出しました。

その後、彼女には帰りがけ少し話して帰りましたが、正直言つて、今の教育体制の中で真の教育をすすめていくことは本当にしんどいと思います。これにも色々な考え

があるとは思いますが、生きる喜びや学が喜びを味わせてあげられたら……と思ひながら、目先の問題に押しまぐられ、上から押しよせてくる管理の波をはねのける力もなく、じわりじわりと自分がやせ衰えていってしまうのを感じ

ると本当に悲しくなります。

今の身障児学級の教育だつて、全てが善であるわけはなく、押し

つけもあるし、自己矛盾もたくさんあります……。本当に教師を続けてよいのかナという思いはなかなか頭を離れません。じゃあ、何ならできるのか。これから考えていかなければならない気がします。

指紋押捺の分科会に成行きで参加し、ビデオを見る破目になつて、やっぱりしんどかつた。わかりきつていたので逃げたい気もあったのですが……。私たち日本人は加害者なんですよね。何とかしなくちゃいけない。何ができるのか。……

最後の日の中嶋里美さんの「一人運動」という元氣のよいお話に、何となく憂鬱になっていた気持ちがちが少し軽くなりました。当座はやっぱり嫌煙・禁煙教育が一番私のからだを突き動かすので、言い続けなくちゃと思つています。

全体会・分科会（私が参加した婦
り）では、Weもずいぶん煙から解
放されて過ごせるようになってき
ましたが、命を大事にして生きて
いこうとするなら、やっぱりタバ
コから離れる人が一人でも増えて
欲しいなあと思うんですよねえ
…。

（清瀬・福田縁）

◆毎号おもしろく読んでいます。

私も、二年四か月渡米していた
頃の体験から、家庭科について思
うことを投稿したくなりました。

一五歳のジョージくんは、ロス
アンゼルス生まれの日本人です。
小学校時代は、日本で暮らし、現
在は、父親の二度目の海外勤務の
ため、ニューヨーク市郊外の高校
へ通っています。

私がジョージくんの家を訪ねた
のは、親子二代に渡ってお付き合
いのある、彼の父親からりんご狩
りのお誘いを受けたからでした。

五歳の娘共々、りんごにつら

れ、喜んで訪ねた時のことです。

居間に入って、日本にはみられな
い、西洋風の飾りつけに目をとら
れていた私と反対に、娘がバツと
抱きついたのは、ハンバーガーの
形をしたクッションでした。平っ
ぺたいパンの形をしたクッショ
ンが二つくっついており、芸の細
かいことに、その二つのパンの間
には、フェルト布で形を切った、
肉、チーズと、タマネギがはさま
込まれてありました。ジョージく
んが入ってきて、「これ、ボクが
中学校の時作ったんですよ」と、
言いました。パンの上には、ゴマ
のつもりで、たくさんのフレンチ
ナッツステッチが刺されてありま
した。「これも自分でしたの？」
と思わず聞いた私に、「これをつ
けるのは、とてもむずかしくて
ね」と、ジョージくんは、真顔で
説明してくれました。「男の子に
も家庭科ってあるの？」と尋ねる
と、「ええ」と、当然だという答
えが返ってきました。

ジョージくんのように、ニュー
ヨーク郊外に住む日本人の子弟の
多くは、帰国後の受験のこともあ
って、日本人学校へ通っているの
ですが、彼の場合は、アメリカに
住んでいる以上、その国の文化
や、教育法にのるといって、ご両親
の方針で、現地の中学・高校へ通
っているのです。ハンバーグのク
ッションづくり、なんと夢があつ
て、実用的なのでしょうか。その
ジョージくんの作品を、居間に置
いている、ご両親の愛情も立派な
ものです。遊びのある家庭科―日
本だったら、さしずめ、のり巻ク
ッションとか、いえいえのり巻に
とらわれず、ドーナツでも、ハン
バーグでも、楽しい家庭科でのク
ッションづくりがあれば、たとえ、
ワンピースが作れなくても、女の
子でも、男の子でも、喜んで参加
していけると思ったのです。

ここで思い出すのが、娘のサン
フランシスコの保育園や、ニュー
ヨークの幼稚園時代のことです。

園での生活時間の中には、月に一
回は必ず、クッキーづくり、サラ
ダづくりがありました。すいじの
部屋をかりて、きゅうりやにんじ
ん、りんごを切ったり、レタスを
ちぎったりして、サラダを作るの
です。幼稚園には週一回、料理の
時間があり、ファニー・パニー・
サラダとか、グッド・アンド・フ
アンサラダなど、命名つきで、男
の子・女の子共に喜んで作ってい
ました。コップやお皿は、すべて
紙なので、片付けに大して手間は
とりません。約二〇人の子供が、
それぞれ分担してやるのです。娘
は、ミスして、ナイフで手を切っ
たらしいのですが、問うと、恥ず
かしそうに、「ちょっと切っただ
け」と答えたので、これがもし家
なら大騒ぎするのに少しおかし
くなってしまいました。小さい時
から、楽しく、作ることを教われ
ば、女の仕事・男の仕事といわな
いのにと、考えています。

（豊中・加藤曜子）



情 報 の 頁

◆集会◆ 家庭科の男女共修をすすめる会

「2000年に向けて私たちの戦略」

・日時 10月19日(土) pm 1時半～4時半

・所 婦選会館(☎03-370-0238 国電新宿駅下車8分)

・内容 「政府間会議、2000年に向けての戦略の解説」有馬真貴子、「教課審発足に伴う新しい運動の提案」など

・参加費 500円 ・連絡先 ウイ書房

◆講座◆ 「子どもの心と体はいま……」

・「病気やケガは体が生きていることの表現、体が発している信号……ともにのびやかに生きていくための新しい体観^{からだ観}、生命観がいま必要とされているのでは」と。

・10月10日(木) 子どもとのつきあい方 毛利

子来(小児科医)、岡島治夫(CSヨガ道場主宰)、末永蒼生(色彩心理研究者)

・11月14日(木) 親ができる「手当」 岡島末永

・12月12日(木) 子どもの絵でわかる心と体

(幼児から思春期まで) 末永、岡島

各回とも pm 1時半～4時

・会場 労音会館(国電水道橋駅下車)

・受講料 一回一五〇〇円(三回通し四千円)

・定員 80名(保育室あり)

・問合せ先 「子どもの心と体はいま……」事務局

〒100千代田区神田神保町1-42
梨の木舎内 ☎03-292-0401

◆市民読本◆ 「水と食—くらしと文明を考える」

くらしと環境を考える会

・内容 「水・土を中心に、身のまわりにひそむ危機」に目をすえ、自分で自分の生活を改めていくことがどんなに大切かを、次の世代に訴えるとともに、大人たちにもそのきっかけをつかんでいただきたい「そんな思いで作られた」。

「現代社会にひそむ危険」「水と土の科学」「生活のなかの合成化学物質」「水と食をめぐる現代文明」など

・B5判・104頁 550円

・連絡先 くらしと環境を考える会

〒227横浜市緑区市が尾1-161-18 生活クラブ生協内 ☎045-971-2641

◆パンフレット◆ 反農薬シリーズ①あぶな

いくん蒸剤! ②やめさせよう! 身近に迫る除草剤

・内容 運動の中で知ったこと、問題点などをまとめて、より多くの人びとに知らせたい、という思いで作られた

①「くん蒸剤とは」「くん蒸剤の危険性」「くん蒸剤の残留」「農水省の対応」「くん蒸剤は必要か」「資料」

②「除草剤の問題点」「除草剤の汚染」「除草剤の毒性」「除草剤を使わないために」

①—59頁 250円、②—83頁 300円(送料別)

・申込み先 反農薬東京グループ

〒160新宿区新宿7-26-24 パプテスト会館3F NSC気付 ☎03-202-8031

◆報告書◆ 「女性雑誌の日米墨比較研究」

女性雑誌研究会

・内容 世界の女性雑誌文化の「震源地」アメリカ、そのアメリカ文化の直接的支配下にあるメキシコ、同じく欧米女性文化の影響を受けつつそれらとは微妙に異なる日本の各女性雑誌を、同じモノサシで比較分析。女性雑誌で展開される女性文化の世界的画

一化現象の実体把握と、日、米、墨三国の文化的伝統の違いを探っている。

分析から、メキシコ女性誌の「欧米憧憬」性、アメリカの「健康と実用」志向、日本の「イメージ消費」志向などを指摘。

「研究の目的と意義」「日米墨三国における女性雑誌界の現状」「日米墨女性雑誌の誌面構成分析」「編集者インタビュー」「登場人物分析」「COSMOPOLITAN」誌の三国比較」等

・連絡先 〒194-01 東京都町田市金井町二一六〇 和光大学 井上研究室気付

☎044-988-1431(内)381

◆呼びかけ◆ 「長崎・障害児就学訴訟を支える会」への参加を

長崎県諫早市の峯友美香ちゃん十歳。長崎県教委・諫早市教委は、美香ちゃんが障害児であることを理由に、地域の小学校に学籍を与えず、養護学校を強制している。

話し合いに応じようとしないうち教委に対し峯友さんは82年、学校決定処分取消を求め、長崎地裁に提訴。

全国の何人・何百人の美香ちゃんを地域の小学校の教室に取り戻すための、そして、

真の人間教育・平和教育を実現するための裁判でもある。「会」への参加を！

・会費 年間一〇三三〇円

・連絡先 長崎・障害児就学訴訟を支える会 〒160 東京都新宿区四谷4-1 小島ビル3F 四谷共同法律事務所内 ☎03-353-7774

◆女の手帳◆ '86年「月日ノオト」

・女の手帳「ネットワーク・ノオト」終刊後、メンバーの一人がいろいろな協力を得てつくった新しい女の手帳。日常生活の行動記録、からだの記録ができ、暮らしに必要な SOS インフォメーションを中心とした情報をもり込む。

うすくて軽い、表紙は赤・黄・黒。

・一冊800円(送料170円)

・申し込先 月日の種会 〒160 新宿区信濃町

1 横山ビル2 ☎03-353-3595

◆お近くの方、いらっしゃいませんか◆

◎10月23日(水)pm 6時～8時半・『婦人の10年』の歩みと今後一男女が認めあう社会をつくるために・所一江東区勤労福祉会館

・連絡先一都亀戸労政事務所 ☎682-6321

◎10月25日(金)pm 1時半～3時半・『生活の質

を考える」・所一三明橋地区公民館・連絡先一茨城県牛久町中央公民館 ☎2938-73-2111(内)387

◎10月26日(土)pm 1時半～4時40分・「子どもへの願いを実現するには」・所一豊科北中学校体育館・連絡先一長野県民主教育をすすめる南安地区会議

◎10月29日(水)am 10時～12時・「女性のライフサイクル」・所、連絡先一藤沢公民館 ☎04-22-0019

◎11月6日(木)pm 1時半～3時半・「女と男の豊かな生き方」・所、連絡先一川崎市高津公民館 ☎04-383-7411

◎11月7日(木)am 10時～12時・「これからの家庭」ささえ合いつつひとり立つ』・所、連絡先一藤沢市明治公民館 ☎04-34-3444

(いずれも講師、半田たつ子、㊦必ず主催者側に参加等についてお問合せ下さい)

◆傍聴にいらっしゃいませんか◆ 「女性による民間教育審議会」公開審議会

・テーマ「親がつけてほしい学力とは何か」・日時 11月5日(火)pm 6時～8時半・所一新宿区婦人情報センター(都営地下鉄新宿線曙橋下車5分)・問合せ先 ☎03-268-7988

■北海道 臨教審道公聴会と道民シンポ
(毎日、タイムス 8/22)

札幌市で21日開かれた公聴会には、小林純幸札幌南高校長ら八人が意見を述べたが、内四人が教員の資質向上を求める意見を述べたほか、へき地教育の改善を求める声もあったが、大半は答申内容に沿った意見で、新鮮味を欠く内容となった。この公聴会に対抗して、市民レベルで教育改革を考えようというシンポジウムが、同日同市で開かれた。北教組などが中心となった草の根からの教育改革の呼びかけに、父母、教師、自営業者、サラリーマン、学生など約二百四十人が参加。討論では①三十五人学級の実現 ②男女平等教育 ③少数民族、在日韓国人、障害者への正しい理解などを求める意見が多かった。公聴会当日、市民レベルの教育シンポジウムが開かれたのは全国で初めて。

■岩手 これからは男性の論理修正する時代に(岩手日報 8/29)

盛岡市で開かれた岩手婦人の集いで「国連婦人の十年の最終年にあたって」のテーマで講演した弁護士の高美雅子さんは、「この十年、判例を見ても、足もとをしっかりと

踏みしめて生きている女性が多くなった。これからは、男に追いつけ追いこせの男性中心の考え方ではなく、女性の目で男性の論理を修正していく時代です」と語った。

(福岡悦子)

■新潟 「こども相談センター」順調なすべり出し(新潟日報 9/5)

就学前幼児の障害相談を目的に設立されて半年、相談件数が着実に増えてきている。訓練指導のための設備・相談スタッフ、療育アドバイザーなどの態勢をととのえ、今後は、「センターだより」を発行して、障害に悩む親子を掘り起こし、適切な助言指導を行っていくことにしている。

(山口久子)

■栃木 県立高退学理由で「進路変更」がトップ(下野 8/21)

県教委の調査によると、59年度、県立高退学者は八百七十四人と過去最高になったが、これまで退学理由の上位を占めていた「学業不振」や「問題行動」が後退し、「進路変更」「学校生活・学校不適応」が半数以上を占めて、九割を超す高校進学率の中で、学校生活になじめない生徒が急増した。この結果について、教委は「高校進学者の中には、目的意識や勉強に意欲の持てない生徒が増えてお

り、これらが学校生活不適応につながっているのではないか」としている。退学後の動向では六五%が「就職する」と答え、残りが各種学校などとなっている。

(坂本昌子)

■千葉 いじめられっ子の転校認める(毎日 8/4)

県教委は「いじめによって心身の安全が脅かされた場合は条件つきで転校を認める」との通達を出した。「子どもの人権を考えて慎重に運用すべきと考えている。あくまでも緊急避難的措置で、乱用は避けたい」としているが、教育関係者の中には「一種の対症療法でしかなく、教育権の放棄につながりかねない」とする声もあり、各市町村教委の対応が注目される。

(木田直子)

■神奈川 市民の側から治君の報告書作り(朝日 7/7)

今年二月、杉本治君が飛び降り自殺した事件をめぐる、横浜市西区で「考える集い」(主催・管理教育から学校を解放する自立センター 野本三吉代表)が開かれ、教師・学生・父母ら約百二十人が参加、治君の両親も姿を見せ、思いのほどを訴えた。

今回の集いは、事件後の市教委や学校からの「報告書」の内容に疑問を感じ、「市教委

まかせにせず、自分たちで自分の問題として考え直したい」との思いから生まれたが、今後は「考える会」として、市民の側からの報告書作りを進めることになった。治君の父邦平さんは「責任の一端は親にもある。でも担任教師の『影響』も大きかったと思う。学校からの報告書では、息子が思いやりのない特異な子と強調する資料ばかりだし、これで大筋了解してほしいという市教委の態度は疑問」と話す。又この事件とあい前後して長男に中学校で「自殺」された父親は、「家庭で思い当たる節もない。学校もない、という。死んでいた場所について、学校の説明はくるくる変わるし、当時の説明もないまま。今の学校はどうなっているんだろう」と。(山口里子)

■福井 家族もつと面会を (福井9/12)

福井市鹿俣町の特別養護老人ホーム・朝倉苑でアンケート調査をしたところ、「施設での生活には満足しているが、家族らの面会が少ないのは寂しく、若い世代との交流を楽しみにしている」ことが分かった。朝倉苑では、入苑期間が長くなるにつれて、家族らの面会の足も遠のき、入苑者の一部にはいまだに「うは捨て山」的に施設

をとらえている人もいるという。したがって、同情の目で見える同年配の人たちの慰問は歓迎されないようだ。「福祉は物や金だけで解決できるものではない。施設暮らしの老人も、一人の人間として人権もあり、地域住民の一人でもある。心と心の通う福祉を目指して、真剣に考えるべきだ。調査結果を素直に受け止めてほしい」と北苑長は話している。

(山崎京子)

□電力3社が19億円寄付 (朝日9/13)

敦賀市は企業からの寄付金に頼って、来年度開校する敦賀女子短大の建設必要額の96%を北陸電力などの電力3社が負担したことで、高木孝一市長は「地元の振興は企業と協力しなければできない。これで原発行政がゆがむことは決してない」との見解を明らかにしたが、反原発派の市民からは、「行政が原発に取り込まれて、モノが言いにくくなるのは必然」と批判、市民の間に波紋を広げることになりそう。

(高嶋みどり)

■愛知 雇用機会均等法、どうなる女性の労働 (中日6/20)

「なごや女性会議85」の雇用分科会において、均等法を巡って、女性が働き続ける労働環境をつくるにはどうしたらいいかの話し合いの

中で、現に深夜勤務のある看護婦や電話交換手は、「均等法というところかっこいいが、今の制度さえ守られていないのに、これからどうなるのか、均等法でこれ以上労働条件を悪化させないように運動しよう」と呼びかけた。

一方「女性問題のしわ寄せは子どもにも」と保母二十年の女性は、「子どもは、父親、母親に接したがつている。親が余裕ある接し方ができるよう、男性も含めた労働時間の短縮を」と訴えた。

(宇野佳子)

□業者テストの監督も教師の公務 (毎日8/31)

春日井市立知多中で昨年九月、業者テストの監督をしていた同中教諭が、男子生徒に足でけられ、胸の骨にひびが入った事件について、同市教委は業者テストの監督も「公務の一環」と認める初の判断。県下では中学生向けの業者テストが高校進学へのランク分けをする実質上の判断基準にされており、各方面に波紋を投げかけそう。これまで実質的には進路指導の手段とはいえ、業者テストの監督は公務としては認められていず、学校をテスト会場として本来の目的外に使用しながら、教委や校長も黙認することが慣例で、責任の所在は宙に浮いたままだった。(岡本のり子)

の教育課程審議会が12年ぶりに発足した。文部省は「個性重視の教育」を掲げた臨教審の動向と、答申内容を踏まえ、3年後の答申を目ざしている。(9・10)

◆ 拒否・留保やまず6000人 ◆

8月末現在、指紋押捺を拒否あるいは留保する件数は6000人を超えた。7月末の3倍近い数で、指紋押捺制度への外国人の抵抗感がいかに強いかを物語っている。

7、8月をつうじて、各自治体からの告発は1件もないが、3カ月の告発留保期間が過ぎたとき、どう対応するか注目される。(9・1)

◆ 外で働く女性1500万人突破 ◆

労働省が発表した「60年版婦人労働の実情」(婦人労働白書)によると、企業などで働く女子雇用労働者が昨年1500万人を突破し、家事専業者を初めて上回った。また離職しても失業者として労働市場にとどまる女性が増えているため、完全失業率は2・8%と、17年ぶりに男子(2・7%)を上回り、この30年間の最高になった。

今年の婦人白書は欧米先進国との比較をいくつか挙げているが、パートタイマーの労働時間が長く、常用労働者との賃金格差も大きいなど、わが国の働く女性の労働条件は、欧米に比べ、なお厳しい。(9・1)

◆ 雇用均等法、反応はいま一つ ◆

日本リクルートセンターがまとめた均等法に関する企業の意見調査結果によると、4年制大卒女子の採用は「変わらない」が半数、「ふえる」が25%で、「減少する」「採用しない」19%を上回った。しかし、全体の58%を占める現在大卒女子を公募していない企業のうち、7割近くが「難しい」「できない」と答えている。また、性別によって職種を限定して募集するこれまでの方法を変えたり、昇進昇格の基準を男女同一にするのは難しいと感じている企業も多い。一方女子社員に対する調査では、「経営幹部になるまでがんばる」は2%、中間管理職をめざす人が12%、「管理職には関心がない」が68%。勤続意識については、「結婚するまで」が24%、「子どもができるまで」と「子どもができて働く」が16%、

「子どもができたらずめ、大きくなったらず就職したい」が14%、「今の職場で働き続けるつもりがない」が20%。(9・4)

◆ 精神病院に連れ去り20年 ◆

ジュネーブを訪れている社会党の人権調査団は、名古屋の精神病院で起きた人権侵害事件を明らかにした。

40年11月23日。名古屋市で日雇い労働者をしていたAさんは、現場で左足をいため仕事ができなくなったので、四日市の生家に帰ろうと名鉄新名古屋駅構内に入ったが、激痛で動けなくなったところ、制服の男たちによって、名古屋市内の精神病院に連れて行かれた。Aさんは何度か親にあてた手紙を病院内の私設郵便局に出したが、届いていない。同党の調べによると、Aさんの入院は正規の手続きを踏んでおらず、いわゆる“ヤミ入院”を示す一例と確信を得ている。(8・25)

◆ 板门店越え故郷へ——南北朝鮮 ◆

韓国と朝鮮民主主義人民共和国に約1千万人いるといわれる離散家族の再会を願う「故郷訪問団」と南北朝鮮の文化交流を目指す「芸術公演団」は、南北朝鮮訪問団を作り、9月20日午前9時半、板门店の軍事境界線を越え、それぞれソウルと平壤に向かった。訪問団は151人ずつ、滞在日程は3泊4日。関係者は、この訪問によって南北が本当に近い関係になる第一歩を踏み出したと評価、「今後も南北相互訪問を拡大したい」との希望を表明した。(9・21)

◆ VDT作業1日4時間以内に ◆

衛生学の専門家や医師でつくる日本産業衛生学会の「VDT(オフィスオートメーション機器の表示装置)作業に関する検討委員会」は職場環境、健康管理面での対策をまとめた。①1日の作業時間を4時間以内とする②50分ごとに少なくとも10分の作業休止時間を置く③妊婦のVDT作業への配置は避ける④1日のキーボードのタッチ回数を4万回以下とする、などを盛り込んでいる。またパートタイマーや派遣労働者、下請労働者に依存することを避け、時間外や深夜勤での作業をしないよう提言している。(9・7)



◆ 日の丸・君が代徹底——文部省 ◆

文部省は9月5日、全国の公立小・中・高校がこの春の卒業・入学式に「日の丸」を掲揚したか、「君が代」を斉唱したかについて、都道府県、政令指定都市別の調査結果を公表、併せて実施率の低い地域の実態を問題として、各教育委員会に対し「国旗と国歌の適切な取り扱いの徹底」を求める初等中等教育局長名の通知を送った。この問題で文部省が通知を出すのは初めて。

文部省がこの措置に踏み切った背景として、自民党を中心にこの問題をめぐる決議や働きかけが昨年から今年にかけて急速に強まっている事実がある。

日教組が反対するため「国旗」の掲揚も「国歌」の斉唱もできないといわれてきたが、平均すると義務教育では「日の丸」が90%を超え、「君が代」も70%に達している。むしろ、これらに関して日教組はもう有効な力を持たなくなったとみられる。

千葉県では、日常的に「日の丸」を掲げる学校が数多くあり、毎日始業前に「君が代」を放送しながら「日の丸」を掲げる。生徒は、階段でも廊下でも、何をしていても直立不動の姿勢を取らなければならない。夕方も同様。

群馬県では、昨年県の高教員採用試験の面接試験で、「校長と意見が異なった時、日の丸の掲揚や君が代斉唱に従うか」などの質問があり、受験生から反発が起きた。

福岡県教委では、今年6月、卒業式や入学式で「君が代」斉唱の際、起立しなかった県立高校の教員65人を戒告、文書訓告などの処分にし、県高教組との対立が深まっている。

国が「日の丸」「君が代」についての国民的な合意を形成したいと考えるなら、そのための努力は、まず大人に向けておこなわれるべきだ。判断力も固まらず、反問するすべもない子どもたちに、理屈ぬきで強

制する今回のやり方は、統制主義・画一主義が進み、教育の場で苦しみ、あえいでいる子どもや教師に対し、あまりに傲慢に過ぎないか。（朝日—以下同じ—9・6,7）

◆ 5年で18兆4千億円—新防衛計画 ◆

新しい「中期防衛力整備計画」（61—65年度）の規模をめぐる政府・自民党の協議は、9月18日未明、60年度ベースで総額18兆4千億円で決着、政府・与党首脳会議で了承し、同日の臨時閣議で正式に決まった。この額は向こう5年間の国民総生産（GNP）見通しの1.038%に当たり、政府が撤廃を見送った「GNP1%枠」の閣議決定とは矛盾する。大蔵省の試算によると計画実現のためには毎年度の予算を平均7・9%増で組まねばならない計算となり、ここ数年以上の突出を認めることになる。

中曽根首相が、「1%枠尊重」を言明した矢先、さらに防衛力の整備を政府計画に格上げしただけに、なし崩しの1%枠突破に踏み出したとみられる。（9・18）

◆ 教員の「資質」向上に乗り出す臨教審 ◆

臨時教育審議会は9月7・8日に埼玉県嵐山町の国立婦人教育会館で合宿集中審議を行った。6歳児就学、年限9年の現行の義務教育体系について、改革を行わず維持することで一致。6・3・3・4制の学校体系全体についても現行を基本とし、多様化・弾力化をめざす。6年制中等学校や高校修業年限の弾力化（現行4年の定時制高校を3年以上とするなど）を検討する。

教員の資質向上策では、教育実習の見直し、教員志願者の早期登録制度、初任者研修制度、教職適格審査会（教育陪審）設置などの改革策を提案した。（9・9）

◆ 教育課程審議会発足 ◆

21世紀に向けて幼稚園から高校までの教育課程を抜本的に再編成するため、文部省



《表紙のことば—加藤由美子》

春にも夏にも“みのり”はそれなりにあるけど、やっぱり“みのり”は秋。今更のように、瑞穂の国との実感。今頃の季節、町中が刈りとった稲の、日向くさいにおいに包まれた子供の頃を思い出しています。

★Weバックナンバーのご案内★

- 〈vol.1〉 1月号 男と女の新しいかわりを
 〈vol.2〉 4月号 教師は、今こそ声を
 6月号 はたらくことをめぐって
 7月号 コミュニケーション
 8・9月号 老いを考える
 10月号 今、教科書問題を問う
 11月号 食べるといふこと
 12月号 着るということ
 83年増 学校はよみがえり得るか
 1月号 「1984年」
 2・3月号 住むということ
 〈vol.3〉 4月号 PTAって何
 5月号 いまこそ、家庭科を問う
 6月号 地域に生きる
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 10月号 支え合いつつ ひとり立つ
 11月号 “病む”ということ
 12月号 つきあいを考える
 84年増 自分らしさをこそ
 1月号 学び・教えるとは
 2・3月号 “育てる”ということ
 〈vol.4〉 4月号 性はどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熟く女の時代

◆給食室の改装工事で、目下我家の小学生はお弁当持参。たまのことならまだしも、毎日となると、こちらも頭をつかう。負担にも思う。子どものほうは大喜びで、楽しい時間をすごしているようです。ところが中には仕方なくホカホカでないホカホカ弁当や、カップラーメンですごくさなくてはならない子もいると聞くと、何事もいい、悪いだけでは判断できないな—と考えるでしうのです。(青木)

◆小学生のころの国の経済がいつも「赤字」と報道されていたのを、子供ながらに心配していた。そのころの予算が二兆円ぐらだったと思う。来年度予算の概算要求が五十六兆三千九百億円だと。数字がまず頭からはみ出すが、その膨みようにも驚く。まして、防衛費が三兆三千億円。年末の大蔵原案は五十四兆円台にするというが、直接生活に関わる部分を削るのだろう。ああ、腹が立つ。(中野)

◆半田編集長が世界婦人会議NGOフォーラムに参加のため、ナイロビに出かけたのは先月号の報告でご存じの通り。そのため、この号は、私が担当しました。編集兼……兼……で過ごしてきましたが、今回あらたな「責任」を肩に感じ、違った角度からのWe作りを経験しました。

♥残暑のきびしかった今年は昨年より五日遅れて、九月二十三日に木犀の香を聴きました。夫がいたずら半分に育てたへちま三本の棚からは、60糎余りの実が十数本垂れ下がりました。この中の僅かな土で養分を供給できるのかと鉢を持ち上げてみると、見事な根がその穴から土に伸びているのでした。東京でも味わう自然の恵みの不思議さ・ありがたさ。空はいよいよ青く……
 ♥次号は「人間と土を生かす」がテーマです。(半田)

新しい家庭科—

発行所/(有)ワイ書房

Vol. 4 No. 8 1985年10月20日発行
 ¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)
 編集兼発行人/半田たつ子

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 振替 東京6-59867
 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

読者とのネットワークでつくる新しいタイプの暮らしの総合雑誌

季刊 **生活倶楽部** 9号10月発行 新編集特別号

総特集 暮らしをひらく 生き活きネットワーク101

——生き方、暮らし方を変えたいあなたへ101人のメッセージ

■写真・イラストも
まじえた立体編集



- 女たちのスペースをつくりたいあなたへ
- 農薬を使わない野菜づくりをはじめたいあなたへ
- 学校給食をかえたいあなたへ
- 絵本づくりをはじめたいあなたへ

—— など、などレポートとメッセージを満載!! 特大号 A 5判256ページ 定価960円

生活クラブ生協連合事業部広報室・発行 〒156 東京都世田谷区宮坂2-26-17 ☎03-706-0039

ご注文は、最寄りの書店に。(地方小出版流通センター扱)
ウィ書房に直接お申し込みの場合は、送料をお添えの上振替で。
182 東京都調布市西つじヶ丘2-1-25-14
☎03(3226)1380 振替 東京六三六七
ウィ書房

まだ解明されてない46判・344頁・定価1500円・送料300円
ネットワーク／ある不幸な事件を、それが人間関係の美だと
くも衝動的な本／これは、その中から生まれた人間の美し

人間不思議

半田たけ子著

管理体制に86判・224頁・定価1300円・送料250円
現場にスポットを当て、教師の現実を鋭くえぐる本

ちゅうもん不思議

長谷川孝著

旭川	富貴堂	三省堂本店、書泉グラン	竹中書店、中日書房、きた	舞鶴	舞鶴堂
札幌	京栄堂書店	デ、東京堂、八重洲ブック	やま書店、丸山書店	和歌山	宇治書店
札幌	北東京堂書店	センター<豊島>池袋書店		海老名	紀勢堂書店
小笠原	矢野書店	紀文堂書店<杉並>木風舎、	江崎	南	住岡書店ジャスコ
小笠原	熊谷書店	新愛書店、ブラサード書	豊橋	橋	多屋孫書店
伊達	新生堂	店、たつみ書房、みどり書	豊橋	岡	流泉書房、ヒカリ書
函館	神田書店	店<新宿>紀伊國屋書店、	岡崎	山	店、日進堂、明文館、文進堂
青森	成田本店	模索舎、ブックスミヤ、	岡崎	張	書店、アイヨ書店、幾久書店
八戸	伊吉書院	伊野屋書店、ジョッキ<浪谷>	瀬戸	宮	イカロス書房
盛岡	東山堂、みみず	すべーす、えいがさく<葛	愛知	西	塚新西武B.C
盛岡	信栄書店	飾>宏精堂、中村書店<世	刈谷	崎	宣文堂書房
花巻	誠心房	田谷>やまべ書店、江崎書	新小	路	姫路九善
水沢	松田書店	店、ひまわり書店<練馬>	谷津	石	浅野八代書店
仙台	こどもの本の店	平形書房<北>愛京堂<板	新長	岡	学友書房
プーの家、八重洲書房、		橋>裕弘堂<江東>吉田書	上	山	ひさや書店
ボラン、萩書房、高山書		籍部<品川>シグマ図書、雄	坂	子	弘栄堂
店、金港堂、千忠書店		文堂<吉祥寺>ウニタ書店	三	雲	今井MC本店
古川	高山書店	<三鷹>第九書房、たべも	富	江	武田書店
秋田	ホビット館	の村<調布>みづほ書房、	高	島	大学前園山書店
酒田	加賀屋書店	神代書店<小金井>かこや	岡	いづみ	やまびこ書店、
山形	八文字屋	書店<府中>国府書店会	岡	紀伊	アサヒ書店、
山形	高陽堂書店	<国分寺>青野書店<国立>	松	原	草間書店
尾花	ぼんべい	増田書店富士見台店<立	福	山	岡田書店
鶴岡	鈴木書店	川>石川書店、オリオン書	山	口	西京書店
福	阿部久書店	房、泰明堂<小平>和中書	観	音	タカハシ書店
	若瀬書店	<清瀬>マルオカ書店、飯田	高	松	松岡書店
	西沢書店	書店<町田>久美堂<福生>			みやたけ書店
	松文堂	向陽館			雄徳堂徳野書店
郡山	ニシザワ	横 浜 文教堂、有隣堂、			ブックスエミール
保原	木村書店	栄松堂、ともだち書店			依光書店
藤岡	川島朝日堂	川 崎 北野書店、早川			北九州書店、白石書店、
前中	アルプス社	書店、大塚書店			黒崎ひとりわBC
中田	島村書店	相模原 中村書房			金文堂、積文館、金
水沼	至誠堂書店	ブックス上溝			進堂
結城	ツルヤB.C	鎌倉 たらば書房			丸山スコレ店
浦口	太陽堂	大船書房			江頭書店
川口	岩瀬書店、須原屋	相模大野 相模書房			菊竹文堂
	新井書店	藤沢 東松堂			みやはら書店
	ブックサトウ	厚 内田屋書房			金善堂
越谷	日野屋書店	綾 藤美堂			まつら書店
東松	比企文化社	栗 野 みどり書店			金華堂
和狭	山屋	茅ヶ崎 榎本書店			好文堂、童話館
蓮大	楓書房	小田 文泉堂			紅屋書店、金明堂
	マダタ書店	府 伊勢治書店			高校生協、三章文庫
	阿里書房	岡 太洋堂			松山書店
	ペンギン書房	静 百町森書店、吉			池田書店
	めいわどう	見書店、森上書店、宮崎			開書堂、今村書店
	ヤマトウ書店	磐田 かつみ書店			スズキ書店
	前原かつば、西	浜 北 谷島屋書店			加世田書店
武B.C、	はつらつ書房	松 遠州堂			
松田	元山書店	津 稲勝書店			
津田	大和屋書店	沼 丸サン書店			
鎌谷	岡田書店	清 水 マル書店			
佐原	多田屋	一 宮 文正堂書店			
市川	大杉書店、千里堂				
浦安	原勝書店				
東葛	ブックスさかい				
原町	井上書店				
東	<千代田> ビビ、				
日成堂、	書肆アクセス、				

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。

お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由でご指定のうえ、ご注文下さい。